昭和50年度

—勝沼バイパス発掘調査に伴う—

(伝) 岩崎館跡発掘調査報告書

1977. 3

山梨県教育委員会

序

県内では館跡，城郭，山城，烽火台等の址が数多く残っています。しかしそのほとんどは山林になりあるいは開墾され埋没しているのが現状であります。

この(伝)岩崎館跡は東山梨郡勝沼町大字下岩崎にあって，地元民からは「立広砦」と呼ばれている場所でありました。この館跡(調査前は館跡であるかどうかは不明でした)の南側の一部を勝沼バイパス(国道20号線)が通ることになり，建設に先だち発掘調査を実施したものであります。その結果，中郭部南に土塁址，また当初凹地状になっていた箇所に堀の址が検出され，また多数の土師質土器などが出土しました。調査は果樹地帯で，農家の忙しい時期とも重なり，体制及び調査期間が充分確保できず，必ずしも満足の行く調査はできませんでしたが，今後の城郭調査及び研究に何らかの意味でお役に立てば幸いに思います。

最後に本調査に際し，建設省甲府工事々務所，勝沼町教育委員会の皆様には一方ならぬご尽力とご協力をいただきましたことに対し深甚なる謝意を表します。

昭和52年3月31日

山梨県教育委員会

教育長　丸茂高男

例　言

1　本書は建設省が勝沼バイパス（国道20号線）建設工事に伴い，県教育委員会に委託をして緊急調査を実施した結果報告書である。

2　発掘調査は，昭和50年10月7 日から12月30日まで，農繁期，大型機械の搬入道路の問題もあり3時期に分けて行った。

3　本調査の調査組織は別に示すとおりである。

6　本調査の遺物の注記・復元作業は山崎金夫，佐野勝広が行い，土師質土器の実測は伊藤恒彦氏，その他の遺物は佐野，山崎が担当し，図面の墨入は遺構は山崎，土師質土器は坂本その他の遺物は佐野が行った。

7　本書の編集は山崎が行い，執筆者は目次に記した。

4　図中の土層名は別に掲げるとおりである。

5　トレンチのセクション図は頁の左側が南で，右側が北になる。

調　査　組　織

1　調査主体者　山梨県教育委員会

2　調査顧問　山本寿々雄（日本考古学協会々員）

3　調査担当者　山崎金夫（県教委文化課）

4　調　査　員　坂本美夫（日本考古学協会々員）　森本圭一（日本考古学協会々員）

5　補助調査員　佐野勝広（国士館大学）　山本敏子　中川栄祐　大野　悟

6　作　業　員　飯島保永　大野茂友　中川かね子　関本てる江　飯島絹子　藤原茂子
深沢かめよ　向山まさ江　網倉征子　依田けさ子

土　層　名

1　耕作土（表土）
2　黄褐色土層（粒子細かく粘性に富む）
3　　〃　　（細かい砂状の粒子が多く含まれている）
4　暗褐色土層（粒子粗い）
5　　〃　　（粒子細い）
6　茶褐色土層（粘性なし）
7　　〃　　（粘性に富む）
8　砂質の茶褐色土層（細かい砂・小石を多く含む）
9　鉄分を含む砂質の茶褐色土層
10　黒褐色土層（粘性なし）
11　　〃　　（粘性に富む）

12　鉄分集積層（鉄分の集積がやや少い）
13　　〃　　（　　〃　　多い）
14　鉄分を含む灰褐色泥層
15　灰褐色泥層
16　灰青色泥層
17　黒色土層（粒子が細く粘性がない）
18　砂を多く含む灰青色泥層
19　小石を含む灰青色泥層
20　土師質土器
21　攪乱
22　黄褐色土に粘土ブロック混入
23　茶褐色土に粘土ブロック混入

目　次

序
例　言
第1章　調査にいたる経過……山崎　金夫……1
第2章　遺跡の位置と環境……〃……2
第3章　調査の概要……〃……10
第4章　遺構と建物……〃……21
遺　構……〃……21
出土遺物……〃……23
第5章　土師質土器の分類……坂本　美夫……51
(1)　出土土器の特徴……〃……51
(2)　第6号トレンチ出土土師質土器の分類……〃……52
(3)　その他のトレンチ内出土土師質土器……〃……53
(4)　分類について……〃……53
第6章　土師質土器の考察……〃……56
総　括……山本寿々雄……60

挿　図　目　次

第　1　図　位　置　図……3
第　2　図　勝沼バイパス通過予定路線と(伝)岩崎館跡……4・5
第　3　図　(伝)岩崎館跡……6・7
第　4　図　(伝)岩崎館跡トレンチ設定及び遺構想定図……8・9
第　5　図　1号トレンチセクション図……12
第　6　図　2号トレンチセクション図……12
第　7　図　5号トレンチセクション図……13
第　8　図　5号トレンチ北側溝状遺構……14
第　9　図　6号トレンチ……15
第　10　図　排水暗渠遺構……16
第　11　図　9号トレンチ石積遺構……17
第　12　図　10号トレンチセクション図……18
第　13　図　10号トレンチ堀底部石組……19
第　14　図　16号トレンチセクション図……20
第　15　図　17号トレンチセクション図……20
第　16　図　18号トレンチ石組……20
第　17　図　土塁断面セクション図（7号トレンチ）……21
第　18　図　陶器・磁器……24
第　19　図　木　製　品……26
第　20　図　鉄　製　品……27
第　21　図　土塁内出土の土師質土器……27
第　22　図　6号トレンチ内土師質土器出土微細図……28
第　23　図　土師質土器……29
第　24　図　土師質土器……30
第　25　図　土師質土器……31
第　26　図　土師質土器……32
第　27　図　土師質土器……33
第　28　図　土師質土器……34
第　29　図　土師質土器……35
第　30　図　土師質土器……36
第　31　図　土師質土器……37
第　32　図　土師質土器……38
第　33　図　土師質土器……39
第　34　図　土師質土器……40
第　35　図　土師質土器……41
第　36　図　土師質土器……42

附　表　1
附　表　2

図　版　目　次

図　版　1　(伝)岩崎館跡遠景（南方より）
　　1号トレンチ
図　版　2　2号トレンチ
　　6号トレンチと遺物出土状況（拡幅前）
図　版　3　5号トレンチ
　　5号トレンチ土塁上より鉄鏃出土状況
図　版　4　6号トレンチ
　　6号トレンチ堀内土師質土器出土状況
図　版　5　6号トレンチ排水暗渠遺構
　　6号トレンチ排水暗渠遺構蓋石除去後状況
図　版　6　6号トレンチ排水暗渠遺構と水落ち部の石組の状況
　　7号トレンチ土塁址
図　版　7　7号トレンチ土塁内より土師質土器片の出土状況
　　9号トレンチ石積及び裏込石
図　版　8　10号トレンチ
　　10号トレンチ堀内
図　版　9　10号トレンチ堀内石組
　　10号トレンチ堀内木製品出土状況
図　版　10　12号トレンチ
　　18号トレンチ
図　版　11　木　製　品
　　鉄　製　品
図　版　12　陶器・磁器
　　5号トレンチ堀内出土近世瓦
　　7号トレンチ土塁内出土土師質土器
図　版　13　土師質土器1
図　版　14　土師質土器2
図　版　15　土師質土器3
図　版　16　土師質土器内外面
図　版　17　6号トレンチ出土内面墨付着の土師質土器
　　7号トレンチ表土出土陶器片
図　版　18　路線内南側の泥層
　　側壁工事中確認された泥層

第1章　調査にいたる経過

建設省の勝沼バイパス予定路線が発表されその予定路線内の埋蔵文化財の包蔵地の分布調査が，県教育委員会によって昭和44年12月に実施された。その結果をもとに建設省は県教育委員会に発掘調査を依頼し，昭和47年3月の東八代郡御坂町の下成田遺跡の発掘調査を皮切りに，予定路線を西から東の方向へ調査が始められました。この勝沼バイパスの予定路線内に(伝)岩崎館跡「立広砦とも云う」と地元民から云われているところの堀状で凹地とその南側がかかることとなりました。当時としては館跡は文献史学等からの方面からの研究が主で，今日のような大規模な発掘調査を必要とすることは，一般的にはなかなか考えられていないのが実状でありました。その後(伝)岩崎館跡(以下館跡と云う)付近の路線は地元の陳情もあり，当初の計画に側道を取付けることになり，さらに館跡の中郭部に一部かかるところまで路線幅が北へ拡張されることになりました。工事主体者である建設省が勝沼町地内の勝沼バイパス建設予定地の用地買収にとりかかった頃，各地で城郭，館跡等が考古学的に大規模に発掘調査されるようになり，それに伴い保護保存運動も当然叫ばれてきました。県内でもたまたま同じこの勝沼町の勝沼氏の館跡と伝えられているところへ県立のワインセンターを建設するため，緊急調査のメスが入れられていたところであったが調査にたずさわった考古学研究者の熱意と県及び町当局の英断の結果，幸い当初予定していた箇所へは建設を断念し，中郭部を保存していくことになりました。(伝)岩崎館跡についても建設省へ路線の計画変更について検討を申入れたが，時期的にもまた地元住民への影響もあり結局のところ，事前に発掘調査を実施し記録保存をするに留ったものであります。

また事務的経過は次のとおりです。

50．5.13　建設省甲府工事事務所長から県教委に勝沼バイパス建設工事（勝沼町地内）に伴う遺跡発掘調査の依頼。

50．7．4　県教委から建設省甲府工事事務所長に発掘調査の受託の回答。

50．7.10　建設省甲府工事事務所長から文化庁長官へ文化財保護法第57条の二による埋蔵文化財発掘届を提出。

50．7.25　建設省甲府工事事務所長から県教委へ発掘調査委託契約の協議。

50．7.28　文化財保護法第57条の一による発掘届を文化庁長官へ届出。

50．8.22　建設省関東地方建設局長と山梨県教育委員会教育長で発掘調査委託契約を結ぶ。

50.10．7　(伝承)岩崎館跡発掘調査の開始。

50.12.30　(伝承)岩崎館跡の発掘調査終了。

51．1．2　(伝承)岩崎館跡埋蔵物発見届を塩山警察署長へ提出。

51．3.23　勝沼バイパス埋蔵文化財発掘調査昭和50年度分費用精算及び調査の成果報告書を建設省関東地方建設局長へ提出。

51．6．4　建設省甲府工事事務所長から報告書刊行のための依頼。

51．7．3　報告書刊行のため建設省関東地方建設局長へ経費予算書及び計画書を送付。

52．1　　報告書作成のための建設省関東地方建設局長と山梨県教育委員会教育長と契約。

52．3.25　報告書印刷。

52．3.31　報告書刊行。

第2章　遺跡の位置と環境

（伝）岩崎館跡は甲府盆地の東端，山梨県東山梨郡勝沼町大字下岩崎にある。茶臼山（標高848m），大積寺山（標高911m），蜂城山（標高726mから流れ出る京戸川の土砂の堆積によってできた京戸川扇状地の末端部に位置している。この付近は古くから葡萄（ぶどう）の栽培が盛んであり，初夏から秋にかけて，葡萄狩の観光客で賑わうところであります。館跡付近の標高は400m前後であり，茶臼山の山裾よりなだらかな北斜面がこの館跡の北端まで続いている。館跡の南東から北にかけて「くの字」状に坂下川が流れ，その左岸は切立つような高さ6～10mの崖を作っている。またさらに200m北方には東西に田草川が流れている。館跡の西方には南北に幅約50m，深さ約10mの沢が延びている。館跡に立つと盆地の東部が一望のもとに眺められる。館跡の規模は判然としないが，中郭部と思われる周囲の北側崖の部分を除き，堀状の凹地になっていて，その中郭部は地元民からは岩崎氏の館跡（立広砦とも云われている）と云われてきた。この付近の小字（あざ）名は中郭部の内立広をはじめ，外立広，坂下，坂上，唐竹，上駒井，下駒井，山田，深田，雁屋敷，御所畑などの地名が残っている。特に中郭部南側の堀状の凹地は「深田」と呼ばれ一年中湧水が絶えないところである。勝沼バイパス建設用地となったこの箇所は，中郭部の南側の一部から堀状の凹地さらにその南側であるが，畑（かつては水田）の区画は規則性もなく埋土したと想定できる地形が見受けられる程度であった。館跡の中郭部には戦前まで避病舎があったといわれ，現在では民家が一軒ある。

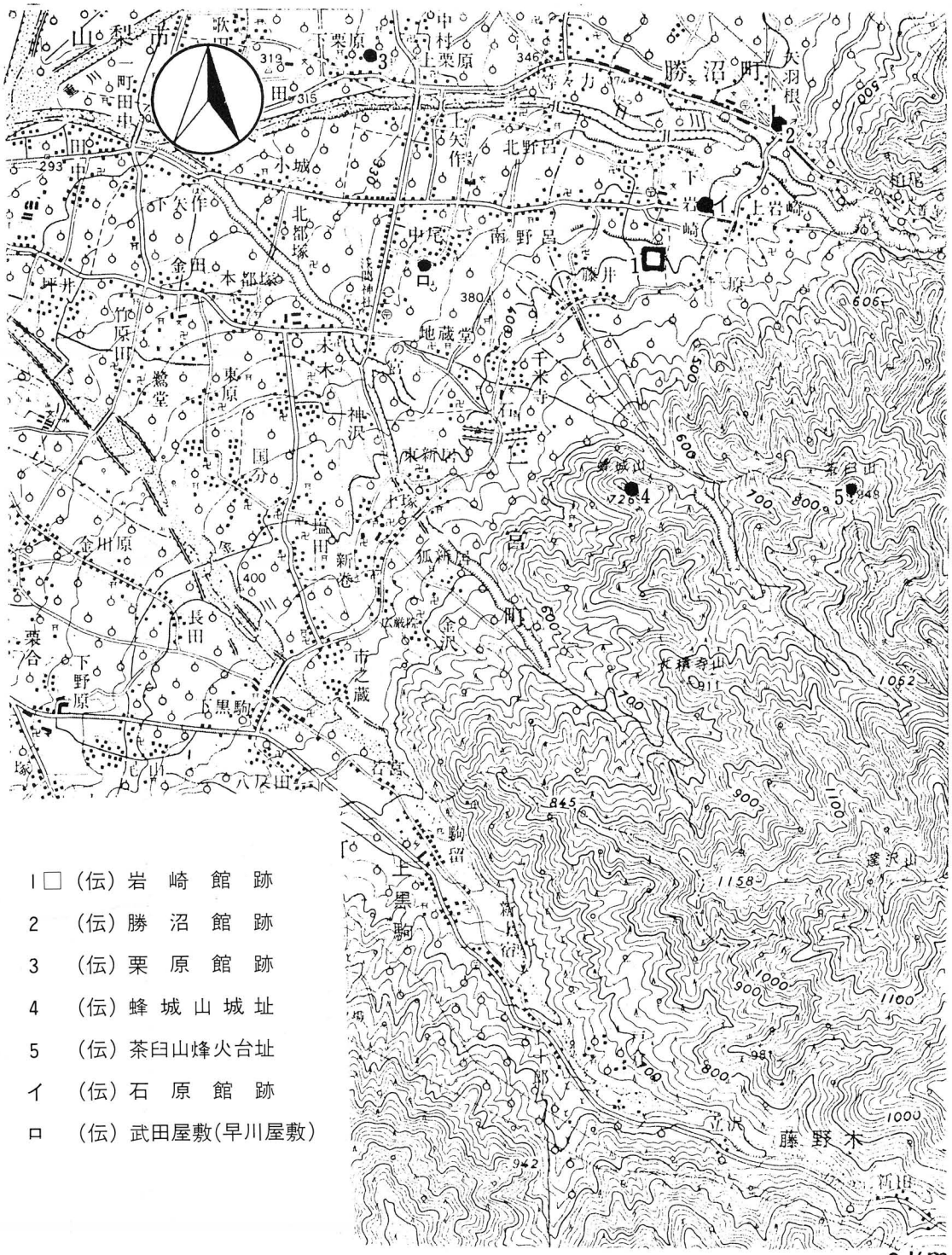
館跡周辺の遺跡としては，特にこの京戸川扇状地上には多くあり，現在行政区画が2町にわたっているが，勝沼町[註1]地内では寺平遺跡をはじめ3箇所，一宮町[註2]地内では10箇所の縄文時代から平安時代にかけての遺跡が確認されている。また第1図のとおり館跡，山城等もあり，（伝）勝沼館（かつぬま）跡[註3]，（伝）栗原（くりばら）館跡[註4]，（伝）蜂城山城（はちじょうさん）址[註5]，（伝）茶臼山烽火（ほうか）台跡[註6]，（伝）石原館跡，武田屋敷（早川屋敷敷）があったと伝えられている。このうち，（伝）石原館跡と（伝）武田屋敷（早川屋敷）は，位置も明確ではない。（伝）岩崎館跡は，甲斐源氏の武田氏の一族である岩崎氏の館跡と云われ，13世紀中頃から15世紀中頃にかけて岩崎氏6代の居館したところと伝えられているが，確たる文献等はないのが残念である。

註1　昭和47年度作成「山梨県遺跡台帳」　田代孝ほか。

註2　昭和52年度作成「笛吹川沿岸土地改良事業地域内遺跡分布調査台帳」末木建・伊藤恒彦ほか

註3，4，5，6　「甲斐国誌」松平定能編輯

註7，8　「日本城郭全集5」大類伸監修　㈱人物往来社発行



1□ (伝) 岩 崎 館 跡

2 (伝) 勝 沼 館 跡

3 (伝) 栗 原 館 跡

4 (伝) 蜂 城 山 城 址

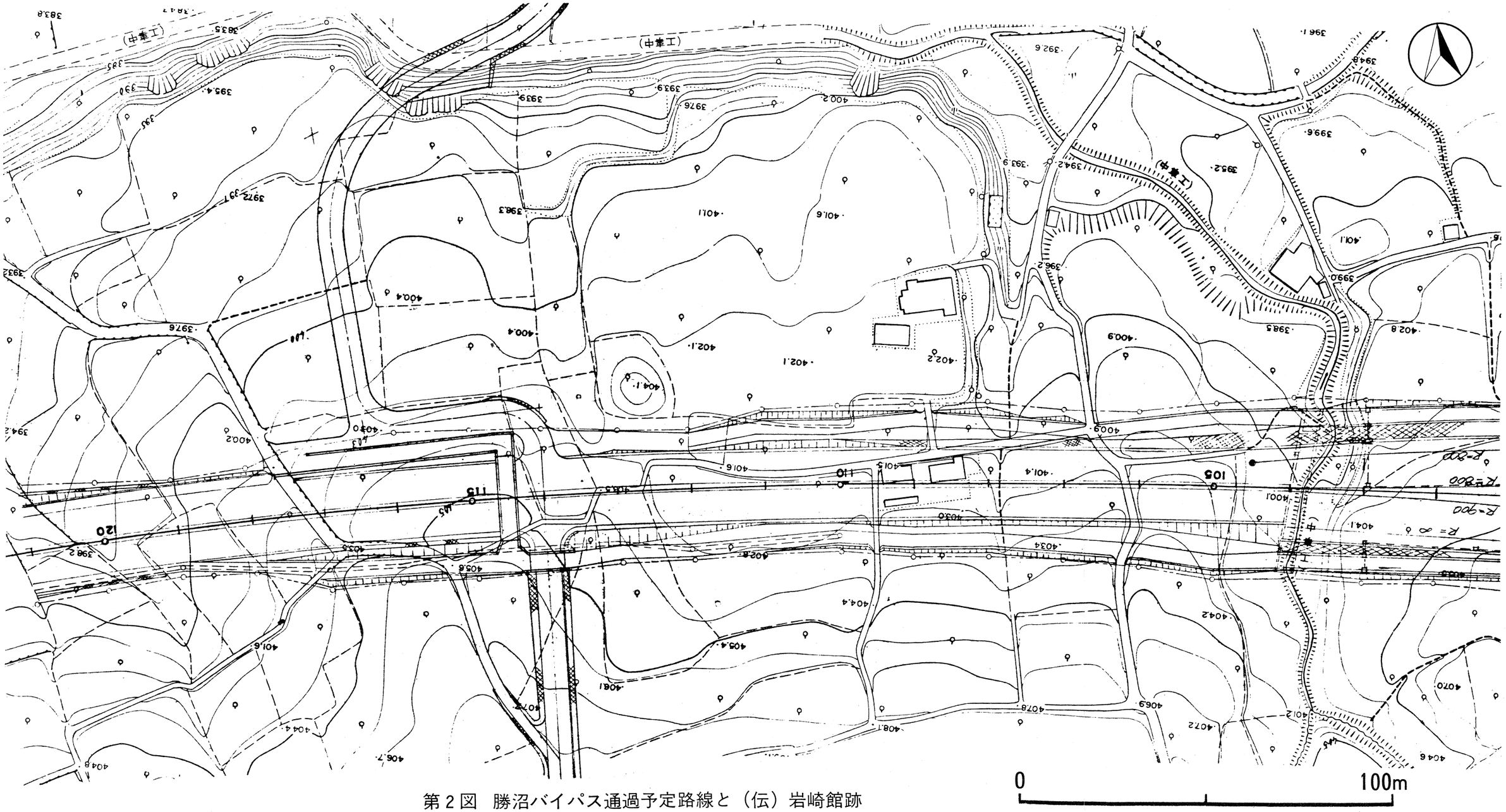
5 (伝) 茶臼山烽火台址

イ (伝) 石 原 館 跡

ロ (伝) 武田屋敷(早川屋敷)

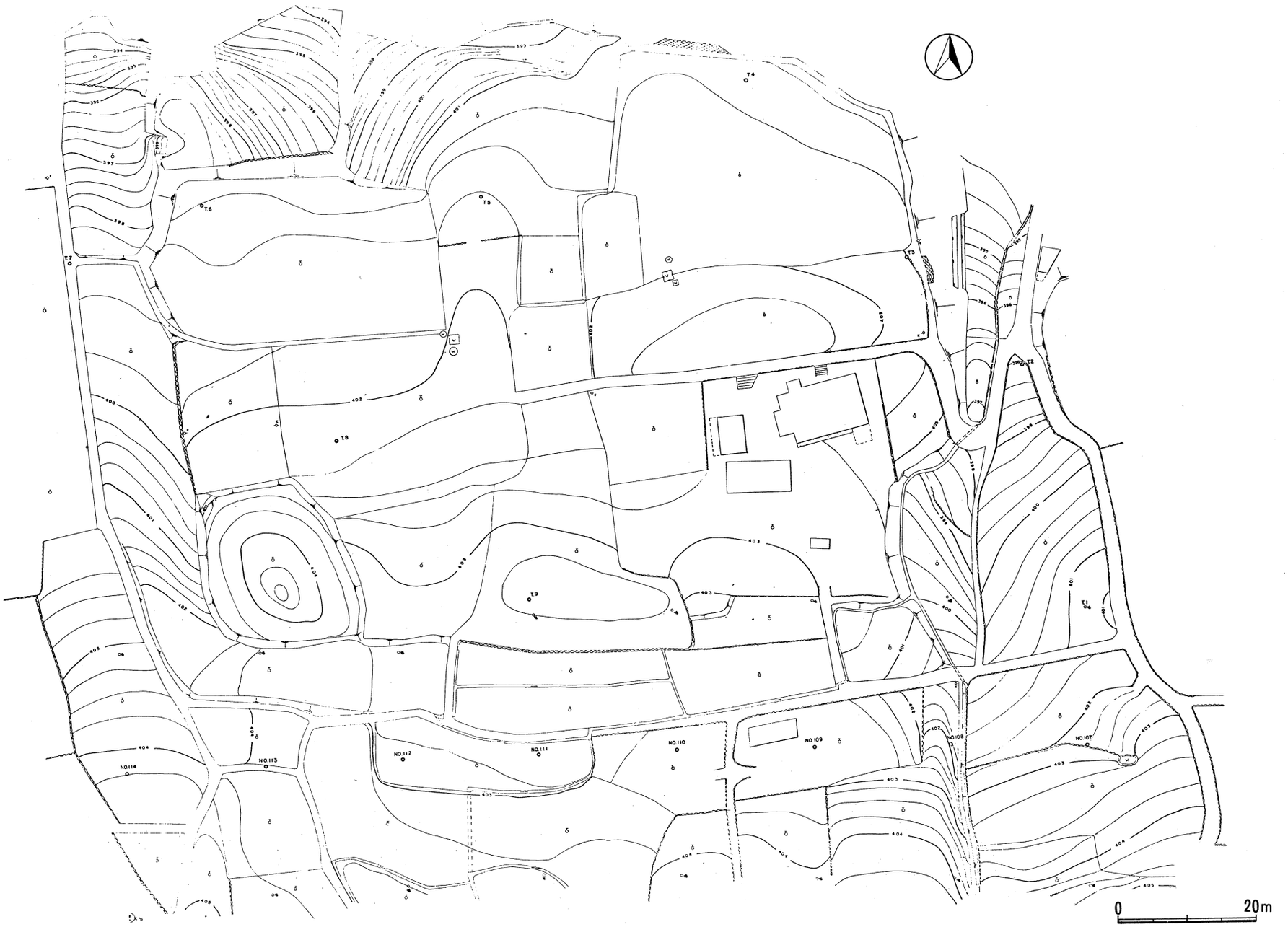
0 2 KM

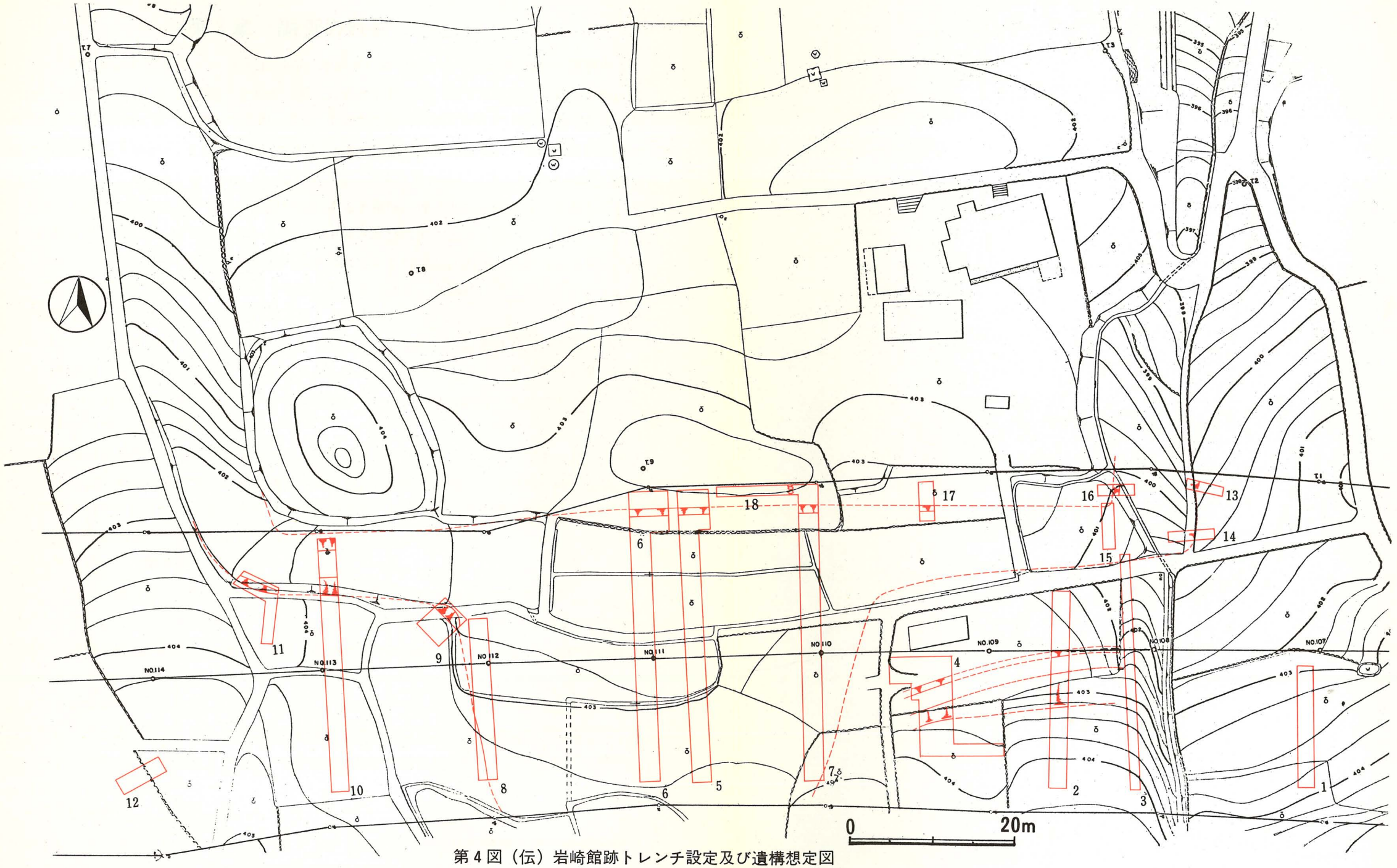
第1図 位 置 図



第２図　勝沼バイパス通過予定路線と（伝）岩崎館跡

第3図　（伝）岩崎館跡


T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
NO.107
NO.108
NO.109
NO.110
NO.111
NO.112
NO.113
NO.114
0
20m



第４図（伝）岩崎館跡トレンチ設定及び遺構想定図

------は遺構想定線

第3章　調査の概要

(伝)岩崎館跡の現況をみると(第2,3図参照)開墾され葡萄畑になっている。細かく観察すると館跡への出入口（虎口）は館跡の北西側にあったものと思われ，坂下川を渡り，斜面を西に登り，さらに右へ折れて東へ登ると中郭内へ入る。中郭内には中央部にそれぞれ東西，南北に走る起伏が現地形からうかがえ，土塁址が想定できる，また中郭内南東隅には直径約20m，高さ約1.5mほどのマウンド（大鼓櫓ともいわれている）がある。さらにその東には帯状の高さ約30～40cmのマウンド状の起伏がある。郭外は現地形からすると掘削，埋土並びに客土等行なわれておりその性格は判然としないが，等高線等からさらに中郭内及び凹地を大きく囲むように防塞状のものが見受けられる。それは南側及び西側の南半分は地山を掘削し，西側の北半分は土塁址と思われるものが僅かであるが等高線からうかがえる。また東側，北側には沢及び河川があり，防塞の役目を果しているかのように受けとることもできる。

勝沼バイパス予定路線は，中郭内の南端をかすめるように(第2図)計画され，調査はこの範囲内の地形及び地割（畑の区画）を考慮してトレンチを設定するものとした。その結果と状況は第4図のとおりであるが，各トレンチ及び遺構についての説明は次のとおりであった。

1号トレンチ　(第5図)

この地域は現地形では割合平担な地域であり建物址等が想定されるところであったがトレンチでみるとおり約50cmでローム層に達し，表土からは明治期以降の染付磁器の破片が第3層の茶褐色土層からは1片であるが土師質土器片が出土した。トレンチ北側の石はローム層中の風化の進んだ花崗岩である。遺構らしいものは期待できなかった。

2号トレンチ　(第6図)

この付近は路線南側が一段と高い地域であり，中心杭よりやや南よりで急激に下り，また平担になっている。ここは買収前には小屋があったところである。調査の結果，中央部に底幅1.8mの溝状の遺構が検出された。遺物は第1層は近世の染付磁器片，第2，3層で土師質土器の破片が数点出土した。

3号トレンチ

本トレンチは第2号トレンチで確認された溝状遺構の延長をみるため設定したものであったが，本トレンチの近くを流れるやや深い水路のため周辺を削取れており，この地点では溝状遺構は検出できなかった。

4号トレンチ

本トレンチも3号トレンチ同様，2号トレンチで検出された溝状遺構検出のため設定したものであったが，その結果，溝状遺構は南よりに延びているものと判明した。さらにこの延長を考えたが，折からの葡萄の収穫期であるため，農道の掘削が許可されず，また隣接する西側の畑は作物があり断念した。

遺物はこの付近も表土から梁付磁器片が多く出土し，溝状遺構からは土師質土器の破片が数点出土したのみであった。

5号トレンチ（第7,8図）

この付近の南側は2号トレンチ付近より一段低く平担な地域である。さらに水路をはさんで本トレンチのセンター付近ではまた低くなり凹地状の溝地へと続く，調査の結果，トレンチ北側では中郭部とそれに続く土塁址が確認できた。堀内にはかつての水田のけい畔の石組が出土した。また土塁及び中郭部を切って溝状遺構が検出された。この溝状遺構からは出土遺物は検出されなかったが，第8図の土層図が示すとおり，掘られてから溝状遺構が埋まるまである程度の時間が要したことがうかがえる。土塁は低く，上部が削られている。この中郭付近の堀内には水田の石組のほかに人頭大の河原石が投げ込まれていた。土師質土器は10．黒褐色土層から上部の土層中に検出された。また瀬戸天目片（江戸期）及び瓦の破片がかつての水田のけい畔の石組から出土している。また鉄塁直上から鉄族が1個出土した。これらのことからこの中郭部付近では堀の埋立ては近世以降土塁を削って埋立てていることがうかがえる。

堀は当初，中郭部を並行してあるものと想定していたが，この館跡の堀に堆積している16．灰青色泥層は路線南側の幅杭よりさらに南へ続くことが確認され，堀も南へ延びていることが判明した。堀内の第1，第2層からは江戸期の染付磁器片が出土した。

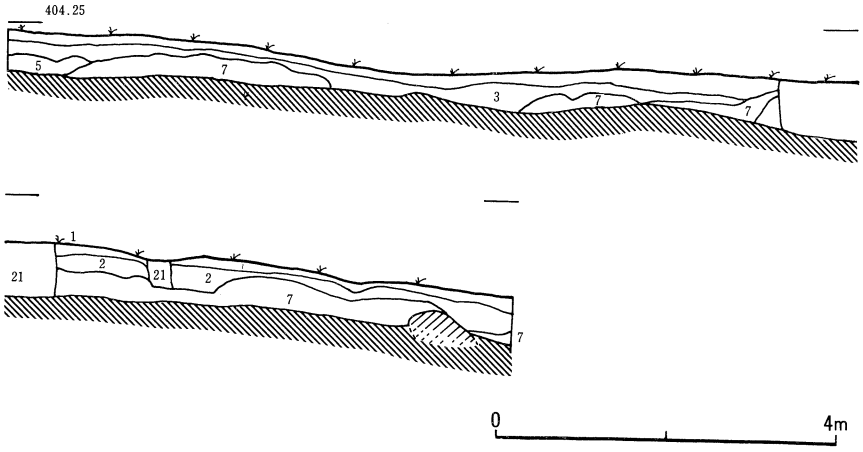
6号トレンチ　（第9・10図）

本トレンチは主に5号トレンチに続く土塁の状況をみるため設定したものであるが，その結果，トレンチ南側では第2層から土師質土器片が出土し，北側では土塁を切って石組の排水暗渠遺構と多数の土師質土器の廃棄の跡が検出された。排水暗渠遺構は長径約40cm，短径約20　ほどの河原石を使い，底幅約20cm，高さ20cmの排水暗渠を作っている。暗渠は北から南にかけてやや低くなっており，底部には2～3cmほどの砂が堆積していた。また暗渠から堀内への水落ちの部分には石組がみられ，その石組の間から15世紀初頭の笠松窯と思われる天目片が出土した。

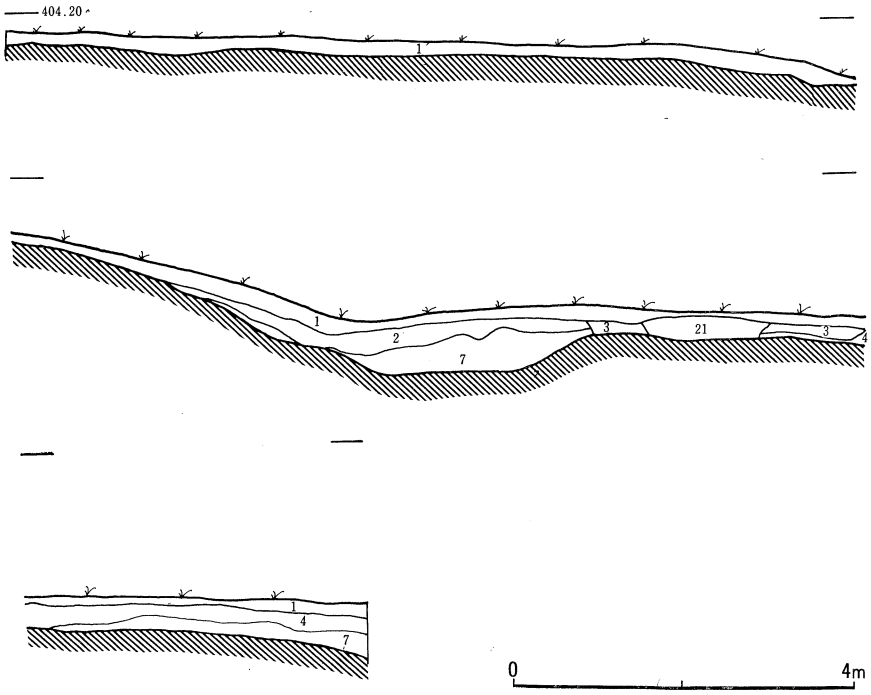
堀内の灰青色泥層中及びその上部の土層からは多数の土師質土器が出土し，とくに堀内には一箇所に固まって，廃棄された状態で出土した。なお，土塁と排水暗渠遺構は時間差があるものと思われ，排水暗渠遺構からの土師質土器の出土は認められなかった。また配水暗渠遺構の下部から縄文時代中期の土器が出土した。

7号トレンチ

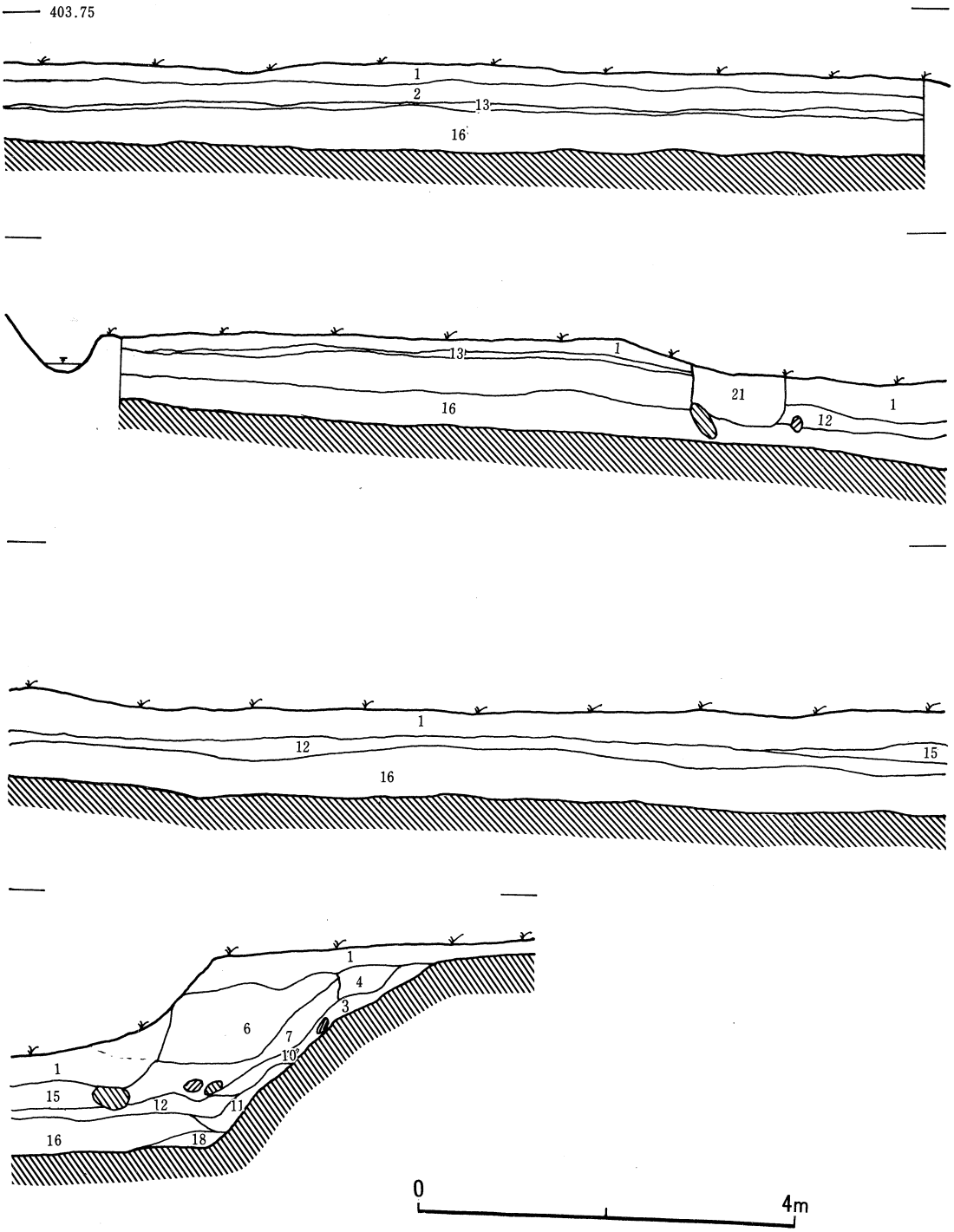
本トレンチは北側中郭部の土塁の部分に重点をおいたため，南側は第3層までの調査に留めた。遺物は第3層まで梁付磁器と古瀬戸の破片が若干出土した。土塁中からは土師質土器片が出土した。



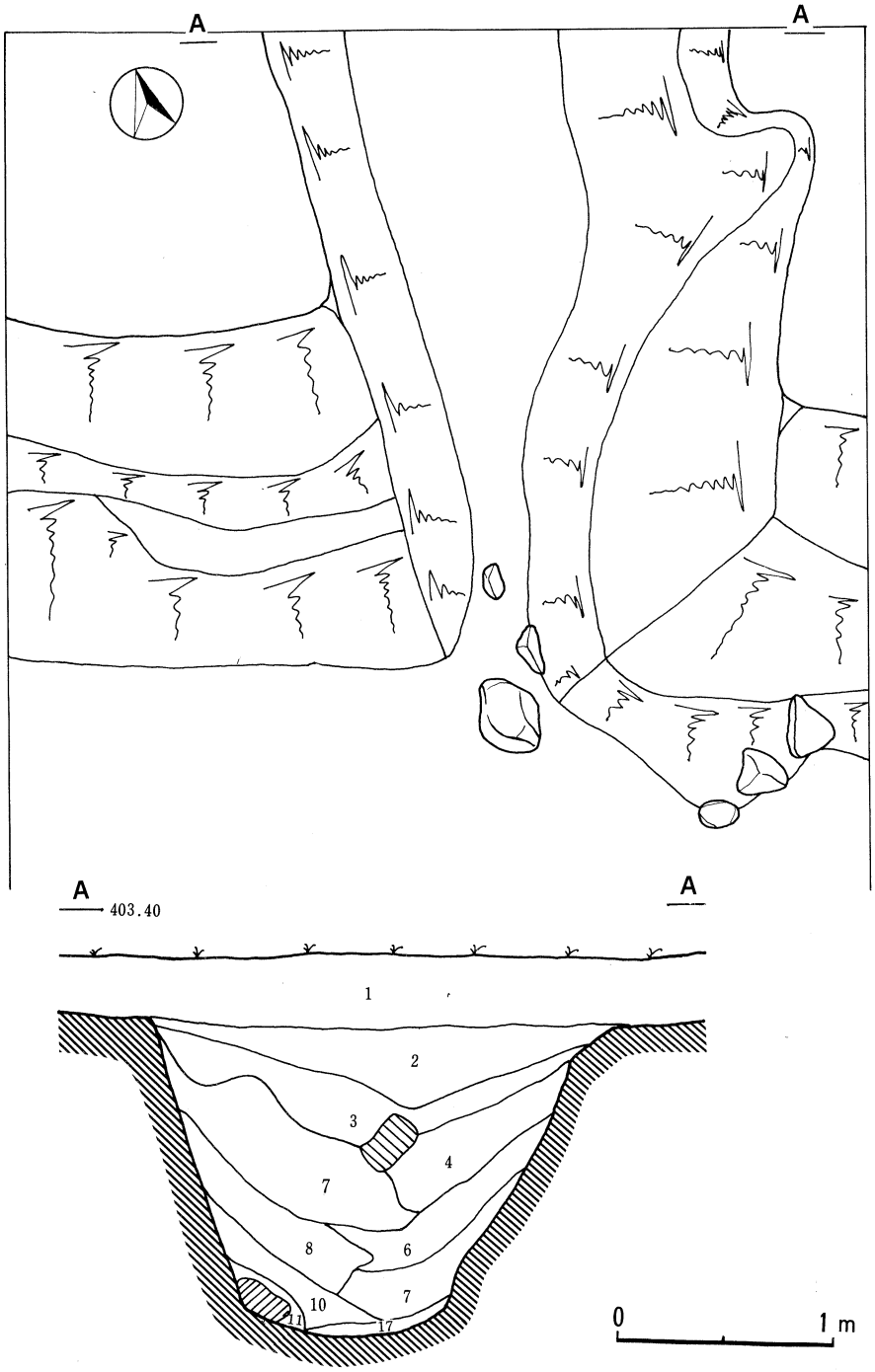
第５図　１号トレンチセクション図



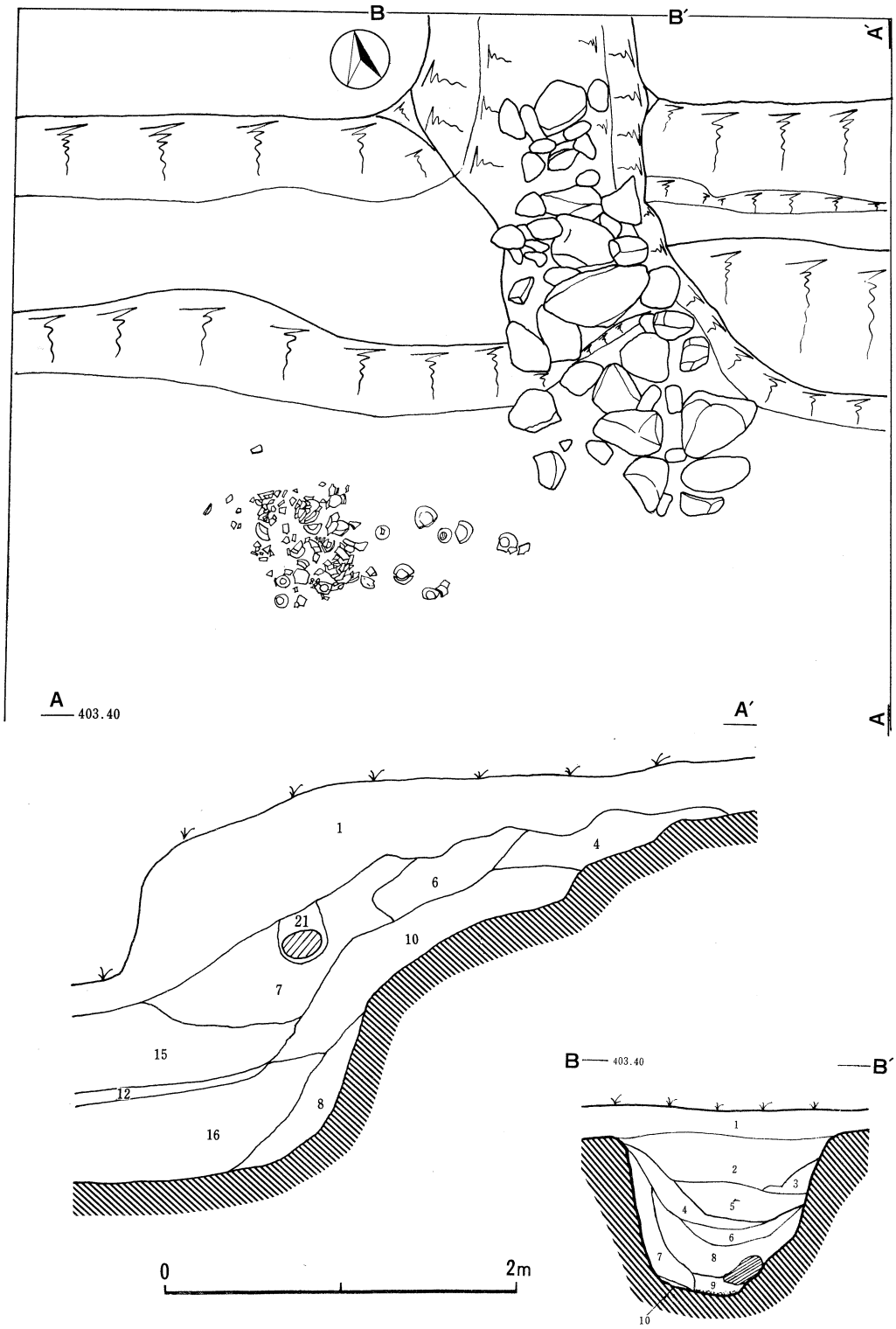
第６図　２号トレンチセクション図



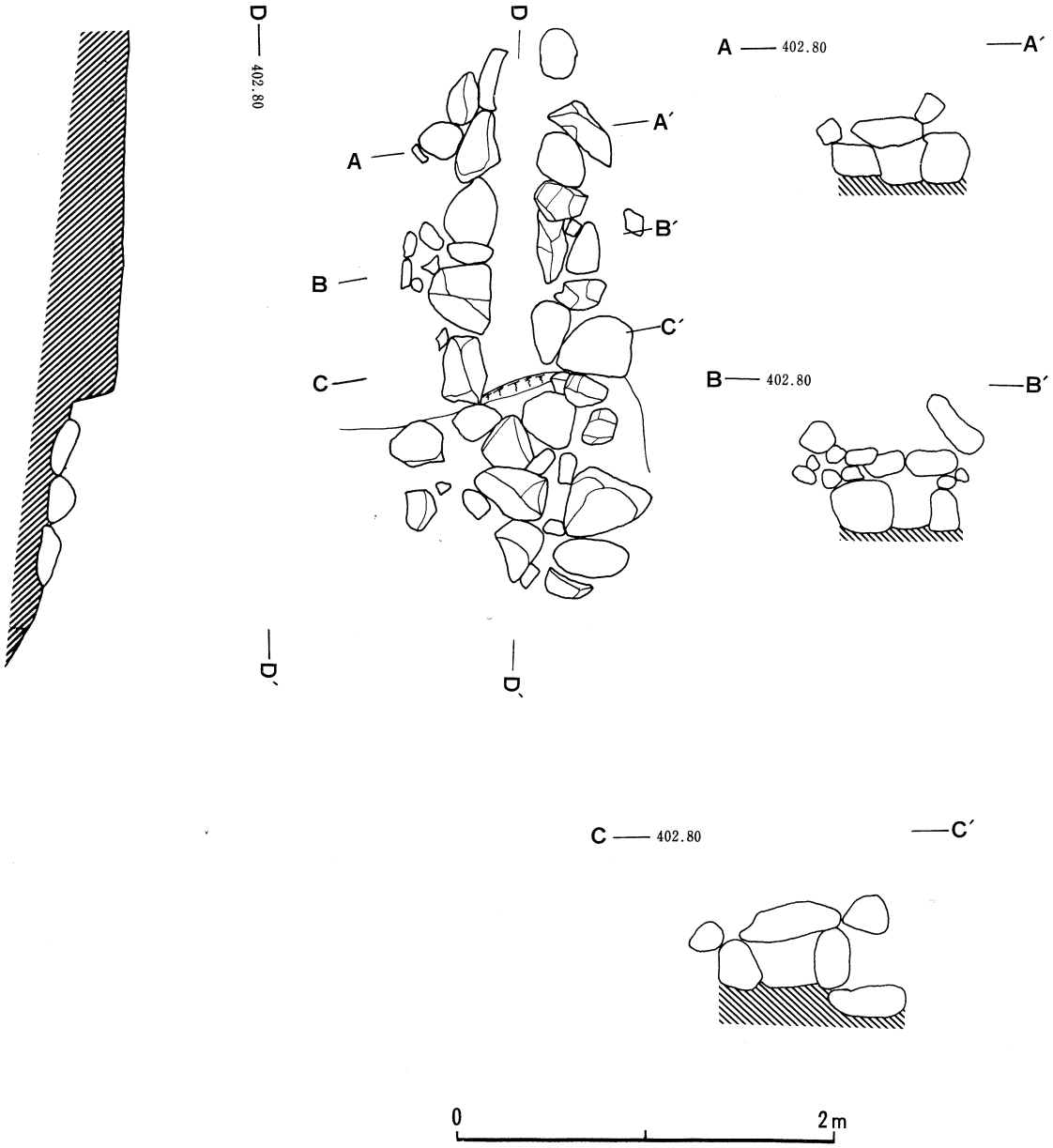
第７図　　５号トレンチセクション図



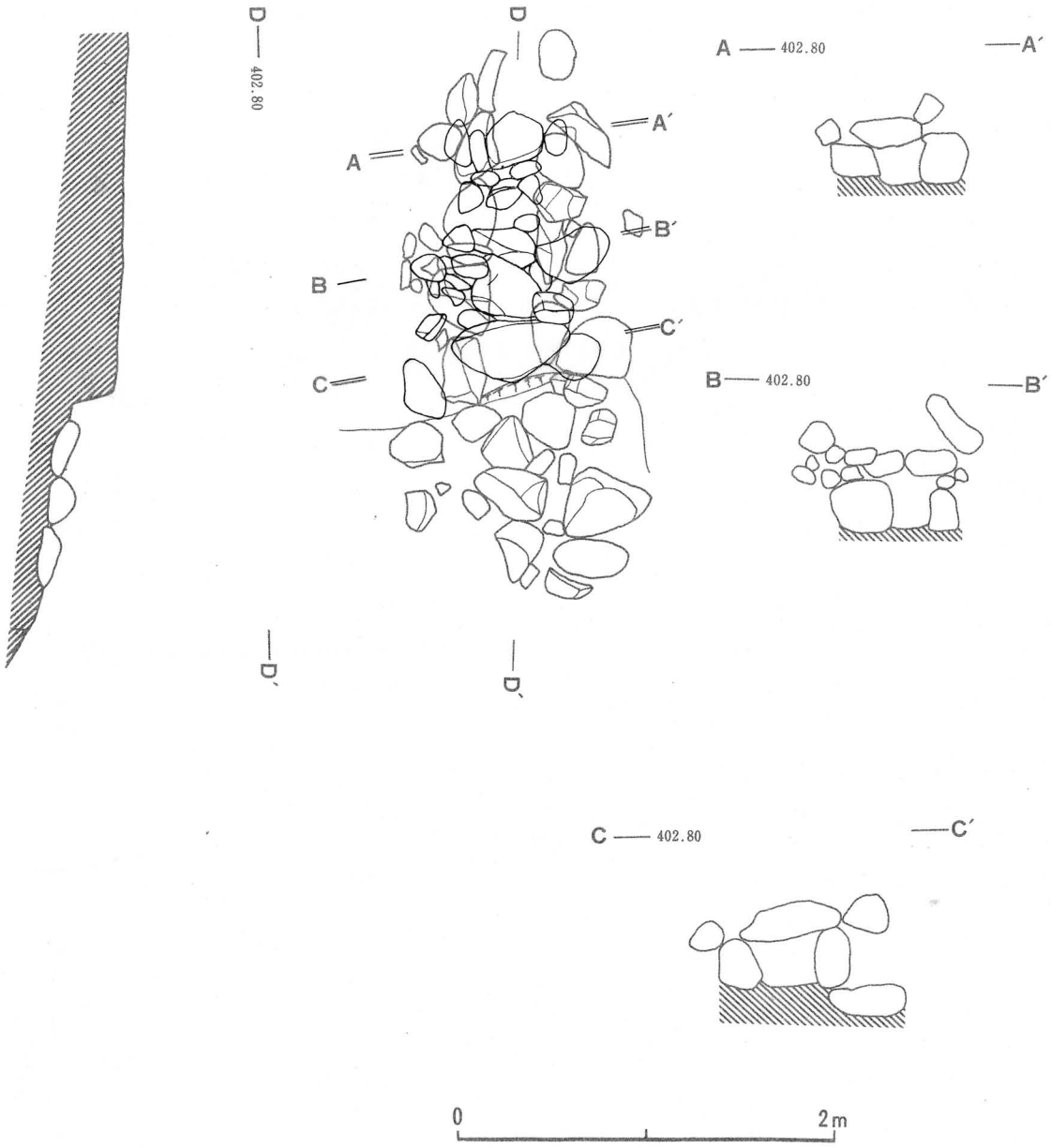
第８図　５号トレンチ北側溝状遺構



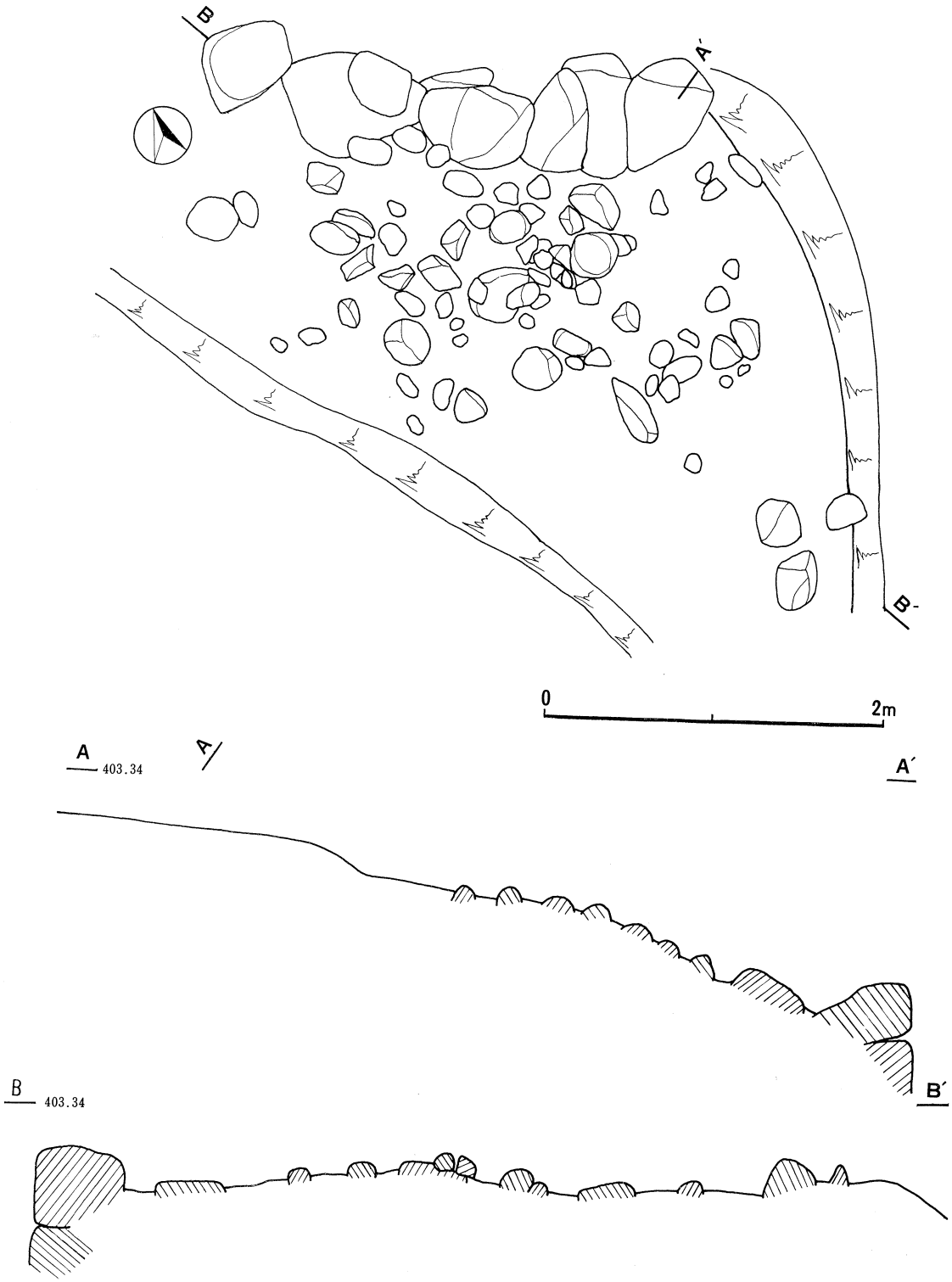
第9図　6号トレンチ



第10図　6号トレンチ排水暗渠遺構



第10図　6号トレンチ排水暗渠遺構



第11図 9号トレンチ石積遺構

8号トレンチ

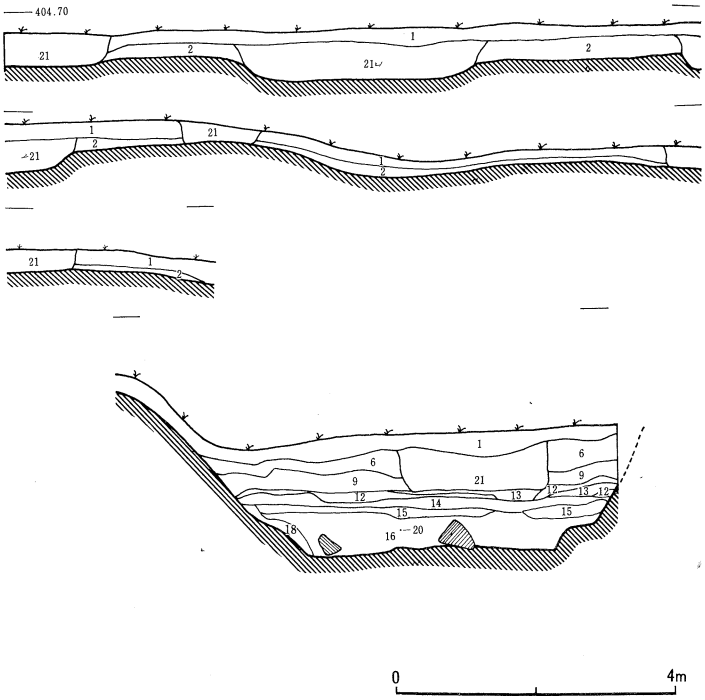
本トレンチは第3層までの調査にとどめた。遺物は第3層まで染付磁器と古瀬戸の破片が出土した。

9号トレンチ　(第11図)

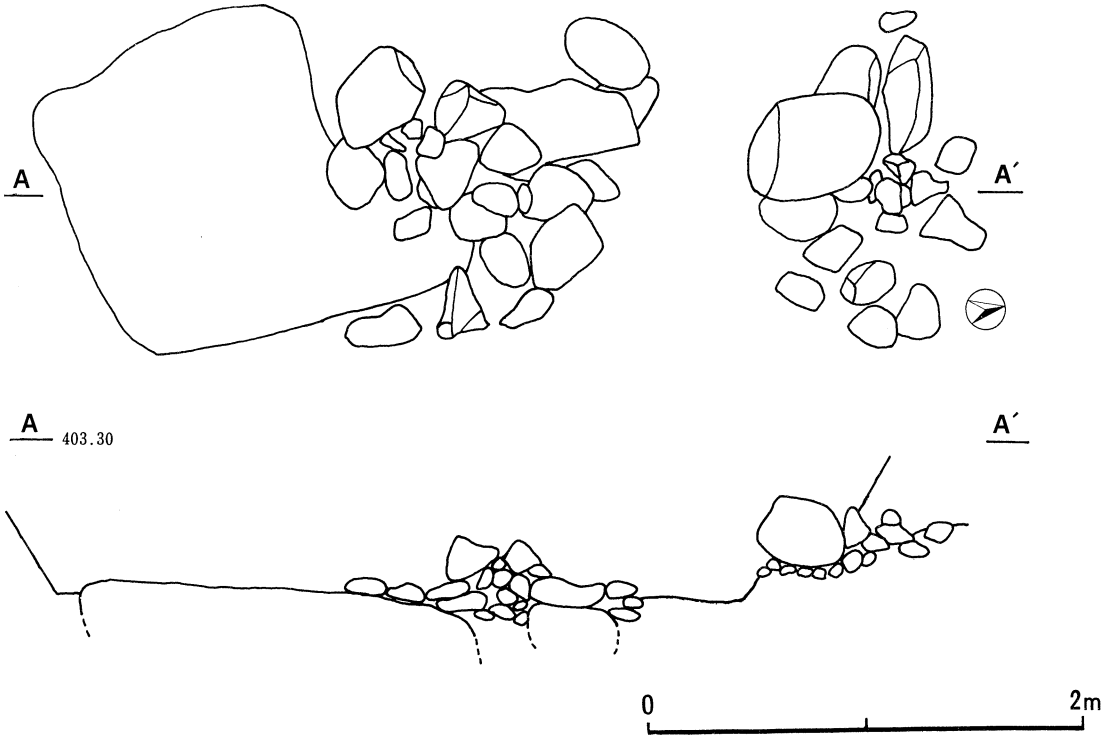
本トレンチは，5　8号トレンチの結果，堀の曲がりを調査するため設定したものである。その結果，第8図に示すとおり，北側は内郭部と平行に石積が確認され，南側は削られた落ち込みが検出された。石積は長径50cm，短径30cm大の石が用いられ，うらごめには径15cm ぐらいの石がこめられていた。遺物は検出されなかった。

10号トレンチ　(第12，13図)

本トレンチの南側は平担地である。表土より約50cm ほどで小石の混入した地山に達する。北側は堀でさらに中郭部のマウンド(太鼓櫓)へと続く。堀は底幅が約3.5m ある。堀の底部は扇状地上でもあり，砂に大きめの礫の混入した層に突き当たる。また中央部に第13図のように幅約1.4m，高さ約0.2～0.3m ほどの石組が帯状に続いている。さらに中郭部の土留石と思われる石組が検出された。遺物は南側では表土及び攪乱層から染付磁器が出土し，2の黄褐色土層からは土師質土器が出土した。堀からは16．灰青色泥層から土師質土器片及び木製品が出土した。



第12図　10号トレンチセクション図



第13図　10号トレンチ堀底部石組

11号トレンチ

本トレンチは堀への落込み部分の天端コーナーの状況を調査のため設定したものである。その結果コーナーは極端には曲らず，ゆるやかなカーブで曲るようであった。遺物なし。

12号トレンチ

本トレンチは，先に述べたように中郭部を大きく囲むように地形を削取った地域で，現在葡萄畑の石積になっている。調査の結果，高さ約1.5ｍほどの落差を持ち急激に落ち込み，自然の地形を大きく削取った形態がうかがわれる。遺物なし。

13号トレンチ

本トレンチは東側の堀の部分を明らかにするため設定したものである。現在の石積の下部が館跡経営当時の石積と思われ，裏込めの石は幅約1.2ｍにわたり込められていた。遺物なし。

14号トレンチ

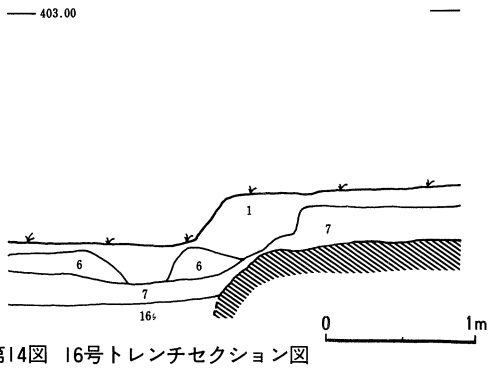
本トレンチは13号トレンチで確認された石積みの延長を確認するため設定したものでその結果，この地点では石積は確認されず，ロームの落ち込みが確認された。遺物なし。

15号トレンチ

本トレンチは堀内と北側の中郭部からの落ち込みを確認したものである。その結果堀内には多数の石が投げ込まれていた。トレンチ北隅にロームの落ち込みが検出される。遺物なし。

16号トレンチ　（第14図）

この地域は先の15号トレンチの箇所も含めて中郭部が開墾により高さ約1.5m～2.0mほど削られていた。13号トレンチの石積との距離は8.7mを測り，堀の部分は灰青色の泥層が厚く堆積していた。遺物なし。



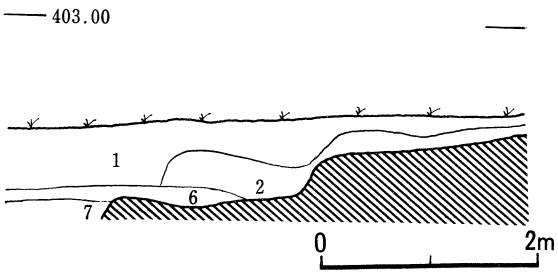
第14図　16号トレンチセクション図

17号トレンチ　（第15図）

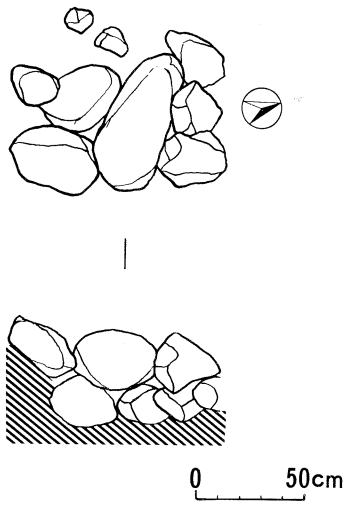
この地域は一段低くなり堀に続くが，調査の結果，中郭部の土塁の部分は大きく削取れていた。おそらく堀の部分に埋土のため削取れたものと推測できる。遺物なし。

18号トレンチ　（第16図）

この地域は5，6，7号トレンチの結果，中郭部の土塁が確認されたため，その延長をみるため設定した。その結果，5，6号トレンチより7号トレンチ付近まで土塁は上部が削られてはいるが残存しており，7号トレンチのすぐ西には第12図に示すように石組遺構が確認された。石組遺構の性格，時期についてはつかめなかった。遺物なし。



第15図　17号トレンチセクション図



第16図　18号トレンチ石組

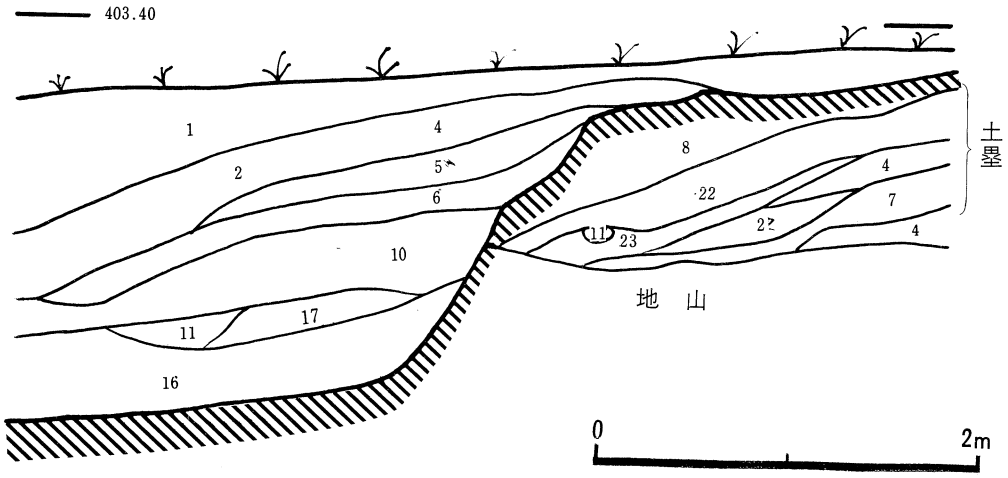
第4章　遺構と遺物

遺　　構

(伝)岩崎館跡の中郭部南側を一部かかる堀状の凹地及びその南面の調査は，調査期間及び調査員・作業員等の確保が困難であったため，必ずしも満足のいくものでなかったが，トレンチ設定による調査の結果，土塁，堀，排水暗渠溝，溝状遺構，石積遺構が確認された。

(1) 土塁

土塁は，中郭部の南側隅の7号トレンチ付近より西側に認められたのみであった。7号トレンチより東側は，中郭部が客土用の土取箇所であったのか，1m以上の段差があり，土塁址の痕跡は残っていなかった。また今回調査の範囲となった堀の外にも，土塁址と思われる痕跡は認められなかった。中郭部南側に残っている土塁は，第　図の7号トレンチのセクションでわかるとおり，上部は削られて堀内への埋土として引っぱるような状態であった。この状態は5，6号トレンチでも同じ状態であった。また土塁は，恐らく堀を掘った土を盛上げたものと思われるが，断面セクションに示すとおり帯状に堆積され，やや築き固められた状態であった。



第17図　土塁断面セクション図(7号トレンチ)

(2) 堀

中郭部を囲む堀は埋立てられ，現状では1 m～1.5 mの凹地状になっている。中郭部の三方向を回る堀幅は，調査地域の東側では約8.7 m（13, 16号トレンチから）あり，西側では10号トレンチで下幅約3.6m，上幅は推計で7.6mある。堀は当初中郭部の周囲3方向のみを回るものと思われていたが，中郭部の南面の中央部堀よりさらに南の方向に延びていることが判明した。確かな範囲については時間等の制約があり，さらに調査を進めることは残念ながらできなかったが，路線南側に工事の側壁用の溝を掘った際にも，堀内に堆積する青灰色泥層が観察でき，路線よりもさらに南に続いていることが判明した。中郭部を巡る南面の堀内は，部分的のみ調査することができなかったが，堀内は，底部に堆積する青灰色泥層中からは木製品，土師質土器が出土し，第2層には江戸期の陶磁器片が出土している。堀内の遺構としては，9，13号トレンチ付近では石積が見られ，部分的に石積の箇所もあったものと思わるる。また堀底はほぼ平担であると思われるが，8号トレンチの堀内底部では土塁部(太鼓楼？)の土止め石と思われる石組と，堀底中央部に，用途は不明であるが底幅約1.5 m，高さ0.5 mほどの帯状の石組の一部が検出された。また堀を渡る中郭部等の土橋及び堀内のそのほかの遺構等は，工事用の排水溝を掘った際にも断面から確認されなかった。

(3) 排水暗渠遺構

中郭部の南側の土塁を切込んで，人頭大の河原石の石組の排水暗渠遺構が確認された。石組は第10図のとおり側壁の石を1列に並べその上に扁平の石を載せて，すき間には礫を入れている。排水溝内には黒色土が詰まっており，床面にはわずかであるが，砂が堆積していた。暗渠の石組は6号トレンチの北偶までは達していなかったが，溝は続いていた。堀内への水の落込み箇所は一段低くなり，人頭大の河原石で敷石状に並べられていた。
またこの石組の間から15世紀初頭のものと思われる瀬戸系の天目茶碗が出土し，構築時はこれ以降と思われる。

(4) 溝状遺構

溝状遺構は3，4号トレンチの帯状のものと5号トレンチより検出された。2，4号トレンチより検出された溝状の遺構は，底幅約1.8 mを測り，底部には泥層の堆積はなかったが，6号トレンチ堀内より出土した土師質土器の一部と同型式の破片が出土している。溝の南側は一段と高くなっており，北側は低くなって溝より50 cm ほど高い程度である。(堀であるかは不明)

5号トレンチより検出した溝状遺構は，土塁部からさらに中郭部の地山までを切って作られている。遺物は認められなかったが，水の取水口的性格なもとも受けとめられるものであった。

(5) 石積遺構

9，4号トレンチから確認された堀の石積遺構は，部分的にしか調査できなかったが，館跡経営時のものと思われる。

出土遺物

出土した遺物は限られた部分の発掘調査であったが陶磁器，木製品，鉄製品，および多量の土師質土器が出土した。

(1) 陶　　器（第18図1～5）

1は6号トレンチ第2層から出土したもので，器形は碗形と思われ器面内外とも黄色の釉薬が塗られている。胎土は緻密で白色をしている。

2は10号トレンチの南側の表土層から出土したものである。器形は胴下部がややふくれる鉢状の器と思われる。口縁部がやや厚くなり，器面外面には緑色の釉薬がかかり，渦巻とその上下には濃い釉薬により横帯が施されている。器面内面は口縁部に若干，緑色の釉薬が塗られているのみである。胎土はやや粗く白色をしている。

3は8号トレンチ第2層から出土したもので，天目茶碗の口縁部の破片である。器面内外面とも黒色の釉薬が塗られているが，口唇部の近くは，やや茶色がかっている。器肉は口縁部先端が薄くなり尖っている。胎土は緻密で灰白色をしている。

4は5号トレンチ内中郭部近くの堀内の埋立の際の石の間から出土したものである。天目茶碗の底部から胴部にかけての破片の資料である。底部径約5cmである。黒色の釉薬は内外面ともに厚く塗られており，外面の黒色釉薬の塗ってある箇所より下方は赤茶色の釉薬を塗っている。ロクロ整形痕の陵が顕著である。底部は削出し高台である。

5は6号トレンチの石組排水溝の水落ちの石組間より出土した天目茶碗である。底部を欠くが，口径は推計で約11.3cmぐらいで胎土は須恵器の胎土と同じであり，細かい砂粒を含み緻密である。器形は口縁部がやや内反し，胴部下部から高台に移行する課程で段差をもつ。釉薬は黒色であるが，口縁部付近ではやや茶色がかっている。1は黄瀬戸，3～5は古瀬戸の資料と思われ，特に5は15世紀初頭の古瀬戸の笠松窯のものと思われる。

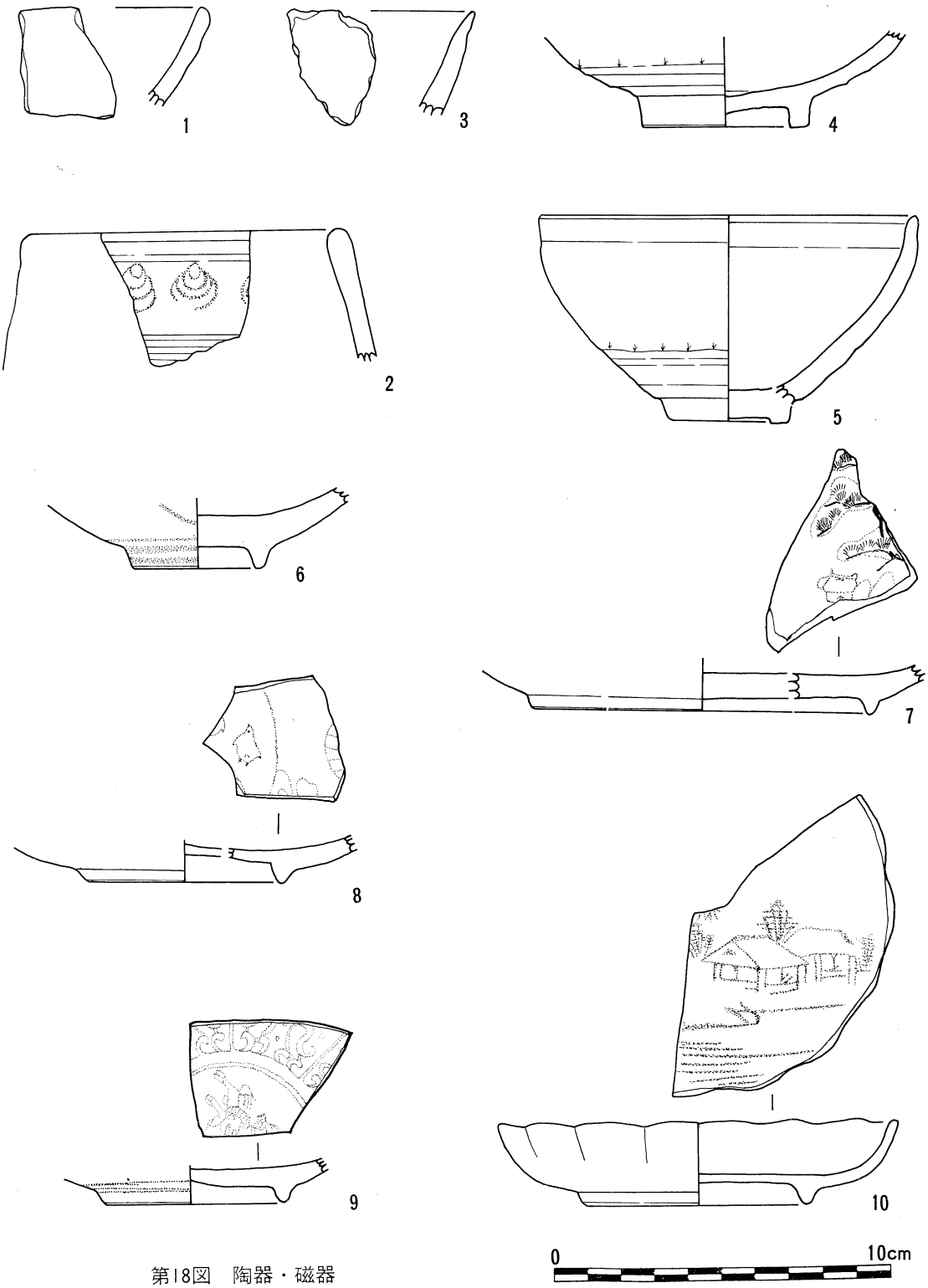
(2) 磁　　器（第18図6～10）

磁器は小破片が各トレンチの表土層から第2層までにかけて出土している。図示したものは比較的大きた破片を掲載した。6は7号トレンチ南側付近の表採品である。器形は碗形を呈するものと思われ器肉は厚く，外面には染付の線があり，胴部口は何かの絵画状のものが描かれるものと思われる。胎土は緻密であり，やや青味のかかった白色である。

7は2号トレンチ第2層から出土したものである。皿の小破片である。内面には染付の絵画が描かれている。胎土は緻密であり白色をしている。

8・9は10号トレンチの南側表土層から出土したものである。8・9の内面には染付の絵画が，また9の高台外面には染付の横帯がある。胎土は緻密で白色をしている。

10は15号トレンチの第2層から出土したものである。口縁部が破状であり内面には染付の絵画がある。器肉はやや薄い。胎土は緻密で白色をしている。



第18図　陶器・磁器

参考文献

○日本のやきもの 13 黄瀬戸・瀬戸黒　古川庄作　講談社
○　〃　19 伊万里　永竹　威　講談社
○陶磁大系6　古瀬戸　奥田直栄　平凡社
○　〃　11 志野・黄瀬戸・瀬戸黒　荒川豊蔵　平凡社
○　〃　伊万里　永竹　威　平凡社

木 製 品　（第19図）

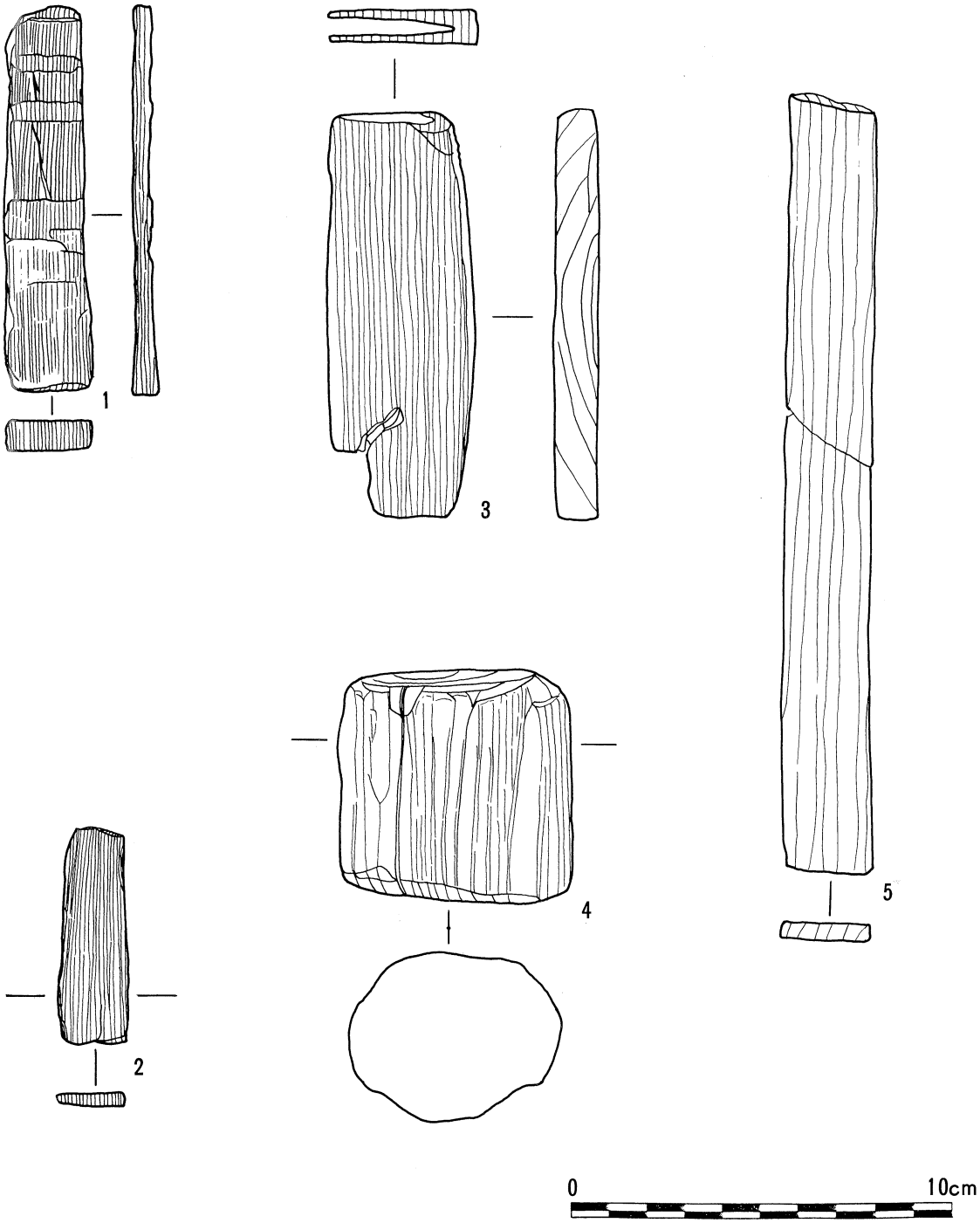
木製品は5，7，10号トレンチの堀内の灰褐色泥層及び灰青色泥層から出土したものである。1は10号トレンチの堀底の土留石と思われる箇所の上部より出土したものである。木質は固く緻密であるが部分的に腐蝕している。檜材と思われる幅は約2.2cm厚さは約8mmほどの四面を加工している板状のものである。また板面には横に本品と同じようなものを格子状に組んだための痕跡とも思われる。

2は1と同様10号トレンチの堀底部の灰青色泥層より出土したものであるが，材質は1と同じであり，厚さはやや薄いが1と同様の用途をしたものと思われる。

3は7号トレンチの灰褐色泥層より出土したもので，材質も新しい櫛の柄である。

4は5号トレンチ中郭部よりの堀の埋立時に投込まれたと思われる石の間から出土したものである。材質は栗のような雑木と思われる。

5は5号トレンチの灰青色泥層より出土した。幅2.4cm，厚さ約4mmの四面を加工した木製品である。年輪の間が広く材質も柔らかい。杉材と思われる。用途は不明である。



第19図　木　製　品

鉄 製 品（20図）

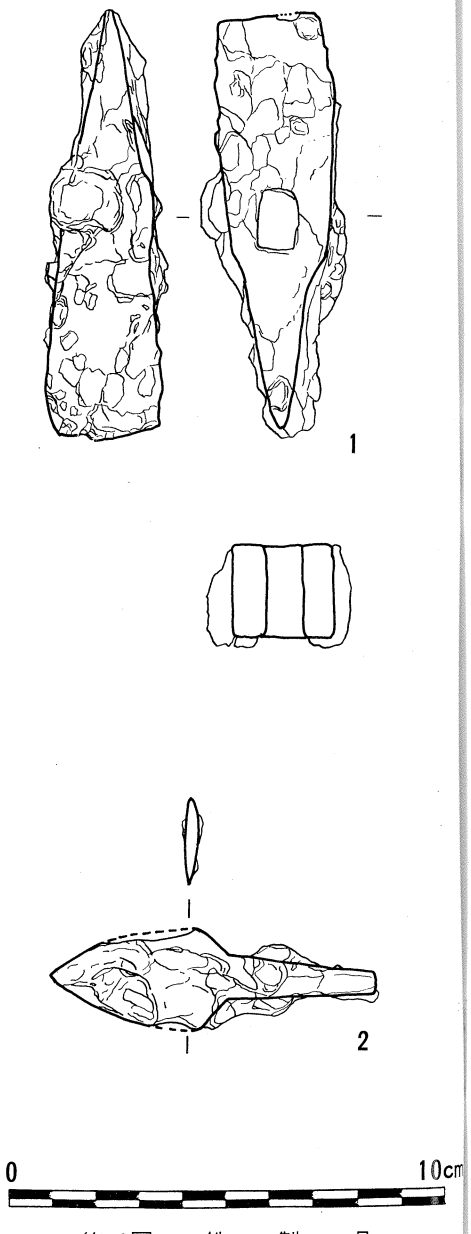
1 鉄斧，3号トレンチの第2層より出土したものである。

2 鉄族，3号トレンチの土塁部に直上より出土したものである。

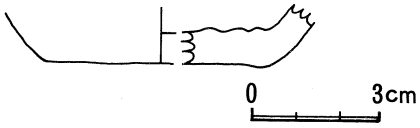
土師質土器

トレンチ内からの土師質土器の出土の状況はその項でおよそ触れてきたところである。それらの土師質土器は5，6号トレンチ堀内出土ものを除き，いずれも細破片であり図示するのはやや困難であった。器形，胎土等は6号トレンチ堀内出土の土師質土器とほぼ同じものと思われた。6号トレンチ堀内出土の土師質土器の出土状況は第9図及び第22図のとおりである。土師質土器は堀内の灰青色泥層中に多く投棄されていたが，これより上部の土塁と思われる付近の層中にも若干出土しており，土塁上から投げ棄てられたものと思われる。出土した土師質土器は口径が約10cmほどの皿型のものと，それよりも小さく，小型の皿型のものであった。完形品は小型のものが多かったが，破片は大きく器面内面には油状のものが付着している土師質土器が多かった。

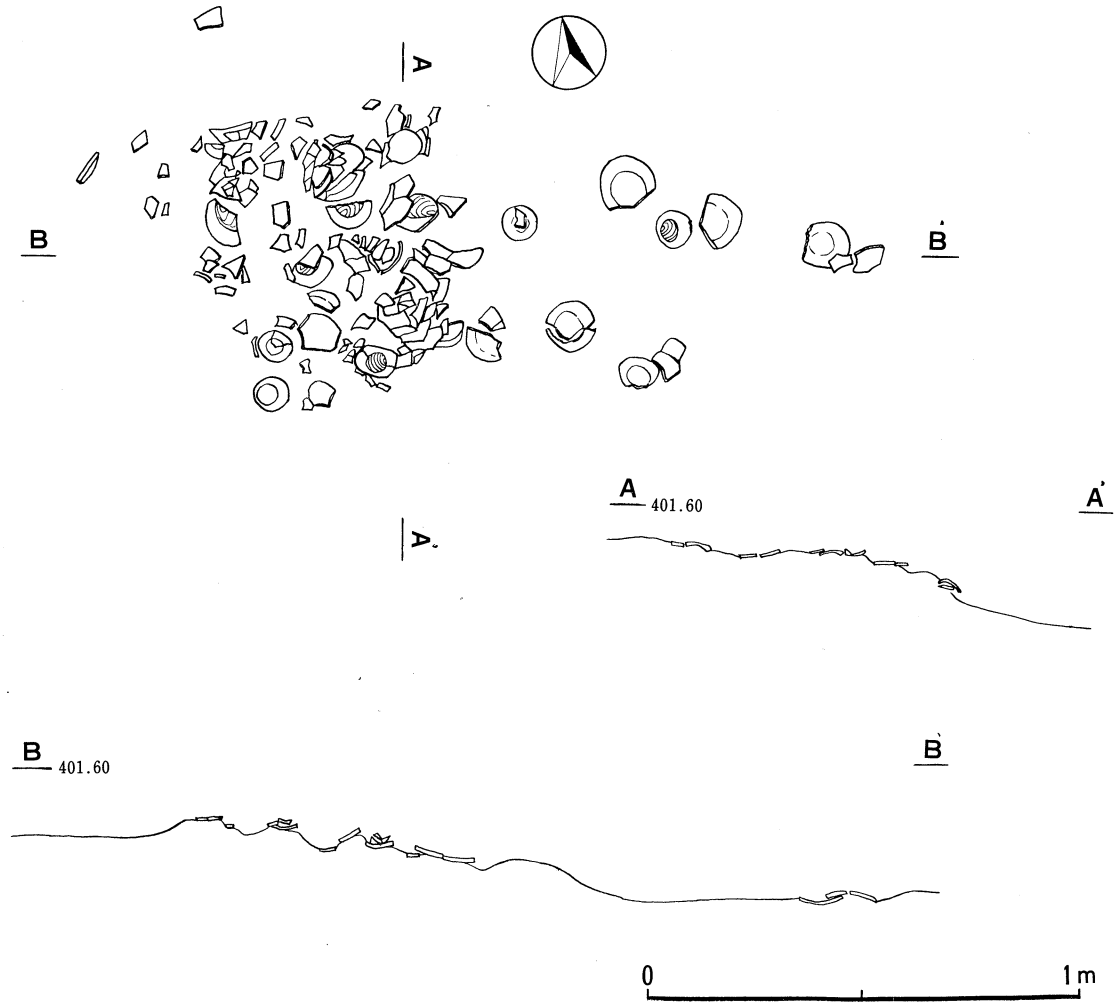
また，これら6号トレンチ等より出土した土師質土器とは，若干違う内面底部にロクロ水引きによる整形痕の陵を顕著に残す土師質土器（第21図）が7号トレンチの土塁内より出土した。



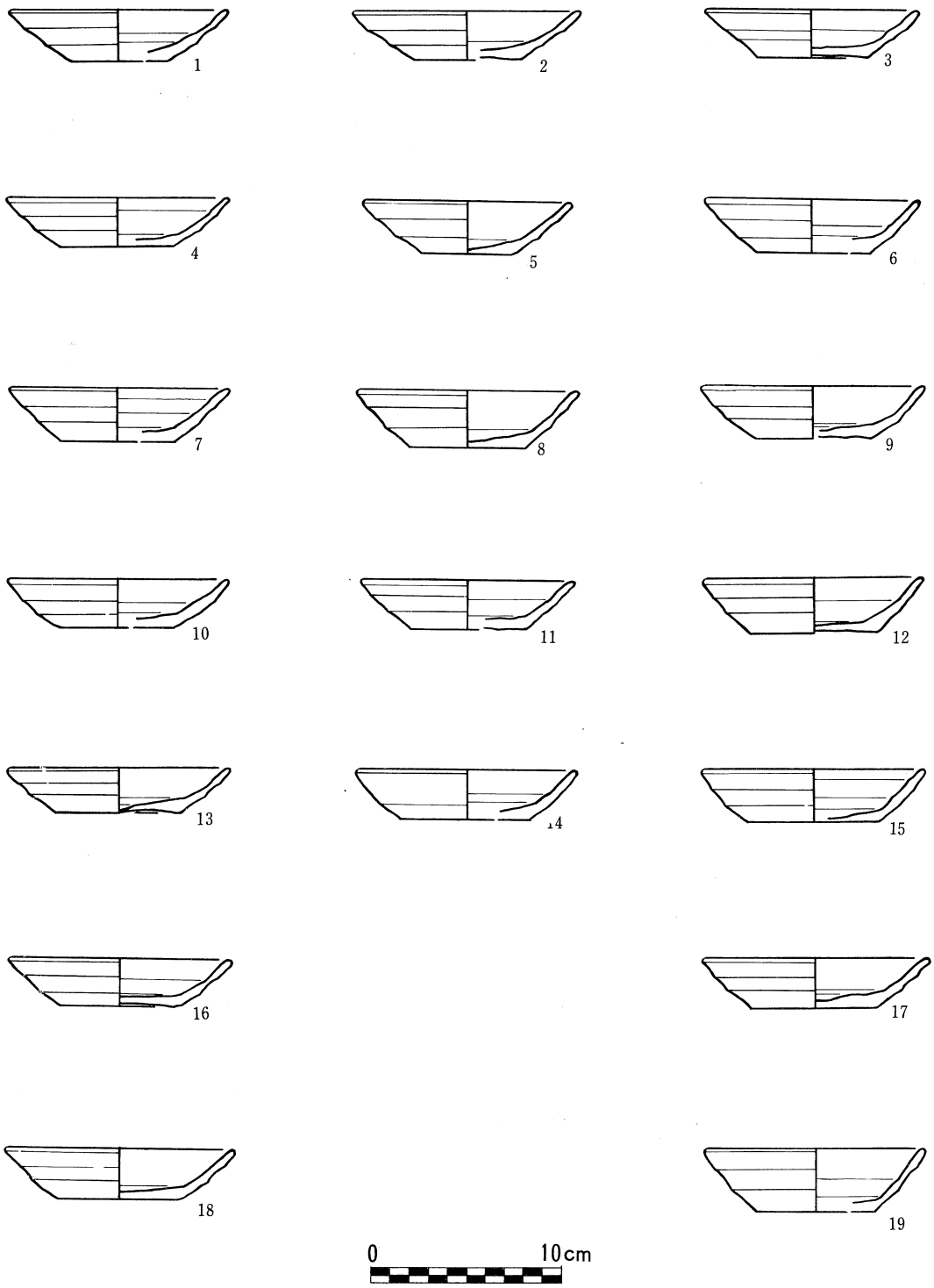
第20図　鉄　製　品



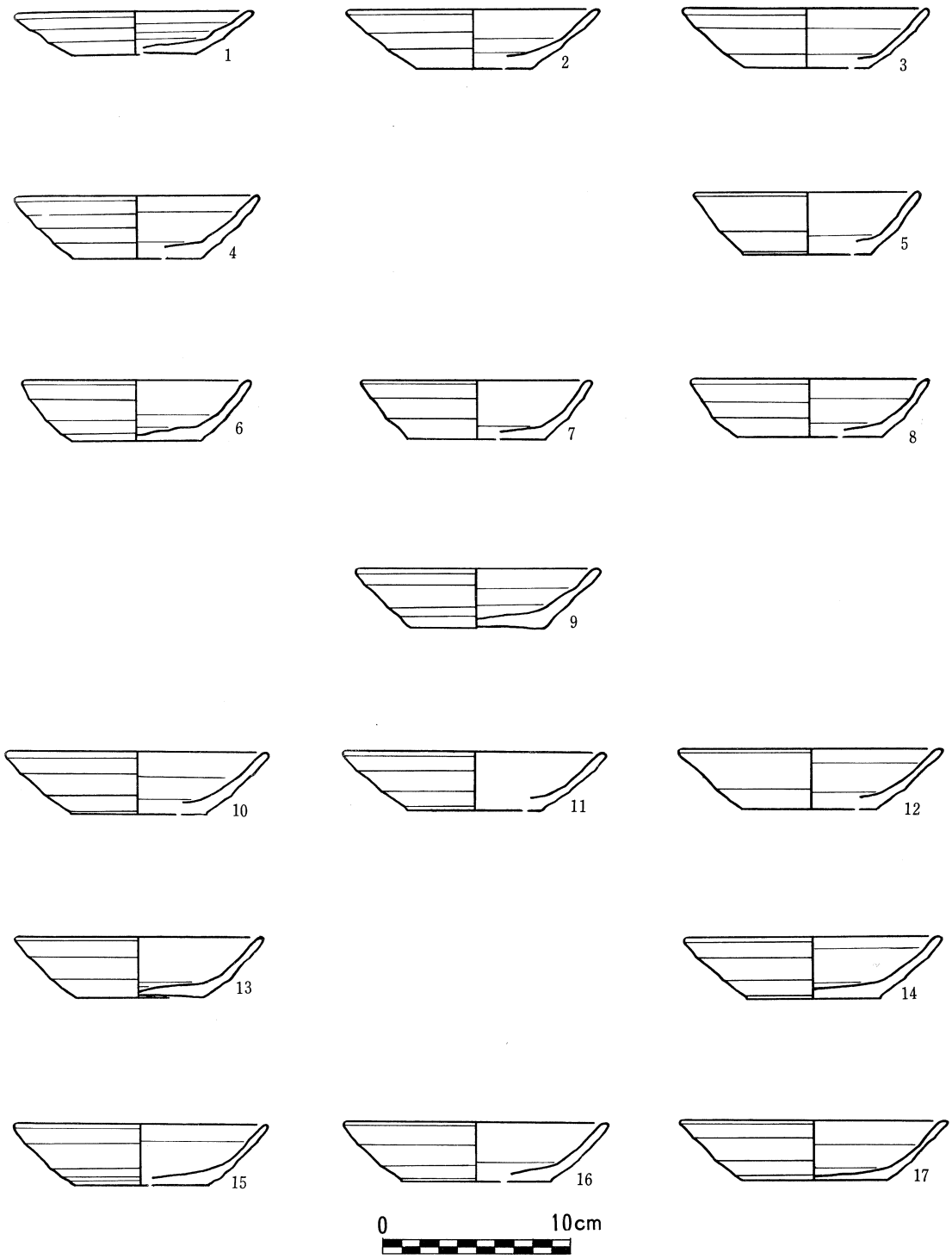
第21図　土塁内出土の土師質土器



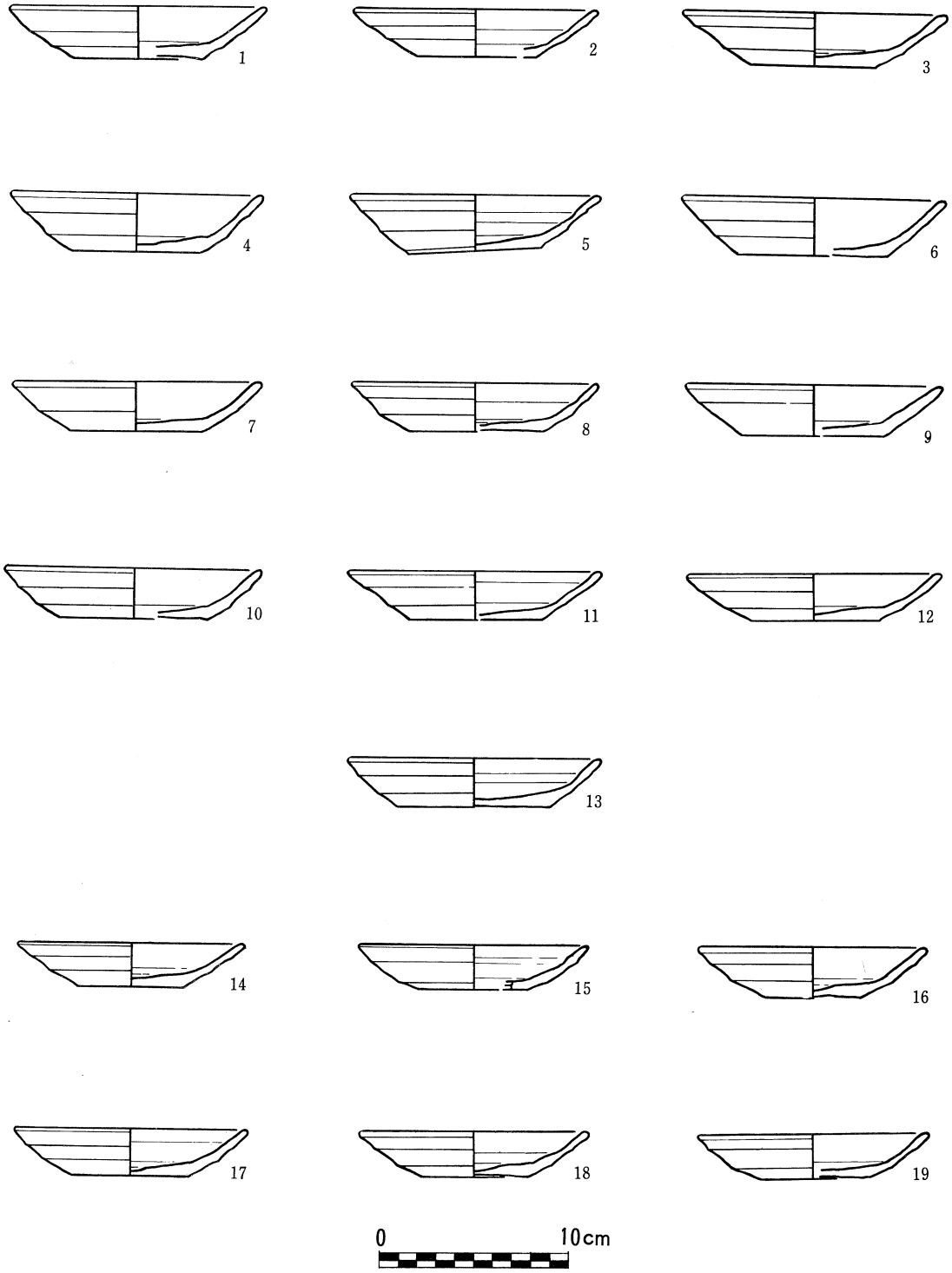
第22図　6号トレンチ内土師質土器出土微細図



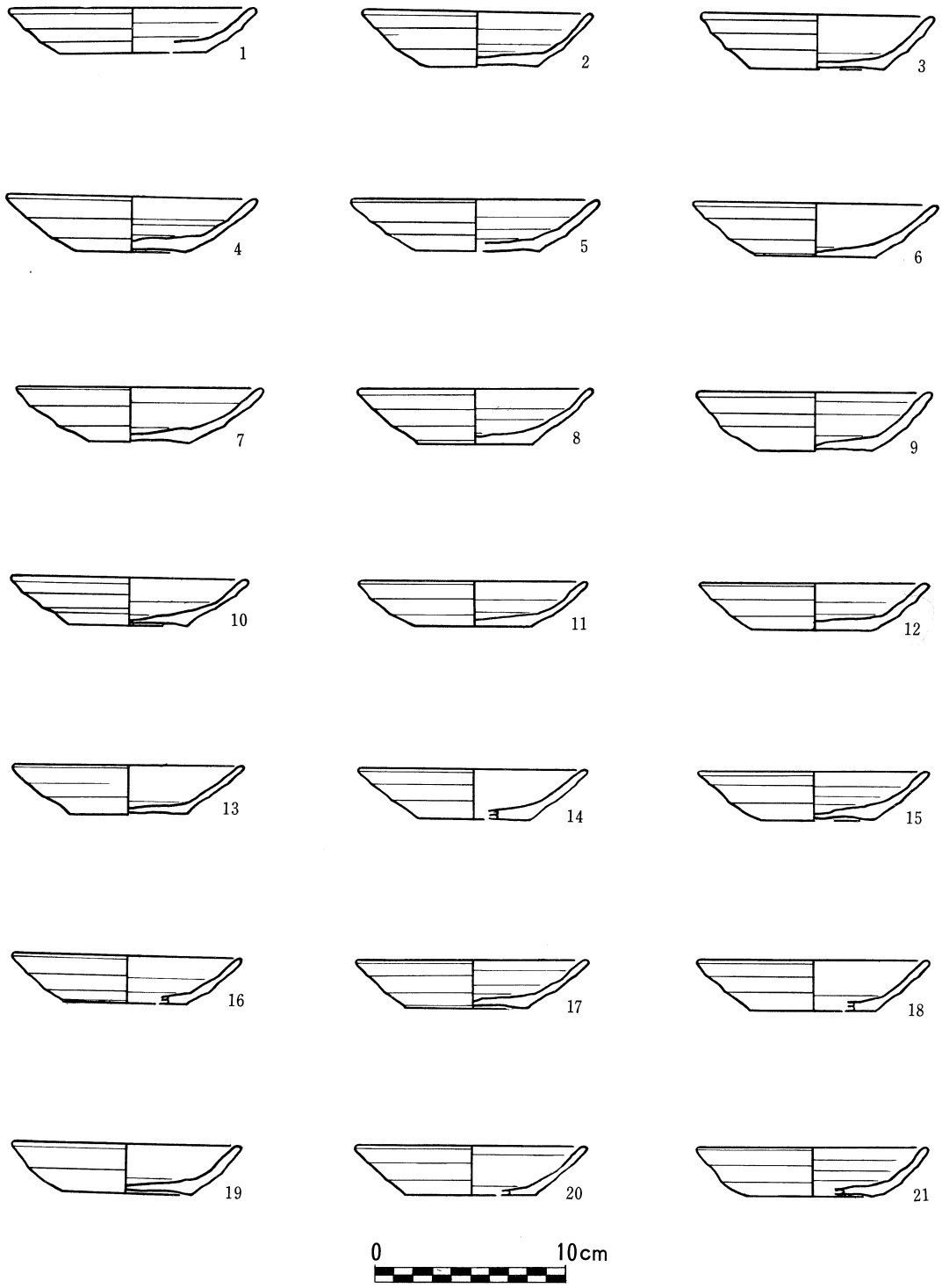
第23図　土師質土器



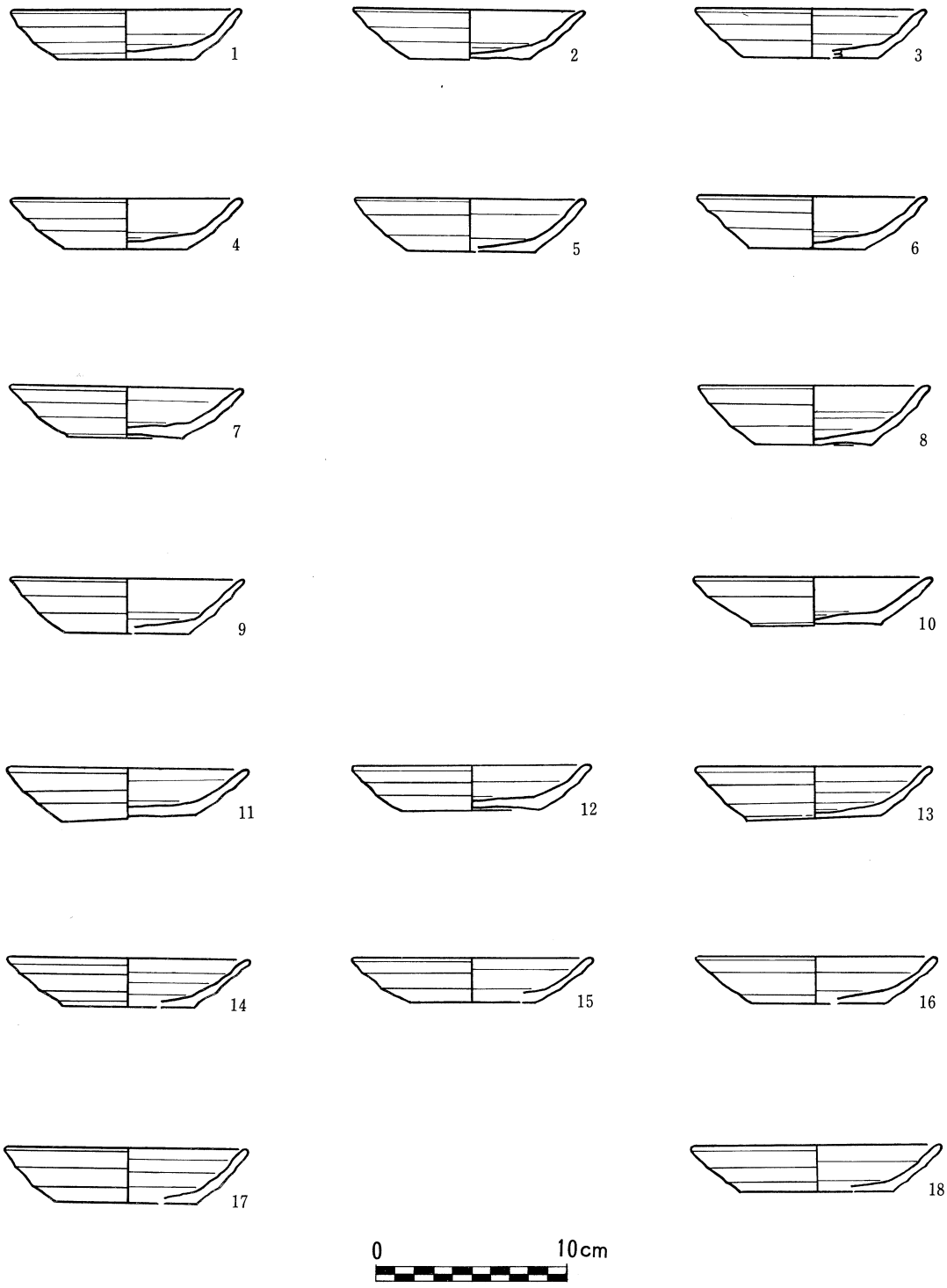
第24図　　土師質土器



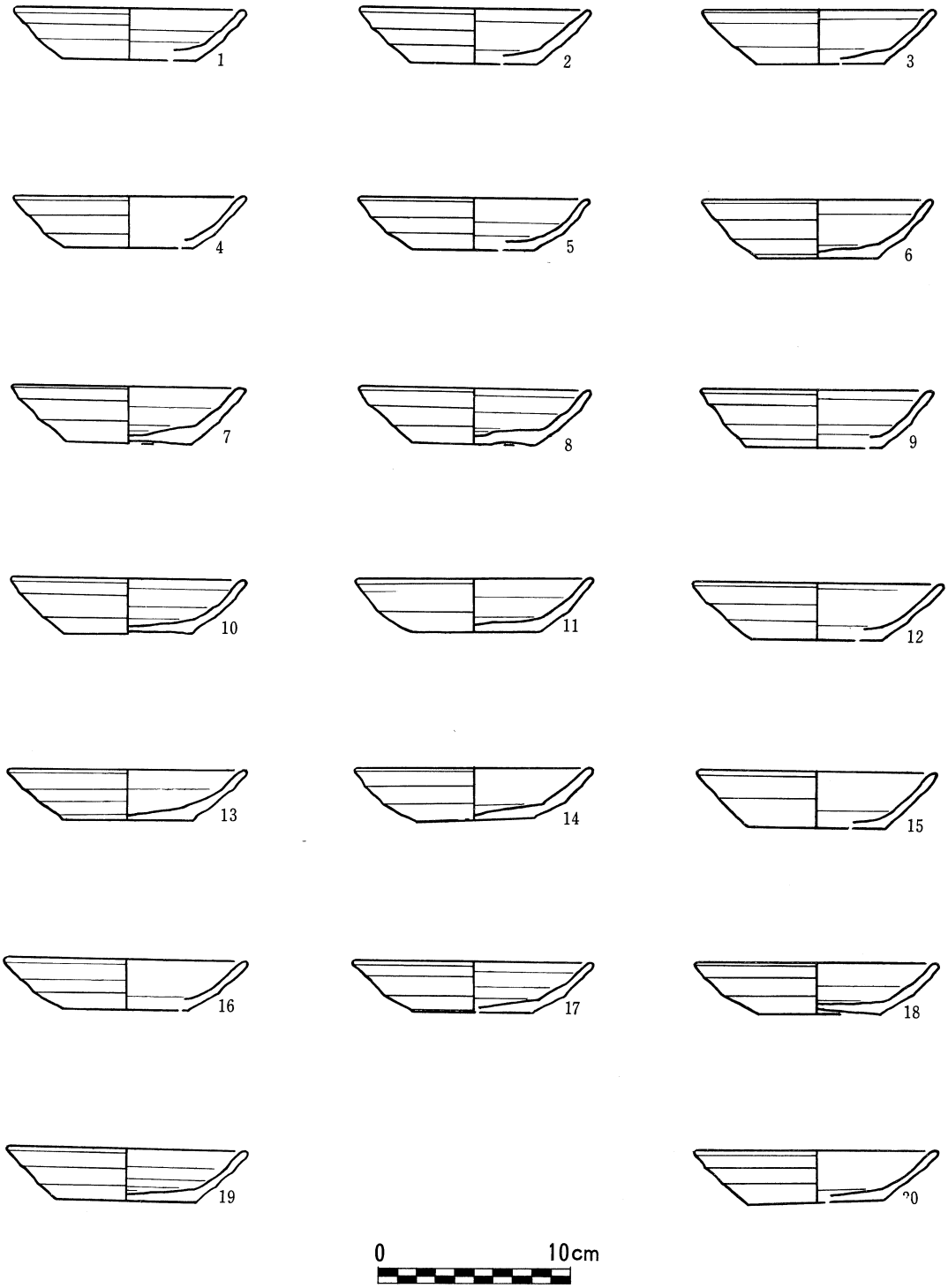
第25図　土師質土器



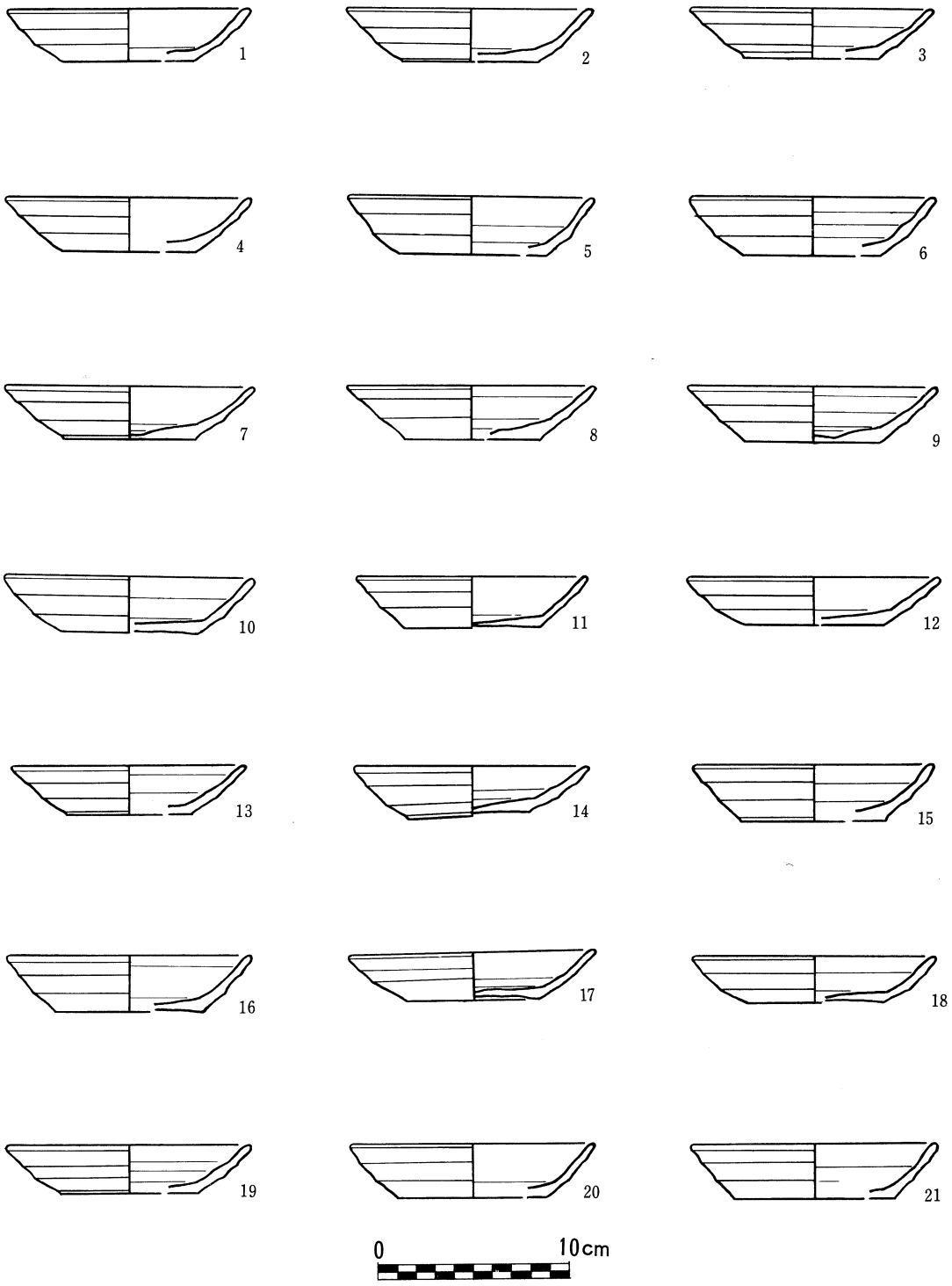
第26図　　土師質土器



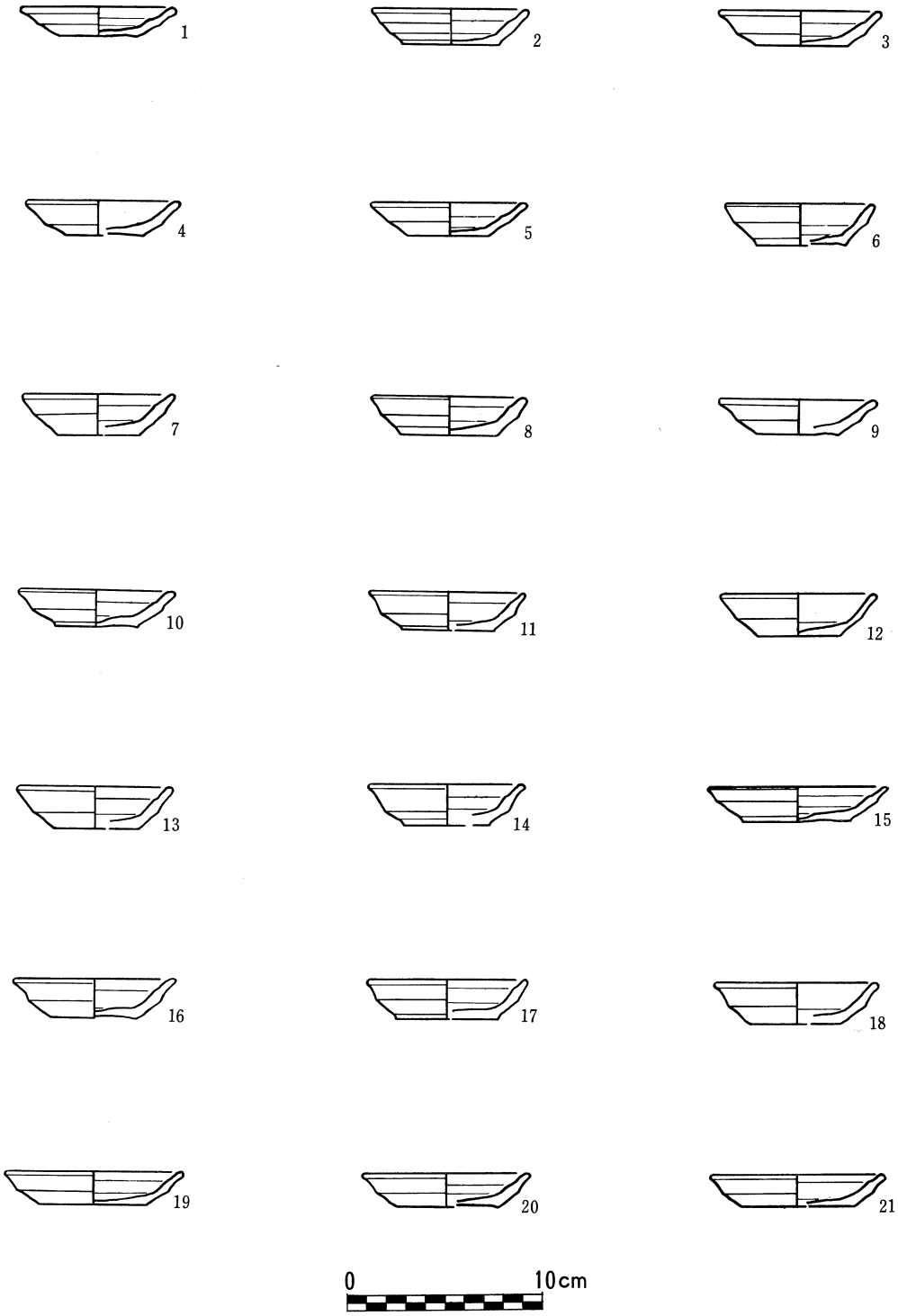
第27図　土師質土器



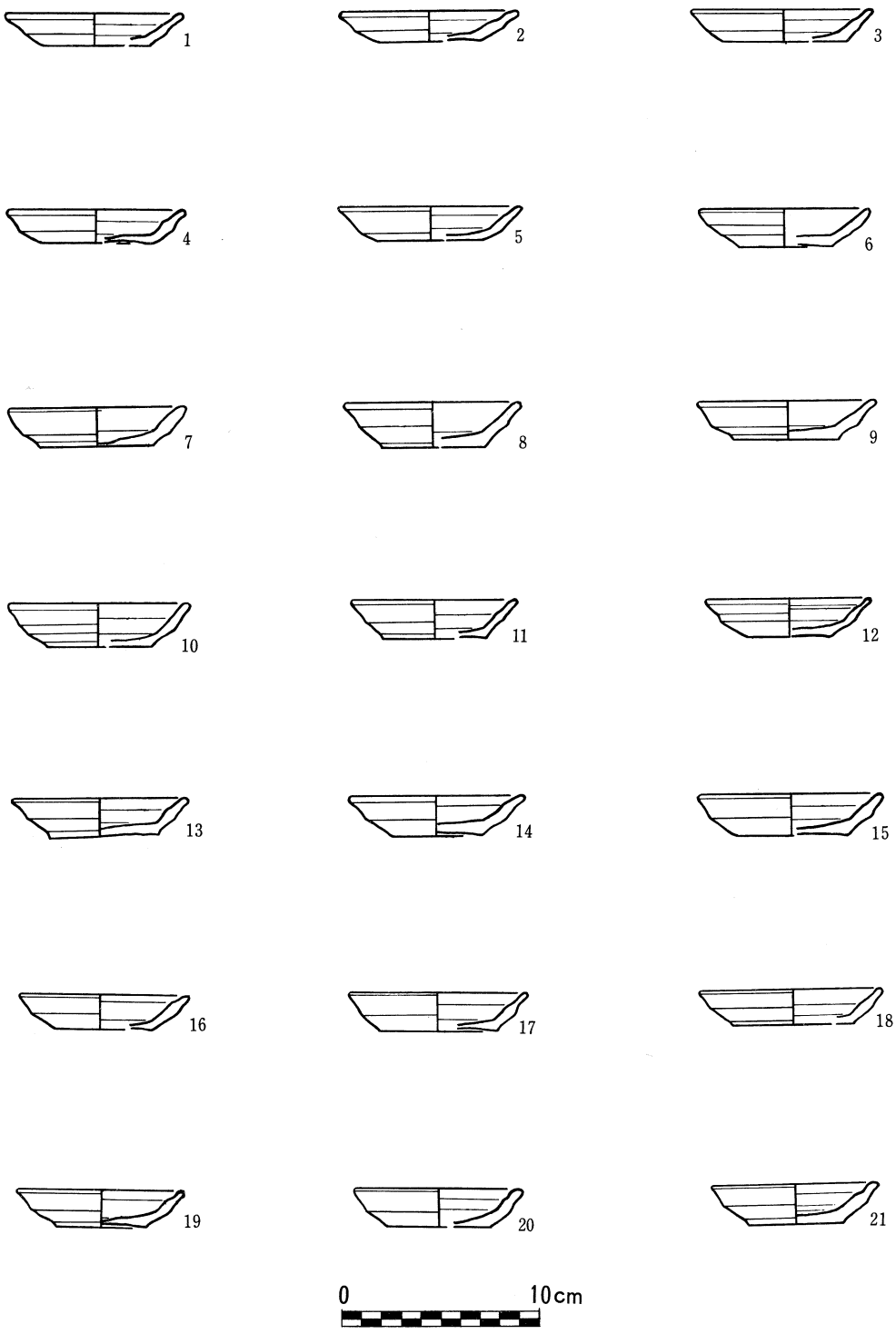
第28図　土師質土器



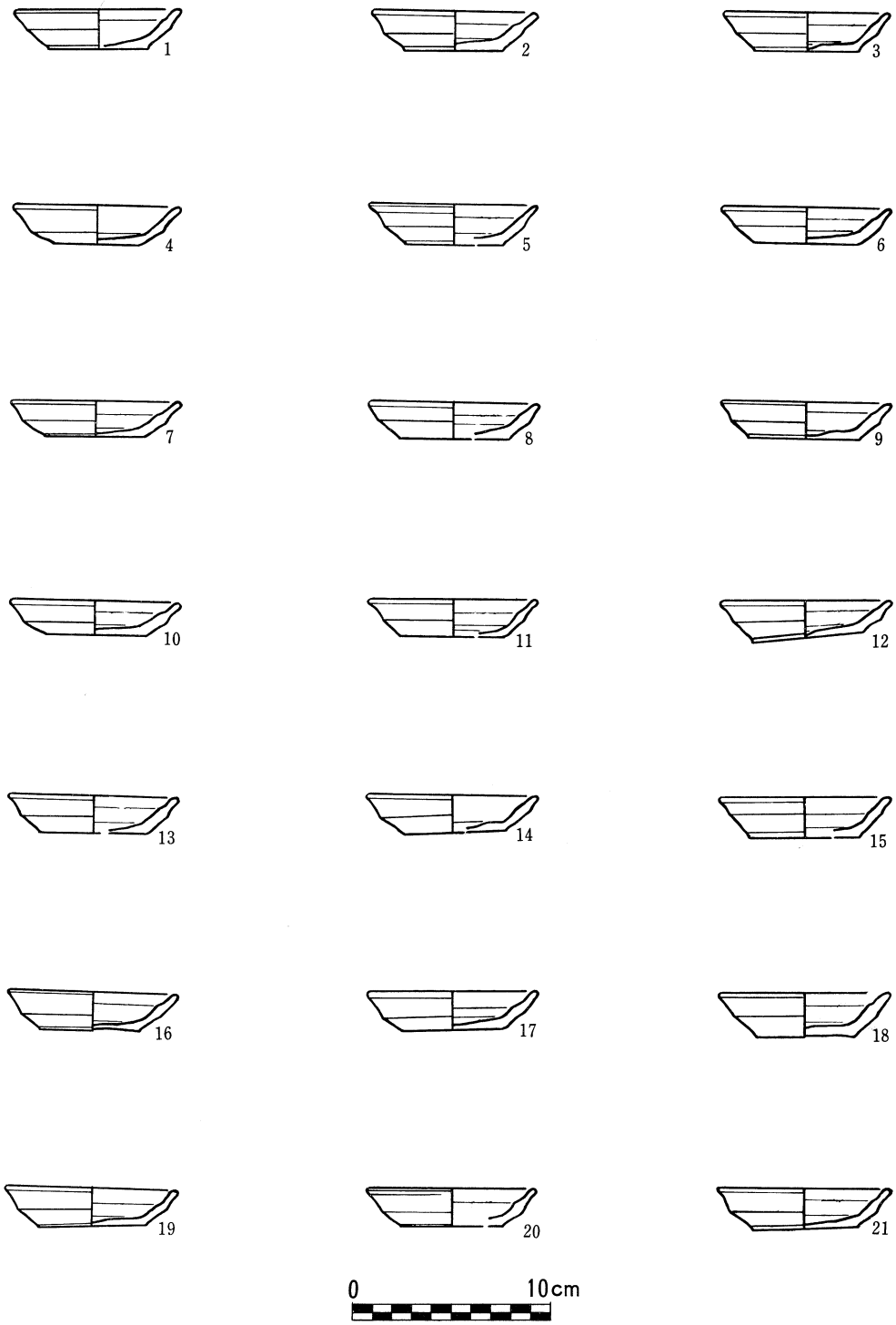
第29図　土師質土器



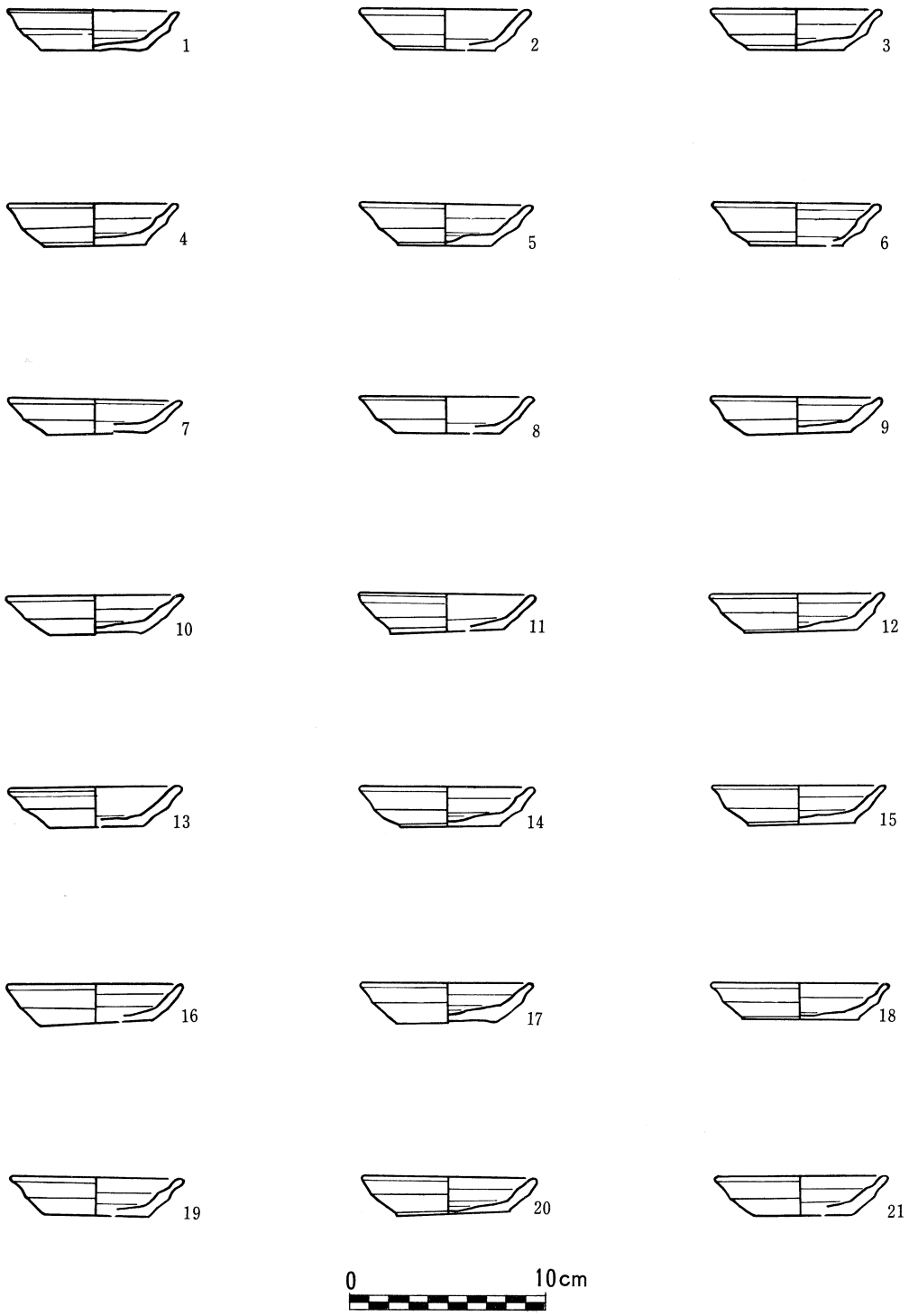
第30図　土師質土器



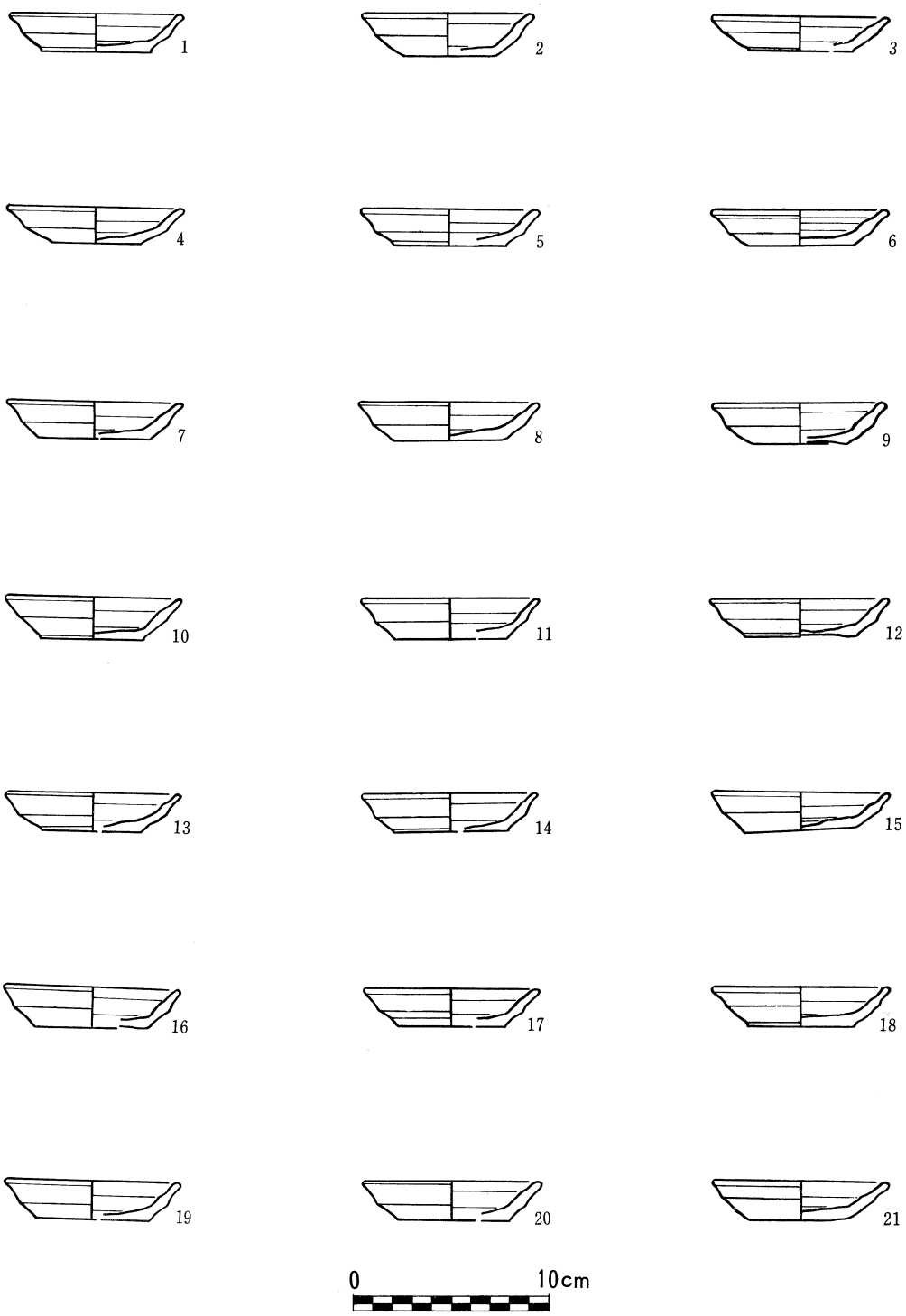
第31図　　土師質土器



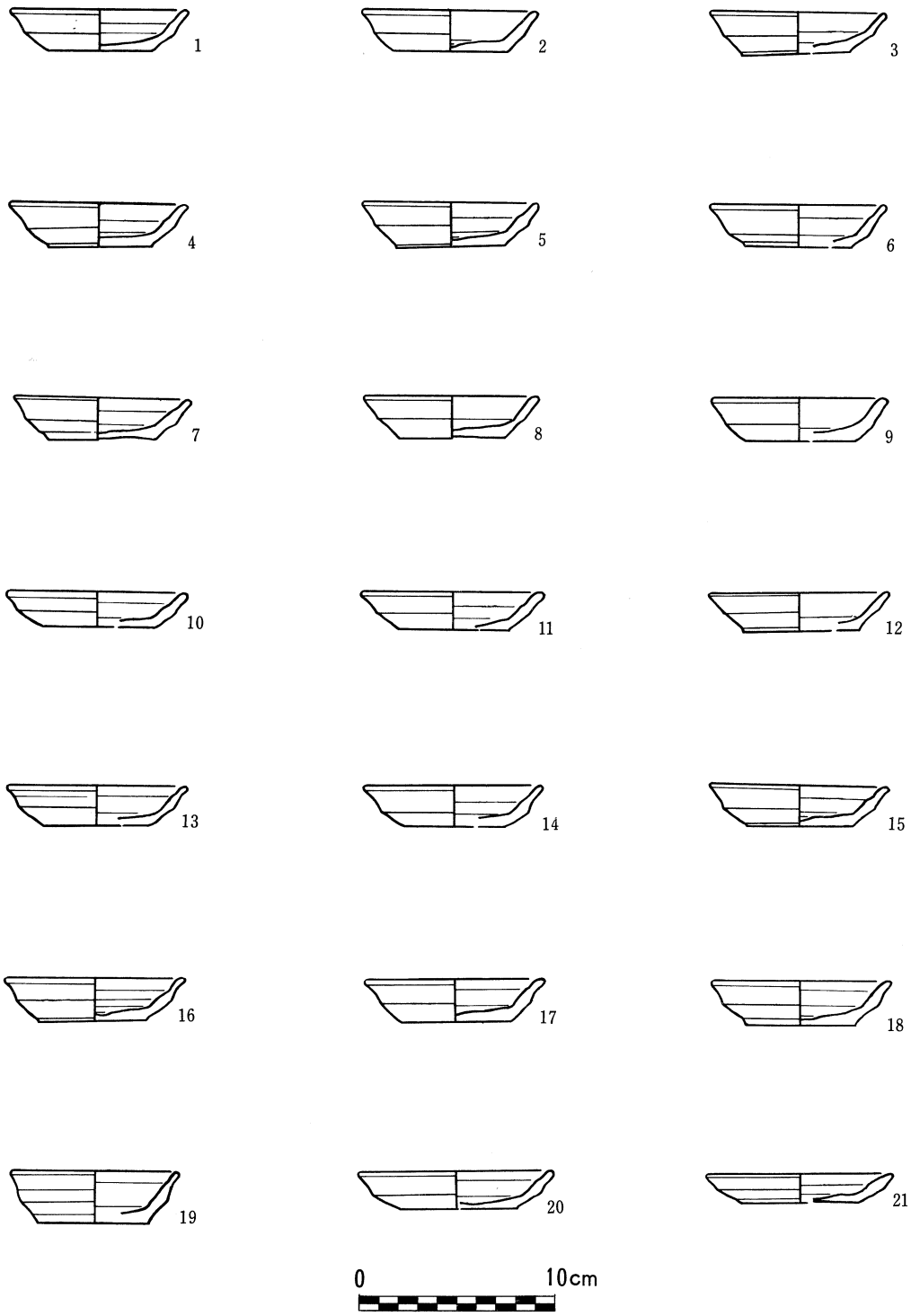
第32図　　土師質土器



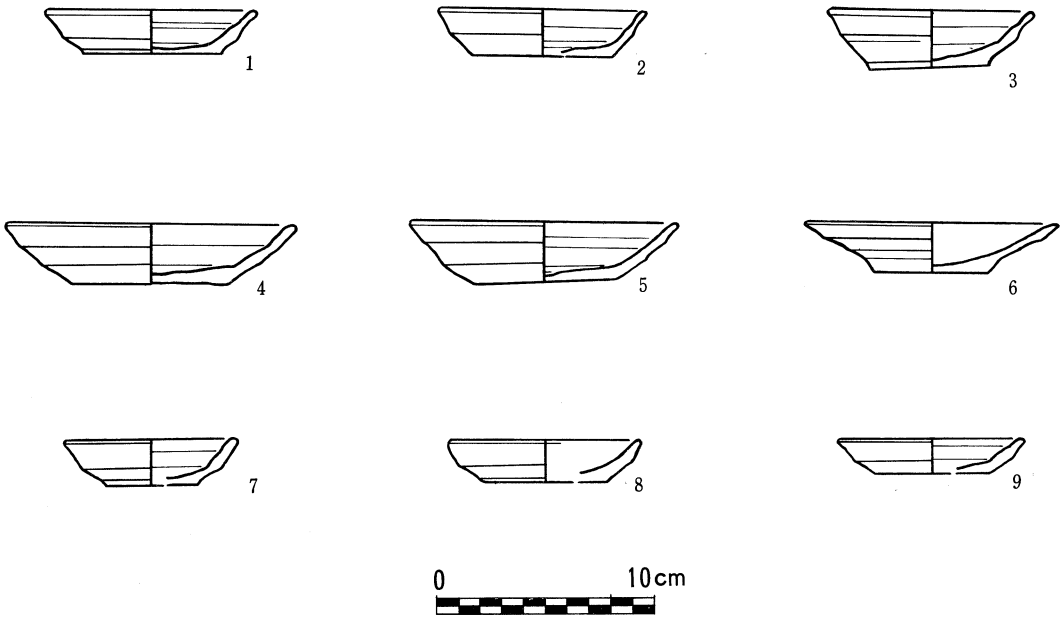
第33図　土師質土器



第34図　土師質土器



第35図　土師質土器



第36図　土師質土器

(伝)岩崎氏館跡出土土器法量表

図面番号	法量(mm)			法量比 1(器高 100)			法量比2(底径100)		備考
	口径	器高	底径	口径	器高	底径	口径	底径	
第23図 1	114	28	50	407	100	178	228	100	
2	119	26	56	450	〃	212	212	〃	
3	112	26	56	430	〃	215	200	〃	
4	116	26	58	446	〃	223	200	〃	
5	110	28	58	392	〃	207	189	〃	
6	112	29	58	386	〃	200	193	〃	
7	115	28	58	404	〃	204	198	〃	
8	114	30	60	375	〃	197	190	〃	
9	116	28	60	414	〃	214	193	〃	
10	114	26	58	438	〃	223	196	〃	
11	112	26	60	430	〃	230	186	〃	
12	114	29	66	393	〃	227	172	〃	
13	116	24	66	483	〃	275	175	〃	
14	116	27	66	429	〃	244	175	〃	
15	116	28	68	414	〃	242	170	〃	
16	117	26	62	450	〃	238	188	〃	
17	118	26	64	453	〃	246	184	〃	
18	119	27	62	440	〃	229	191	〃	
19	116	34	62	341	〃	182	187	〃	
第24図 1	127	23	64	538	〃	271	198	〃	
2	124	32	60	387	〃	187	206	〃	
3	131	32	66	409	〃	206	198	〃	
4	130	34	66	382	〃	194	196	〃	
5	120	34	68	352	〃	200	176	〃	
6	122	32	68	376	〃	209	179	〃	
7	122	32	72	381	〃	225	169	〃	
8	126	32	76	393	〃	237	165	〃	
9	130	32	70	406	〃	218	185	〃	
10	140	34	63	424	〃	185	222	〃	
11	140	32	70	437	〃	218	200	〃	
12	140	33	70	424	〃	212	200	〃	
13	132	34	68	388	〃	200	194	〃	
14	138	34	71	405	〃	208	194	〃	
15	136	33	80	412	〃	242	170	〃	
16	141	32	80	440	〃	250	176	〃	

図面番号	法量（mm）			法量比1（器高100）			法量比2(底径100)		備考
	口径	器高	底径	口径：器高：底径			口径：底径		
第24図 17	142	33	76	430	100	230	186	100	
第25図 1	136	28	66	485	〃	235	206	〃	
2	139	26	62	534	〃	238	224	〃	
3	140	29	66	482	〃	227	212	〃	
4	132	31	68	423	〃	217	194	〃	
5	132	31	70	425	〃	225	188	〃	
6	140	31	78	443	〃	246	179	〃	
7	132	26	68	507	〃	261	194	〃	
8	132	26	68	492	〃	253	194	〃	
9	136	28	74	485	〃	264	184	〃	
10	136	27	78	492	〃	282	174	〃	
11	134	26	70	515	〃	269	191	〃	
12	134	25	68	536	〃	272	197	〃	
13	134	26	80	515	〃	307	167	〃	
14	120	24	54	500	〃	225	222	〃	
15	121	24	58	504	〃	241	208	〃	
16	120	27	50	444	〃	185	240	〃	
17	123	26	60	473	〃	230	205	〃	
18	122	24	56	508	〃	233	217	〃	
19	122	24	56	508	〃	233	217	〃	
第26図 1	129	24	74	537	〃	308	174	〃	
2	120	30	58	400	〃	193	206	〃	
3	122	29	70	420	〃	241	174	〃	
4	130	30	54	433	〃	180	240	〃	
5	130	28	64	464	〃	228	203	〃	
6	128	28	63	457	〃	225	203	〃	
7	128	29	52	438	〃	178	246	〃	
8	124	30	60	413	〃	200	205	〃	
9	122	30	60	396	〃	194	203	〃	
10	120	24	60	500	〃	250	187	〃	
11	120	24	60	483	〃	241	200	〃	
12	120	26	60	461	〃	230	200	〃	
13	120	26	60	441	〃	220	200	〃	
14	120	27	60	461	〃	230	200	〃	
15	120	26	60	480	〃	256	187	〃	
16	120	25	64	480	〃	256	187		

図面番号	法量(mm)			法量比1（器高100）			法量比2(底径100)		備考
	口径	器高	底径	口径：器高：底径			口径：底径		
第26図 17	120	25	64	472	100	251	187	100	
18	120	27	64	444	〃	237	187	〃	
19	120	26	68	461	〃	261	176	〃	
20	120	26	68	461	〃	261	176	〃	
21	120	26	66	461	〃	253	181	〃	
第27図 1	120	26	70	461	〃	269	171	〃	
2	120	26	64	461	〃	246	187	〃	
3	120	26	70	461	〃	269	171	〃	
4	120	26	64	451	〃	240	187	〃	
5	120	28	66	428	〃	235	181	〃	
6	120	28	61	428	〃	217	196	〃	
7	121	28	62	432	〃	217	198	〃	
8	120	31	61	379	〃	196	193	〃	
9	122	30	66	406	〃	220	184	〃	
10	124	26	68	476	〃	261	182	〃	
11	125	26	68	480	〃	261	187	〃	
12	124	24	72	516	〃	300	172	〃	
13	124	27	70	449	〃	253	177	〃	
14	126	26	68	484	〃	261	185	〃	
15	126	24	66	525	〃	275	190	〃	
16	126	24	70	508	〃	282	180	〃	
17	126	29	72	425	〃	243	175	〃	
18	130	25	78	520	〃	312	166	〃	
第28図 1	120	28	68	428	〃	242	176	〃	
2	120	29	64	413	〃	220	187	〃	
3	120	29	64	413	〃	220	187	〃	
4	120	29	66	405	〃	222	181	〃	
5	121	28	61	432	〃	217	198	〃	
6	120	30	62	394	〃	203	193	〃	
7	120	30	65	400	〃	216	184	〃	
8	121	30	64	403	〃	213	189	〃	
9	121	30	70	403	〃	233	172	〃	
10	123	29	66	421	〃	226	186	〃	
11	123	28	64	439	〃	228	192	〃	
12	122	30	66	406	〃	220	184	〃	

図面番号		法量（mm）			法量比1（器高100）			法量比2(底径100)		備考
		口径	器高	底径	口径：器高：底径			口径：底径		
第28図	13	124	27	66	449	100	239	187	100	
	14	124	28	62	442	〃	221	200	〃	
	15	124	30	70	413	〃	233	177	〃	
	16	127	27	66	470	〃	244	192	〃	
	17	126	27	62	463	〃	227	203	〃	
	18	126	27	62	463	〃	227	203	〃	
	19	126	28	62	450	〃	221	203	〃	
	20	127	28	60	453	〃	214	211	〃	
第29図	1	127	28	66	453	〃	235	192	〃	
	2	128	29	70	444	〃	241	184	〃	
	3	128	29	70	432	〃	236	182	〃	
	4	129	30	68	430	〃	226	169	〃	
	5	129	31	76	413	〃	243	169	〃	
	6	128	31	70	405	〃	221	182	〃	
	7	130	28	68	464	〃	242	191	〃	
	8	130	28	70	464	〃	250	185	〃	
	9	130	29	70	445	〃	233	185	〃	
	10	130	30	68	433	〃	226	191	〃	
	11	120	28	70	428	〃	250	171	〃	
	12	122	23	70	516	〃	296	174	〃	
	13	123	26	65	473	〃	250	189	〃	
	14	123	23	64	521	〃	271	192	〃	
	15	126	30	76	420	〃	253	165	〃	
	16	127	30	76	423	〃	253	167	〃	
	17	128	35	68	363	〃	193	188	〃	
	18	128	25	70	496	〃	271	182	〃	
	19	128	26	70	492	〃	269	182	〃	
	20	128	28	76	450	〃	267	168	〃	
	21	128	29	82	441	〃	382	156	〃	
第30図	1	80	15	38	533	〃	253	210	〃	
	2	80	19	58	421	〃	305	137	〃	
	3	83	18	58	461	〃	322	143	〃	
	4	78.4	18	40	435	〃	222	196	〃	
	5	79	18	41	438	〃	227	192	〃	
	6	76.8	21	55	355	〃	256	138	〃	

図面番号	法量（mm）			法量比1（器高100）			法量比2(底径100)		備考
	口径	器高	底径	口径	：器高	：底径	口径	：底径	
第30図 7	78	21	42	371	100	200	185	100	
8	79	20	50	395	〃	250	158	〃	
9	80	18	42	444	〃	233	190	〃	
10	80	18	43	444	〃	238	186	〃	
11	80	20	48	400	〃	240	166	〃	
12	80	22	42	363	〃	190	190	〃	
13	80	22	42	363	〃	190	190	〃	
14	80	22	43	363	〃	195	186	〃	
15	82	18	50	455	〃	277	164	〃	
16	82	20	44	410	〃	220	186	〃	
17	82	20	52	398	〃	252	157	〃	
18	83	20	46	406	〃	225	180	〃	
19	91	17	54	529	〃	313	168	〃	
20	86	17	50	488	〃	284	178	〃	
21	88	16	56	550	〃	350	157	〃	
第31図 1	90	16	52	562	〃	325	173	〃	
2	90	16	50	562	〃	312	180	〃	
3	90	16	60	542	〃	361	150	〃	
4	90	17	56	511	〃	318	160	〃	
5	92	17	53	516	〃	297	173	〃	
6	89	22	42	390	〃	184	211	〃	
7	90	20	42	450	〃	210	214	〃	
8	91	22	42	413	〃	190	216	〃	
9	84	20	42	420	〃	210	200	〃	
10	84	20	42	420	〃	210	200	〃	
11	88	20	44	440	〃	220	200	〃	
12	88	20	44	427	〃	213	200	〃	
13	84	21	56	400	〃	266	150	〃	
14	86	18	58	477	〃	322	148	〃	
15	90	20	60	450	〃	300	150	〃	
16	92	18	61	511	〃	338	150	〃	
17	84	19	46	428	〃	234	182	〃	
18	85	19	51	433	〃	260	166	〃	
19	84	20	48	420	〃	240	175	〃	
第32図 1	84	20	50	420	〃	250	168	〃	

図面番号	法量(mm)			法量比1(器高100)			法量比2(底径100)		備考
	口径	器高	底径	口径：器高：底径			口径：底径		
第32図 2	84	20	52	420	100	260	161	100	
3	84	20	52	420	〃	260	161	〃	
4	85	20	43	425	〃	215	197	〃	
5	85	20	49	416	〃	240	173	〃	
6	86	18	52	467	〃	282	165	〃	
7	86	18	50	477	〃	277	172	〃	
8	86	19	54	452	〃	284	159	〃	
9	86	19	56	447	〃	291	153	〃	
10	86	18	50	477	〃	277	172	〃	
11	86	19	51	452	〃	268	168	〃	
12	86	19	56	452	〃	294	153	〃	
13	86	19	52	447	〃	270	165	〃	
14	86	20	52	430	〃	269	165	〃	
15	86	20	54	421	〃	264	159	〃	
16	86	20	50	430	〃	250	172	〃	
17	86	20	50	430	〃	250	172	〃	
18	86	22	48	390	〃	218	179	〃	
19	87	20	54	435	〃	270	161	〃	
20	86	20	51	430	〃	255	168	〃	
21	86	20	52	421	〃	254	165	〃	
第33図 1	87	20	50	426	〃	245	174	〃	
2	86	21	50	398	〃	235	172	〃	
3	86	21	48	398	〃	222	179	〃	
4	86	22	52	390	〃	236	165	〃	
5	87	22	48	395	〃	218	181	〃	
6	86	22	48	380	〃	212	179	〃	
7	88	18	50	488	〃	277	176	〃	
8	88	19	54	463	〃	284	162	〃	
9	88	19	52	448	〃	265	169	〃	
10	89	20	46	445	〃	230	193	〃	
11	89	20	57	445	〃	285	156	〃	
12	88	20	55	440	〃	275	160	〃	
13	88	20	56	431	〃	274	157	〃	
14	88	21	50	415	〃	235	176	〃	
15	88	20	54	440	〃	270	162	〃	

図面番号	法量（mm）			法量比1（器高100）			法量比2(底径100)		備考
	口径	器高	底径	口径	：器高：	底径	口径：	底径	
第33図 16	89	20	56	445	100	280	158	100	
17	88	20	52	431	〃	254	169	〃	
18	90	19	59	473	〃	310	152	〃	
19	88	20	52	440	〃	260	169	〃	
20	89	20	56	445	〃	280	158	〃	
21	88	20	48	431	〃	235	183	〃	
第34図 1	88	20	56	440	〃	280	157	〃	
2	88	22	56	400	〃	254	157	〃	
3	90	18	52	500	〃	288	173	〃	
4	90	18	46	483	〃	247	195	〃	
5	90	19	58	459	〃	295	155	〃	
6	90	18	54	483	〃	293	166	〃	
7	90	19	56	468	〃	291	160	〃	
8	91	19	56	473	〃	291	162	〃	
9	88	21	46	407	〃	212	191	〃	
10	90	21	52	416	〃	240	173	〃	
11	90	20	58	450	〃	290	155	〃	
12	90	20	56	450	〃	280	160	〃	
13	90	20	50	450	〃	250	180	〃	
14	90	20	58	450	〃	290	155	〃	
15	90	20	56	450	〃	280	160	〃	
16	90	21	58	416	〃	268	155	〃	
17	90	20	54	450	〃	270	166	〃	
18	90	20	52	450	〃	260	173	〃	
19	90	20	58	450	〃	290	155	〃	
20	90	20	56	450	〃	280	160	〃	
21	90	20	50	450	〃	250	180	〃	
第35図 1	90	21	52	424	〃	245	173	〃	
2	90	22	58	409	〃	263	155	〃	
3	90	22	56	409	〃	254	160	〃	
4	90	22	52	394	〃	228	173	〃	
5	90	22	55	398	〃	243	163	〃	
6	90	22	55	409	〃	250	163	〃	
7	90	22	54	409	〃	245	166	〃	
8	90	22	54	409	〃	245	166	〃	

図面番号	法量（mm）			法量比1（器高100）			法量比2(底径100)		備考
	口径	器高	底径	口径：底径：器高			口径：底径		
第35図 9	90	22	56	409	100	254	160	100	
10	92	18	56	511	〃	311	164	〃	
11	93	20	56	466	〃	280	166	〃	
12	92	20	60	460	〃	300	153	〃	
13	92	20	54	450	〃	264	170	〃	
14	92	21	50	438	〃	238	184	〃	
15	92	21	54	433	〃	254	170	〃	
16	92	22	54	418	〃	245	170	〃	
17	92	22	56	418	〃	254	164	〃	
18	92	22	56	407	〃	247	164	〃	
19	86	27	56	313	〃	204	153	〃	
20	100	20	58	500	〃	290	172	〃	
21	96	15	60	631	〃	394	160	〃	
第36図 1	97	21	63	461	〃	300	153	〃	
2	96	22	64	436	〃	290	150	〃	
3	94	26	54	361	〃	207	174	〃	
4	123	28	70	439	〃	250	175	〃	
5	112	28	64	435	〃	228	190	〃	
6	116	23	52	491	〃	220	223	〃	
7	80	22	42	363	〃	190	190	〃	
8	88	20	56	440	〃	280	157	〃	
9	84	16	42	525	〃	262	200	〃	

第5章　土師質土器の分類

(1)　出土土器の特徴

第6号トレンチより出土した夥しい土師質土器は，土塁部では黒褐色土層中，堀内では灰青色泥層は多く発見された。その出土状況は，特に堀内ではブロック状に無秩序に投棄された如く，乱雑に推積した様に見うけられた。更に，同地点より出土した遺物は，土師質土器のみで他の遺物の混入は全く認められない点も出土状況に於ける特徴といえよう。

出土した土師質土器は，図上復元できたものが263個であるが，この数は出土土師質土器片の総数からして投棄された個体数に近い数値であると思われる。

土師質土器を大きく分類すると

1.　口径が10 cm以上の個体

2.　〃　が10 cm以下の個体

の二種類の皿形土器に分類でき，前者を皿形土器，後者を小型皿形土器と仮称して，以後の考察を進めたい。

皿形土器および小型皿形土器の特徴について記述すると，まず両者の製作課程[註1]は，大まかには9世紀以後普及したと見られる。

粘土塊→器形の引出し(水びき手法)→切り離し(糸切り)→(乾燥)→焼成

の諸工程を経て製作されたものである点が挙げられ，次に形態上では，底は回数糸切りであるが，切離しのままのために糸切痕が顕著に認められ，僅かな台状を形成するものが多数であり，一般的な形態といえる。なお台状を形成しないものも見られるが，これは台状を呈する部分が僅か数ミリメートルであることから，切り離し工程，すなわち糸切りの際の個人的技術差に起因した例外品と考えられるのである。器体の内外面全体に器形引出し時のロクロ回転痕が顕著に認められるものの，平安時代の土師器の胴部外面に見られる「箆削り」痕や，底の糸切りに対する周辺の「箆削り」の整形技術，更には内面に施される暗文の技術もまったく見られず，平安時代の土器と比べ隔絶の感を呈するものといえる。形態上の特徴は前述したものの外に，立上り部（胴部）の中程が肥厚すること及び，底面中心部が凹状を形成する諸点がある。前者は粘土塊からの引出し課程に於ける指出し指の圧力の強弱により形成され，後者は指先の圧力あるいは焼成による変形によって形成されたものであろう。

胎土の成分は，粘土の外に石英，雲母，赤色スコリアなど数種類の鉱物が混入され，表面観察によっても顕著に露呈した状態が確認できる。器肉断面を観察すると混入物が多いため緻密ではなく，微小な空洞部が多く認められ（所謂レンガ状を呈する）る。また，肌ざわりは「ざらざら」の感触を受ける。

焼成は，平安時代の杯・皿形土器などの胎土断面に見られる焼成段は見られず，同一色調を呈している点が挙げられる。[註2]

(2) 第6号トレンチ出土土師質土器の分類

皿形土器は133点が図上復元されたが,

口径 110㎜～119㎜……A類 120㎜～130㎜……B類 132㎜～142㎜……C類

器高 20㎜～23㎜……a類 24㎜～31㎜……b類 32㎜～34㎜……c類

口径と底径関係 口径>底径×2……I 口径=底径×2……II 口径<底径×2……III

とした場合, 14種類に分類される。なお底径と口径との比率 $\left(H=\frac{口経}{底経}\right)$ において一定の比率ごとに分類すると, 更に細分される。

AbI類 第23図1, 2

AbII 第23図3～4

AbIII 第23図5～19

BaIII類 第24図1

BcI類 第24図2

BcIII類 第24図3～9

CcI類 第24図10

CcII類 第24図11, 12

CcIII類 第24図13～17

CbI—1類 (H=2以下) 第25図1

CbI—2類 (H=2.1以下) 第25図2～3

CbIII 第25図4～13

BbI類 第25図14～19, 第26図2・4～9 第28図17～20

BbII類 第26図11～14 第28図14

BbIII類 第26図1・3・10・15～21
第27図1～18
第28図1～13・15・16
第29図1～21

皿形土器は以上14種類に分類され, 各種類別の法量的占有数は, 別表1のよになり, Bb類が最も多数を占め86例, 次にAb類の19例, Cb類の13例といった順になり, 口径では24㎜～31㎜の間に118例 (Ab, Bb, Cb) の集中が見られ, これらの間が本器形の標準的法量と考えられる。

小型皿形土器は130点が図上復元され,

口径 76㎜～83㎜……A′類 84㎜～93㎜……B′類 94㎜～100㎜……C′類

器高 12㎜～17㎜……a′8 18㎜～11㎜……b′類 24㎜～28㎜……c′類

口径と径関係 口径>底径×2……I′類 口径=底径×2……II′類 口径<底径×2……III′類

とした場合12種類に分類される。なお底径と口径の比率関係 $\left(H=\frac{口経}{底経}\right)$ において, それぞれ

一定の比率ごとに分類すると更に細分される。

AaⅠ類　第30図1

AbⅢ－1類（H＝1.5以下）　第30図2，3

A'b'Ⅲ－2類（H＝2～2.9）　第30図4～18）

B'a'Ⅲ類　第30図19～21　第31図1～5

B'b'Ⅰ　第31図6～8

BbⅡ　第31図9～12

B'b'Ⅲ－1類（H＝1.4以下）第31図14

B'b'Ⅲ－2類（H＝1.5～2以下）

第31図13・15～19，第32図1～21，第33図1～21，第34図1～21，第35図1～18

B'c'類　第35図19

C'a'類　第35図21

C'b'類　第35図20，第36図1～2

C'c'類　第36図3

となり，法量的占有数は別表2の様になり，B'b'類が95例と最も多く，次いでA'b'類の17例，B'a'類の8例となり，器高ではb類（18～23㎜）の範囲に115例（Ab，Bb，Cb），口径においてはB'類（84～93㎜）の範囲に104例（Ba，B'b'，B'c'）という様な集中が見られ，この付近が本器形の標準品といえるものであろう。

(3)　その他のトレンチ内出土土師質土器

1号トレンチよりは（分類規準は6号トレンチに同じ）皿型土器及び小型皿形土器が出土し，皿形土器はB'b'Ⅲ類（第36図4），小型皿形土器はA'b'Ⅲ類（第36図7），B'a'Ⅱ類（第36図9），B'b'Ⅲ類（第36図8）に分類される。

4号トレンチよりは皿形土器のA'b'Ⅲ類（第36図5）が出土した。

なお出土地が不明であるがA'a'Ⅰ類（第36図6）が出土している。

(4)　分類について

出土した土師質土器について，皿型土器を14種類，小型皿形土器を12種類に分類したが，この分類上の規準は「法量比」に置いた。何故「法量比」に依り分類をなしたかというと，既に前項で述べた様に，土器の形態的特徴は通して同じであり、特に立上り部の中程に見られる肥厚する形態は，製作技術に裏付けられて具現化したものであり，最大の特徴といえるのである。よって形態上の違いはないものと見なし，法量化による分類を試みたのである。

しかし，図示した皿形土器のうち第36図6（A'a'I'類）と小型皿形土器のうちの第31図5（BaⅢ），第36図8（BbⅢ）の3点が他のものと異形の感をするものであるが，やはり立上り部中程が肥厚しており，製作技術的には他の物のと同じ技術によって作り出されたものと考察されるのであ

る。また3点の占有率は極めて微少であり，分類上の支障とはならない範囲のものといえるが，ただ，3点のうち2点が第6号トレンチ以外より出土している点が年代差によるものか否か注意する必要があろう。

註1　田中　琢「須恵器製作技術の再検討」『考古学研究』42

註2　焼成段とは器肉断面に焼成の熱量の侵透の違いによって生じる色調変化のことであり，平安時代の器肉の薄い，精々土の杯形・皿形土器には顕著に認められる。

別表1（皿形土器法量表）

口径＼器高	2.0	2.2	2.4	2.6	2.8	3.0	3.2	3.4	3.6		
11.0					1						
11.2				2	1						
11.4				1	2	1					
11.6			1		2	1					
11.8				3							
12.0			6	12	9	6		1			
12.2			4	2	3	3	2				
12.4			2	3	1	2	1				
12.6		1	1	4	4	2	1				
12.8			3	1	6	3					
13.0			1		4	2	2	1			
13.2				2		2		1			
13.4			1	2							
13.6				1	2		1				
13.8				1				1			
14.0					1	1	3	1			
14.2						1					

Aa	Ab	Ac
Ba	Bb	Bc
Ca	Cb	Cc

別表２（小型皿形土器法量表）

器高 口径	1.2	1.4	1.6	1.8	2.0	2.2	2.4	2.6	2.8
7.6					1				
7.8				2	2				
8.0		1		3	1	3			
8.2				2	3				
8.4				2	9				
8.6			1	9	11	4		1	
8.8			1	3	16	2			
9.0			5	7	15	10			
9.2			1	2	5	3			
9.4								1	
9.6		1			1	1			
9.8									
10.0					1				

Aa	Ab	Ac
Ba	Bb	Bc
Ca	Cb	Cc

第6章　土師質土器の考察

平安時代以降の土器については,「土師質土器」なる名称を使用するのが一般的傾向の様に見うけられるが，この名称に対する基準がどんな内容のものを指しているのかは研究者の間においてまちまちであり，今後論究されその用語の内容の統一が必要とされよう。

今回使用する名称の内容は「平安時代以降に使われた土器」という大まかな基準としたが，土師器との違いについて述べるならば，それは焼成後の胎土状態であろう。すなわち前項で述べた様に胎土に含まれる粘土の量が少ないためか，胎土断面を観察するに胎土中に微少な空洞部が見られる所謂レンガ状を呈する点にあると言える。

（伝）岩崎館跡と目されている凹地の第6号トレンチ付近から出土した夥しい土師質土器は，同トレンチの最下層（灰青色泥層）より一括して多く発見されたものであり，同時期か，それ程かけ離れた時期のものではなく，おそらく密接した時期に投棄されたものと考えられるのである。

出土した土師質土器を皿形土器と小型皿形土器とに分類してみたが，その形態はそれぞれ極めて高い近似性を有するものであり，特に法量的に見れば標準化とでもいえる様な一定の範囲内に高い比率で集中していることが見られるのである。

本県の場合の平安時代に於ける土師器編年については既に公表[註1]しているところであるが，この編年で12世紀代としているものについてその特徴を上げると，

1. 12世紀前半以前に見られた杯形土器の胴部に見られた篦削りが少なくなり，かつ底の糸切痕の調整もなされていないものが多くなるなど製作過程の省略化が見られる。
2. 12世紀前半より底の部分が台状を呈するものが多くなる。
3. 器肉の肥厚化が見られる。

等の諸点が指摘されるのである。

この編年に続くものとしては，末木健氏が「平安時代以降の土師質土器の編年[註2]について」と題して，土師質土器の編年試案を公表している。この試案について末木氏は「遺物の年代が何らかの方法で確定されない限り案としてしか通用しないが」と付帯意見をつけているが，12世紀末の例として日下部[註3]中学校々庭遺跡出土品の杯形土器第6類を上げている。この杯形土器は，全てロクロ整形で底は台状を呈し，糸切痕は切り離しであり，かつ器肉が肥厚のものであり，12世紀前半の器形の特徴を持ち合せたものである。13世紀中頃の例として，甲斐国[註4]分寺講堂址出土の土師質土器を上げている。この例もロクロ整形で台状の底を呈し，かつ器肉の厚いものである。推定時期の算出方法は，出土した土師質土器等の二次焼成が建長7年(西暦1256年)の同寺の焼失した際に受けたものとして時期を推定している。更に日下部中学校々庭遺跡と甲斐

国分寺講堂址跡出土例の間に北巨摩郡明野村出土の皿形土器をあてているが，やはり前二者の形態的特徴を有するものである。

これら三者の胎土を見るに日下部中学校々庭出土例は，比較的に粘土粒子が細かいものであり土師器の範囲に入るものと考えられるが，後二者の甲斐国分寺講堂址出土例，および明野村出土例は粘土粒子が荒く（粘土が少なく）石英等の混入物が多く含まれ，胎土が所謂レンガ状を呈するものである。

更に甲斐国分寺講堂跡出土品に続くものとして，今回の調査の行なわれた（伝）岩崎館跡出土品（法量比等を検討して13世紀中頃～15世紀中頃と推定）を上げ，また（伝）岩崎館跡に続くもの)として,昭和48年より調査されている（伝）勝沼氏館跡(16世紀初期～16世紀中頃)を例として取りあげている。

以上の如く述べてきた編年の成果を参考にして，今回出土の土師質土器について考察していきたい。

まず，小型皿形土器および皿形土器は，共に前記編年で指摘している様に器肉が土師器に比べて肥厚しており，底が台状を呈するもの(90%位)で，かつ糸切は切離しのままであり，更に胎土はレンガ状を呈するものであることなどから，その帰属する時期は平安時代以降と考えられるのである。小型皿形土器に類似するものは，平安時代の11世紀後半より見られ小型土器と称して扱っているが，その特徴は土師質土器にほとんど同じで器形的には若干の差位が見られる程度である。しかし最大の相違[註5]は，土師器の杯や皿に伴っていることであり小型皿形土器より古出の時期と考えられるのである。

皿形土器の形態的，法量的に比較すれば，Ab Ⅰ類の２例が日下部中学校々庭出土品(第６類)に類似し(底位×２＜口径)，Bb Ⅱ類の17例が明野村出土品に類似し，Bb Ⅲ類の86例が甲斐国分寺講堂址出土品に類似（底径×２＞口径）することになるが，特にBb Ⅲ類が出土品の80%を占めるというところに大きな特徴を有するものと言える。文献等で甲斐国分寺の焼失が13世紀中頃であり，一方岩崎氏が歴史上に登上してくるのも13世紀中頃と略規を一にしている点と甲斐国分寺講堂址出土品の器形と今回の出土品の 80% を占める Bb Ⅲ類の器形が類似するという点は単なる偶然ということだけで処理すべき問題ではなく，積極的に時期推定を可能にするものとして把えてよいのではなかろうか。もし積極的に考えられるとするならば，（伝）岩崎館跡出土品は13世紀中頃に比定され，，ひいては館跡の経営年代の一端が推定できることになろう。

次に（伝）勝沼氏館跡が昭和48年から昭和50年の３年間に６次に亘って発堀調査され[註6]，その成果の一部が概報等で公表されているので比較してみよう。

同館址よりは陶磁類，磁器類，土師土質器，瓦器類などが出土し，第１～第３期の生活面が確認されたと報告されている。このうち土師質土器はその数夥しく，かつそれぞれの生活面より出土しているとされている。第３期の生活面より出土した土師質土器の器形は器肉が極めて

厚くボテボテした感じのものであり，（伝）岩崎氏館跡出土の土師質土器の器形とは全く類似しない形態を呈するものである。この第3期の時期については伴出した陶器類が古瀬戸晩期の昔田古窯址（15世紀末～16世紀中頃）生産品であることから，15世紀末～16世紀中頃に比定されるものとしている。従って第1～第2期の時期は第3期の時期を逆のぼる時期に比定されるものであろう。

第1期～第2期の生活面よりの出土遺物は同報告書第15図8が第1期に，同図6が「第1期～第2期の中間層」ということであるが，図示されたものが少なく，多くを語れないが，形態的には類似点が認められ，法量は，

図8　口径：器高：底径＝481：100：281　底径：口径＝100：171

図6　口径：器高：底径＝505：100：208　底径：口径＝100：140

となり，(伝)岩崎氏館跡出土の皿形土器BbⅢ類の底径×2＞口径に近似するものであると言えよう。第1期，第2期の時期については同報告書等は触れておらず，かつ伴出陶器類が提示されていないので断定はできないが，先程とり上げた2点の土師質土器の形態や法量が代表的器形に続く近い時期ではないかと考えられよう。しかし，（伝）岩崎氏館跡出土の土師質土器の時期についても陶磁器類の伴出がないので陶磁器類からの時期決定ができないので確証がもてないのであり，場所の異なる出土品についての比較は今しばらくの時間を必要としよう。それは，（伝）岩崎氏館跡出土の皿形土器の年代が確証がもてないことと，その器形がどの時期に存在したのか解明されていないことに原因が求められるのである。更に土師質土器について山本寿々雄氏が指摘[註7]している様に土器焼業の職人が『甲斐国現在人別調』によってその下限が明治期前後まで及ぶとなると，連綿と続く土器編年の確立をまたなければその時期については軽はずみな断を下すことはできないのではないかと思われる。

（伝）岩崎館跡出土の土師質土器は，一応甲斐国分寺講堂跡出土例に近い器形であり，時期もそれに近いものと考えられるが，今回の調査は館跡と思われる地の極一部にすぎず，また出土した皿形土器などが館跡全体の経営年代に関係あるものか，関係あるとすればいつ頃の時期に対応できるものかが明らかにできない限り推定の域を出な　のであるが，いずれにしても最下層より出土したものであり，層位の逆転のない限り館跡経営時期の最も古い時期に対比できるのではないだろうか。

註1　拙著「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」『甲斐考古』12の2

註2　末木　健「平安時代以降の土師質土器の編年について」『信濃』第28巻9号

註3　拙著「山梨市・日下部中学校保管の同校庭遺物出土の土師器」『史陵』5号

註4　末木　健「甲斐国分寺講堂出土の土師器について」『甲斐考古』13の1

註5　小型土器は過去の平安時代住居址の調査例では，ほとんど小型土器のみを出土する住居址の例が多いのであるが，2～3の住居址からは土師器杯形・皿形土器に伴って出土した例があり，これから土師器に伴っているものと推定され，かつ小型土器については

出土状況から非日用什器の性格を付与した。よって平安時代中期の11世紀後半（晩期II－5式）ごろからは，日用什器である皿形・杯形土器は土師土器，特殊な器形たとえば小型土器（皿形土器，器台形土器）は土師質土器といった用途別に性質の異なる胎土が用いられる様になったと考えている。その後のある時期（12世紀末の日下部中学校々遺跡出土品第6類以降と考えるが明確な形では確認されていない）からは日常什器も特殊な器形の小型土器についても同質の胎土により製作されたものと，(伝)岩崎氏館跡，(伝)勝沼氏館跡の出土品を通して観察できるのである。この胎土の転換が何の原因でなされたかは現在まで明確にできない。ただし，皿形土器が土師器の杯形・皿形土器の什器に該当するか否かは断定できないが，陶器類の出土もあまり多くないことも指摘できる。

註6　田代　孝外「勝沼氏館跡調査の現状と課題」『甲斐路』野口二郎会長追悼特集号

註7　山本寿々雄『甲斐考古』13の1

総　　括

幾回かの農耕地等の改変が加わり，或は現在にその一部を伝えているのかも知れない。(伝)岩崎氏館跡付近の緊急調査によって，地下に埋没されている遺構を，どの程度年代的にまとめあげ，復元出来るのだろうか。或は具体的な館跡に実名を与えることが，年代と共に可能か。

また近世のものが，或は中世の遺構がと，そのような問題を背負いしかも模索をつづける発堀調査であった。きわめて短期間の間にこれが処理をしなければならないという至上命でもあり，限られた人員と構成，他に職をもちながら力の限界に近いまで努力をはらったが，われわれの日頃の勉強不足もあって，なお適切に処理し得なかった点を心苦しく，大きな反省点として冒頭にかかげなければならない。

勿論古絵図等も伝わり，或はそれらの援用によってではなく，模索しつづけながらのトレンチ設定でもあり実名を与えうる各搬のデーターの検索こそ必要としたのである。

奥田直栄氏がいっているよう[註1]な実感，即ち『城館址の発堀の度に思い知らされるが，現地表の凹凸は，しばしば全く当てにならない』とする見識が脳裏からはなれようとしない。確かにそうなのではないだろうか。何となれば，当時そのままを伝えているという保証が何に一つあるわけではないからなのであり，今回の発堀調査の処理にあたっても，これが即岩崎氏六代の館であるという論拠を，物を通して実証させ，引出し得なかったことは，改めて（伝）岩崎氏館跡という以外に何の智恵も出し得なかったのである。

もっとも主郭部分の調査であったのではなく，土塁を含む周辺部，溝であったので充分な年代考証をしうる遺抑（日常雑器の放棄）に欠如するからでもあろうが，喜田真吉博士の言葉を引用されている『地名，伝承を軽視してはならない。しかしこれに拐われすぎては考察を誤る』末永雅雄博士[註2]の飛鳥京跡調査私見に見られるのと同様な思いがすることである。或はこの種の考慮について，その好例を，同報告の飛鳥板蓋宮についてあげるならば現在地にほぼ間違いないとされ，発堀した遺構は史跡公園として広く紹介されているこの地の調査の中間報告に，発堀中の遺構が，飛鳥板蓋宮だとするのは極めて難しいとする同博士の逆説的見解を思い起していただきたいのである。というのは筆者も機会あるごとにのべておいたように，地下における遺構の重復と層位的序列の重視という点であるからである。

しかも遺物そのものが伝世する可能性をもちながら次第に埋没するといった具合に同じ陶磁片についても，製作年代が文書の上から明確であり，或は陶磁器と共に出土した他の遺物に紀年銘のある場合があるが，それらの条件下にあってはじめて当該品即ち遺物の相対年代が考えられるものである。勿論層位的に顕現された資料に基づくことはいうまでもないところであって，今回の(伝)岩崎氏館跡の場合も，或は近在に伝えられる館跡も理は同じことといえよう。或はさらに建築史の上からも当然理解さるべき館跡というこれら一連の構造物，当然ながら礎石

を伴う建物である以上は，そこに表現された技術なり，復元の形態をこと更らに問題としなければならないことはいうまでもあるまい，例えば空間に占める巨離即ち尺についても考究されてよいであろうし，中世住居と近世住居の相違点，即ち具体的にいえば，中土間の消失等の中に相違点が見出される点である。そのことが埋没している礎石の中にも当然読みとれることではないだろうか。このようにいくつくの問題点を模索しながら，道路敷予定内にトレンチの設定を見たところであった。その結果については山崎金夫君がのべる第3章～第4章のとおりである。

さて中世武士が居住する屋敷というものがその屋敷内に，或はその近くに手作地を有し，散在する耕地は農民の手によって小作されているというパターンは本県についても散見する史料によってその一部が裏付けられている。例えば早くから注目されているものに，中巨摩[註3]郡西花輪内藤文書の天正10年（1582）『窪八幡内山以下宗覚分並窪田分十二貫文古上条内手作三名分文石田屋敷被官等之事右本給不可有相違之状如件』の如きものがそれであり，同郡芦[註4]安村名執文書に見られる『名田手作』もその例に外ならない。なおまた甲斐国の豪族屋敷に関係する史料中に『名』『名田』屋敷という文字が見出されることについても先学が指摘しているところであり甲州法度之次等には『私領之名田』の売買を許していることによってもうなづけられるところであるが，伝岩崎館址近在についてもこのような歴史の背景があったのかも知れないことは位置や自然環境の中で考慮されてよいだろうと思う。特に地名に『山田』『深田』など捨て難いものが残っていることに注意さるべきではないだろうか。

なお5号トレンチの水田畦畔中の石組について人頭大の河原石のあることである。具体的遺物の介在はなかったが，岩石を下から積上げる場合に注目しなければならないことは，その積上げによる誤差は大きく，例えば平面の角が直角をなす場合は殆んどない点である。即ち任意に歪んだ形である点，古いパターンとしてあげておこう。この種の石積について当然今後の館跡調査においても参考とされるのではあるまいか。敢て付言しておきたい。

次に第6号トレンチより出土した夥しい土師質土器について坂本美夫がまとめているがその中で特に胎土について，石英，雲母，赤色スコリアなどの鉱物の混入をあげている点を注目し参考例として現在まで本県唯一の須恵器，窯跡である東八代郡境川村藤垈の牛后沢のものにもこの種の混入物のある点を併せ考え，地方色のあるものとして他の地域のもと区別することが出来よう。最近明らかにされてきた東京都葛飾区青戸所在の葛西城址出土のこの種の土器を拝見する機会を得たのであるが，胎土比較で，極めて明白に区別されよう。ということは，夥しい土師質土器のその生産はやはり地元の土であり他からの移入品としての雑器ではないということであろう。このことに関する具体的な窯跡の追せきまでにはいっていないが，甲府市郊外の甲運周辺の地域に或は該当しようか，将来の問題として見守ってみたいと思う。

ところで近世の書物である甲斐国志，或は甲斐国古城跡志等に伝承される，城館跡外の建造

物について，どの程度，現存する当該時代の古地図に記載され，後世に伝えられているのかを知る手がかりの一つとして，その製作年代及び幅が考察信用されるものとしてあげたいものに，内閣文庫（国立公文書館所蔵）の甲斐国絵図と東京国立博物館所蔵の五街道其外分間見取延絵図がある。

前者は昭和49年5月13～18日に国立公文書館で公開展示されたもので，親しく長時間をかけて詳細に検討する機会に恵まれたのであるが，この甲斐国絵図1枚は，縦3m85cm横3m83cmのもので，極彩色，延宝年間（1673年～1680年）の製作と推定されるが，伝えられるような岩崎氏館，或は隣接地所在勝沼氏館の表示は全くない。なお石高は合計は甲斐国四郡の石高合計24万5千2石九合と，元録度郷張より少なく正保度郷張よりも若干多いところが全体として注目される。

次に東京国立博物館所蔵の五街道其外分間見取延絵図は幕命により道中奉行が，多数の人員を動員して十余年を費し（寛政年間1789～1801年）に着手，文化3年（1806年）に完成したもので，実地の測量や調査を経たもので，1部が江戸城内に2部は道中奉行所におかれたものというが，その中の1部が現東京国立博物館に所蔵されている。総巻数は91本巻物仕立で各巻の天地2尺一巻の延長最大は10間に達するもので，縮尺は1里を曲尺の7尺2寸として道路の迂回曲折は方位に従って真直に伸し，国や郡の境，村の区分，河川の源や未流，寺院や宮祠の区域，集落の両堺を道路に接するものは朱の丸印で区分されている。

当時見聞出来る範囲の山，川，城，市，寺観，霊廟，古跡，古墳などで道路の傍にあるものについては遠近にしたがって具に載せてあり，微細にわたっているものである点注目される。町方についても，本通の細かい町，橋（石橋）大名屋敷，等数多くにわたっているのである。そこで特に高千百九拾八石余甲州山梨郡，勝沼宿勿論岩崎村を含むに目をむけて見た場合，その例を字上町石橋，宿入口上町，夏秋上行寺，金剛寺，氷川神社，岩崎村等を先ず捨い本陣等全体の家並，家かず配置等距離も正確で近世の考古学の発堀調査上参考となる点が多い。ところで延絵図の中に伝えられる三重堀を有する勝沼館。或は岩崎館等の表現は見当らず，それらしき位置を探り家並等も考慮して見た場合も（伝）岩崎館跡付近には家並は見当らないのに反して，（伝）勝沼館跡付近と考えられる箇所にこの近世の家並があることに目を引く点である。いずれ機会を見て詳細にふれたいが，同年代の近世末期の地誌大観として同文化11年（1814年）完成を見た甲斐国誌と対比させ考察してみることは近世或は中世考古学の上に思わない発見を見ることも予測出来ようかと考えている。というのも冒頭に引用した奥田直栄氏の城館跡の発堀の度に思い知らされる現地表の凹凸は，しばしば全く当てにならないとする調査実例が現に存するのと同様に，筆者もしばしば指摘する甲斐国誌の編者においてすら春日居町寺本にある寺本廃寺を，甲斐国分尼寺とし，或は一宮町字東原にある甲斐国分尼寺を，屋敷跡即ち清明屋敷（伝）とする甲斐国古城跡志編者の，その見聞にもこれまた誤認が内在するところであり『居館ノ形中ニ四角ニ敷キ形礎ナド在其外内堀在テ其外土手構石垣等数百間有り其地相イカニモ古

メカシク居モ』とする内容自体も問われるところであって，後学の吾々のこれら近世書物の引用をするに当りきわめて慎重に検討を加えなければならない点ではなかろうか。

幾多の改変があって現在に伝えるかも知れない(伝)岩崎館跡も，山田，深田等から推測することの出来る，豪族屋敷の或は手作地として，水がかりのよい水田経営の出来る自然環境はととのっていたことは想像できるところである。それにしても，若し岩崎氏6代の館跡の実像として，これが嘉元～延元（1303年～1339年）の古文書による『岩崎一分之地頭武田筑前守源武政』或は正中3年(1326年)古文書による『深沢郷之地頭武田八郎助政同四郎三郎政春』の名が見えるのであるがこれを当該地に直ちに当てはめうるかどうかの結論は未だ先のことなのではあるまいか。(伝)岩崎館跡とする伝の意味する所似もまたここにあるわけで，鎌倉から室町期にいたる間の出土遺物の相対年代の確認には，現在のところ出土資料による限界があって，その多くを望めず，しかも，紀年名を有する塔婆等皆無であって見れば，近世の書物である甲斐国志，甲斐国古城跡志にある伝承の域をぬけ切れないのがあることは当然かも知れまい。

いずれにしても中～近世の考古学研究の上に欠かせない五街道其外分間延絵図の分刊がはじまりやがては甲州道中のものが世に出ることとなろうが，名称だけしか知り得なかった原本の刊行がまたれるところであり，(全百三巻・原本九十一本）その恩恵に浴することはかり知れないものがあると思うのである。

筆をおくにあたり，快く，甲州道中，勝沼宿のコピーを与えられた，東京国立博物館図書室長，樋口秀雄氏に深謝すると共に，不鮮明ながら（原本は彩色である）本書に所収して今後この種一連の研究の展望の一助とし，(伝)館跡の研究のうえに，また実名を与えうる中世～近世考古学のために参考となりうれば幸である。

註1 奥田直栄：繋の城と寄居　岩波講座日本歴史月報18　1976

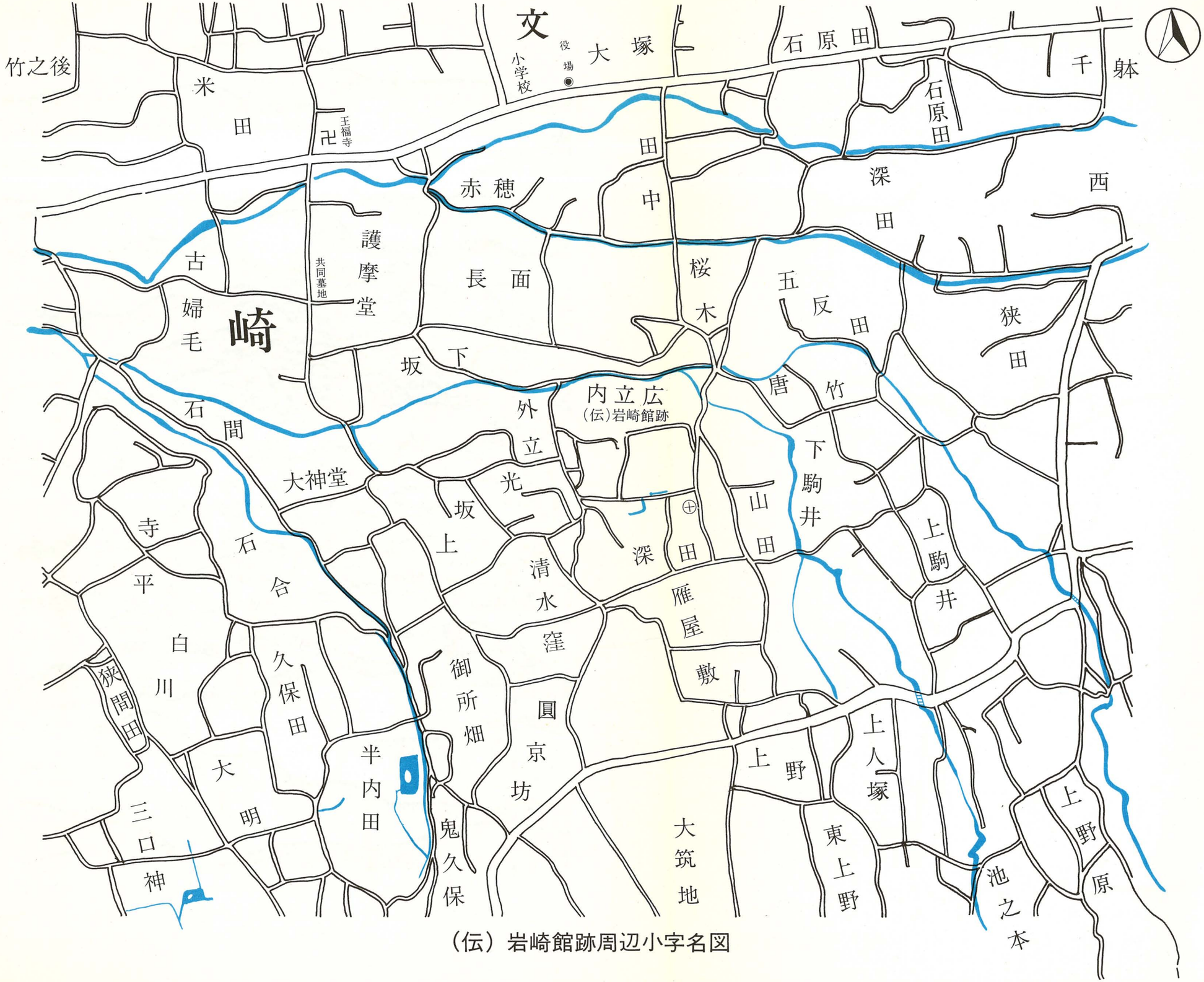
註2 末永雅雄：飛鳥京跡(1)　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第26冊　1974

註3 中巨摩郡　西花輪内藤氏文書

註4 同　　芦安村名執氏文書

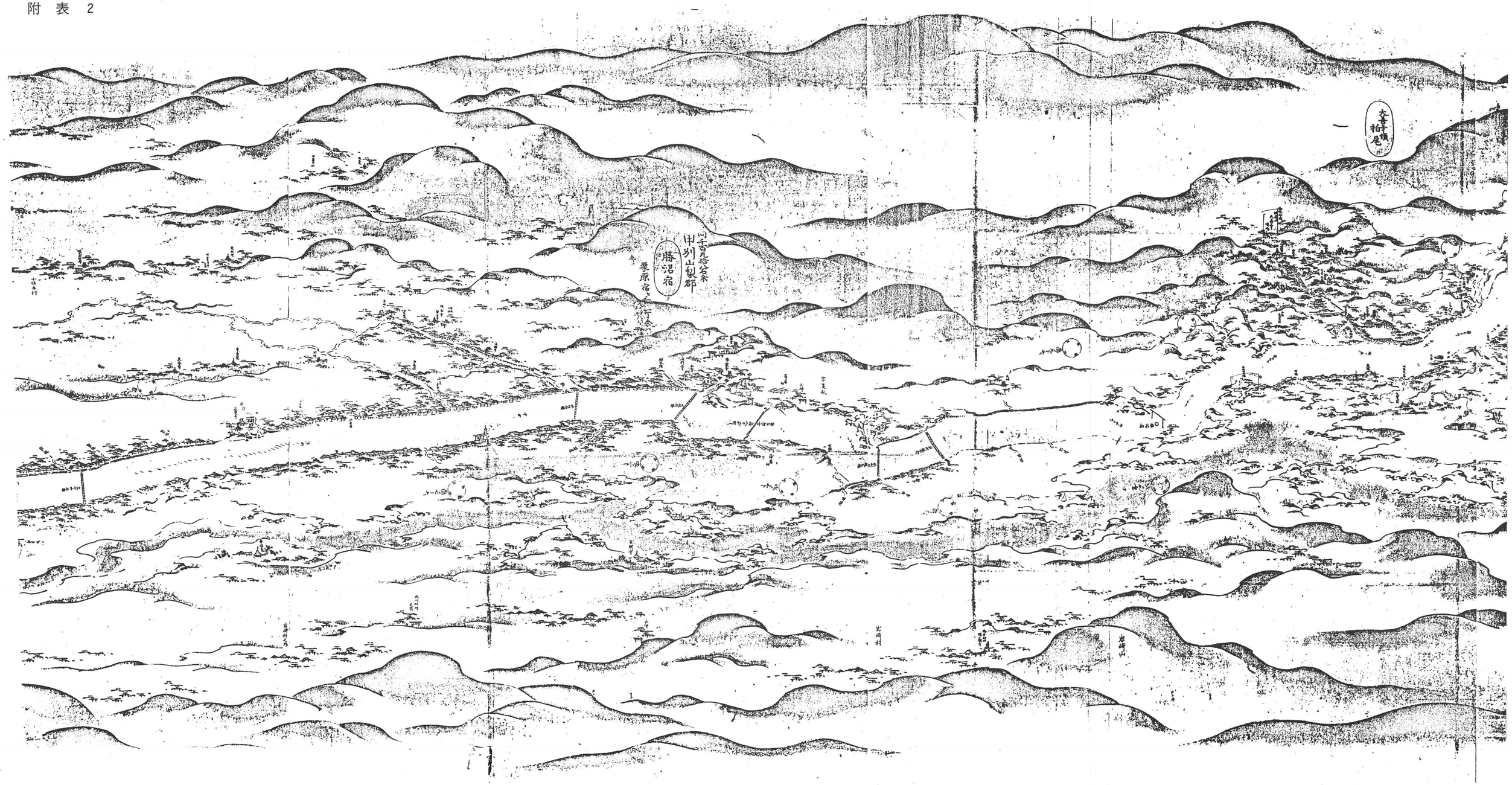
附表 1

岩



(伝) 岩崎館跡周辺小字名図

附　表　2



図版　1

(伝)岩崎館跡遠景（南方より）

1号トレンチ

図版 2

2号トレンチ

6号トレンチと遺物出土状況（拡幅前）

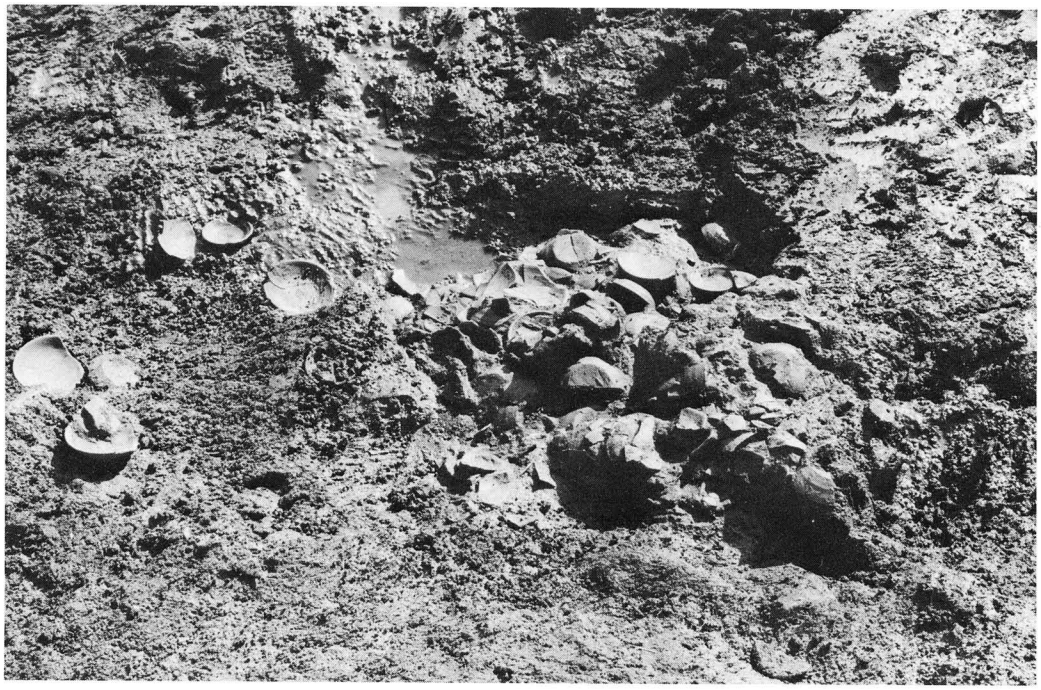
図版　3

5号トレンチ（ポールの下が堀底）

5号トレンチ　土塁上より鉄族出土状況（移植ゴテの部分）

図版　4

6号トレンチ（拡幅後）



6号トレンチ　堀内土師質土器出土状況

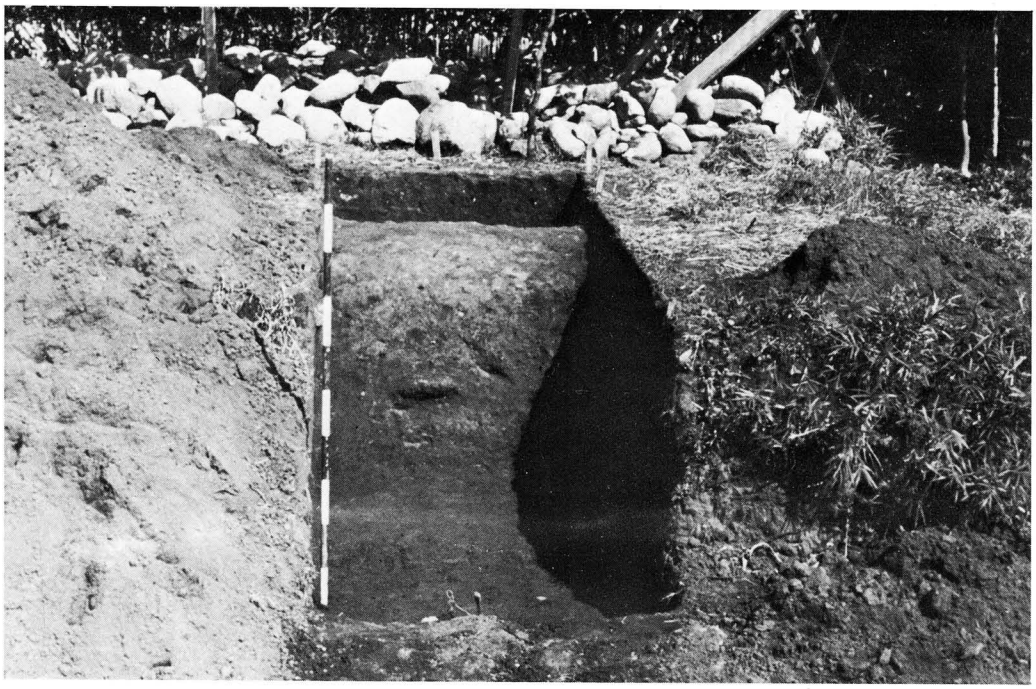
図版　5

6号トレンチ排水暗渠遺構

6号トレンチ排水暗渠遺構、蓋石除去後状況

図版　6

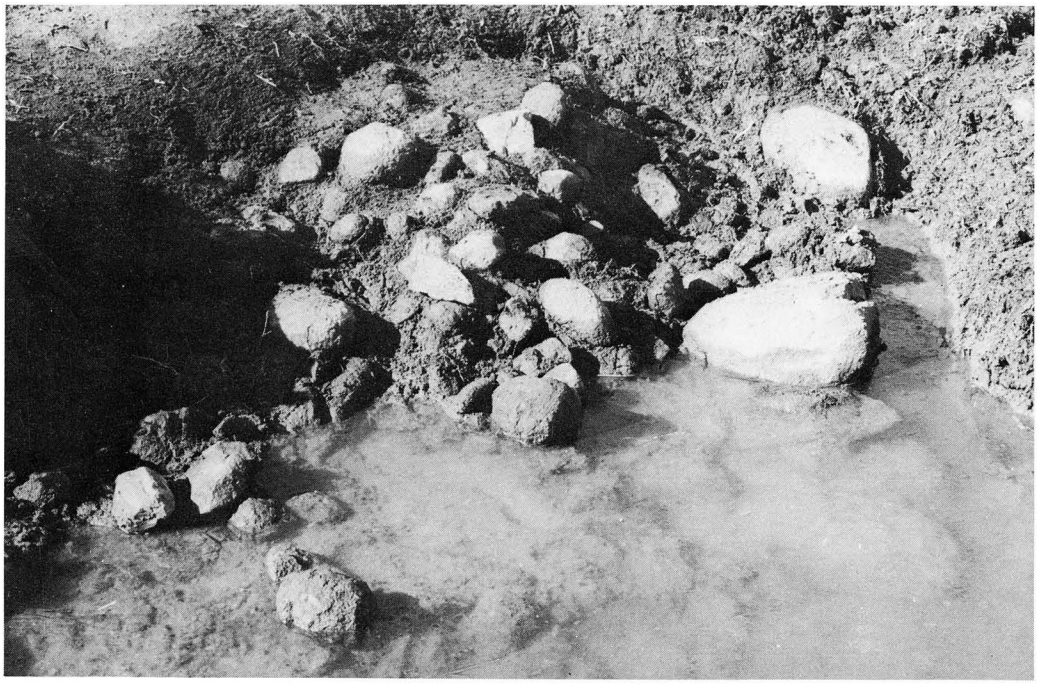
6号トレンチ　排水暗渠遺構と水落ち部の石組の状況



7号トレンチ・土墨址

図版　7

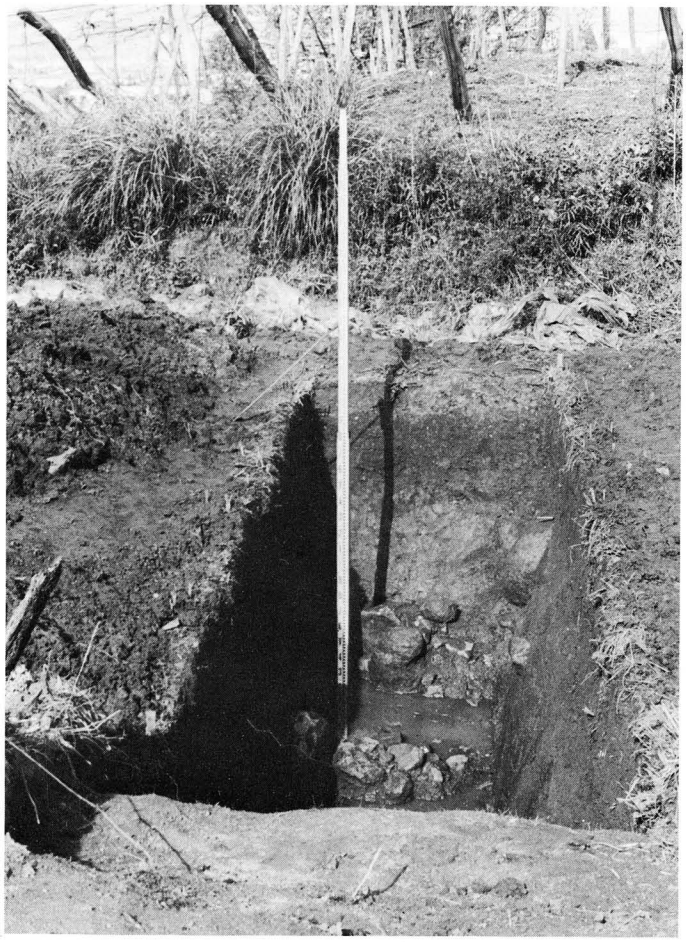
7号トレンチ土墨内より土師質土器片の出土の状況（矢印）



9号トレンチ　石積及び裏込石

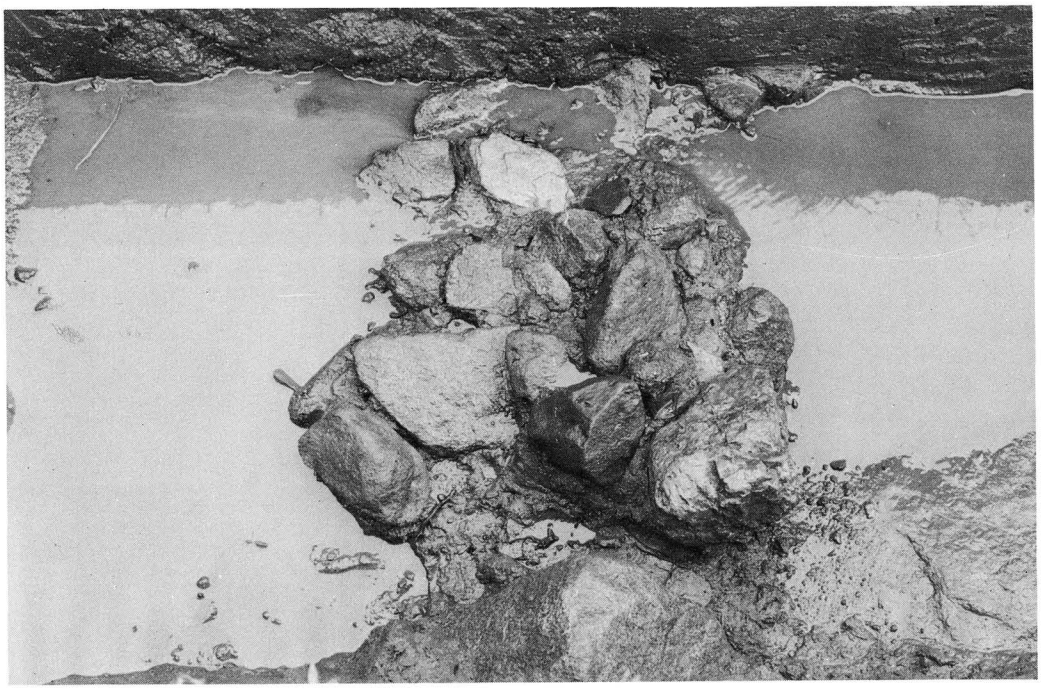
図版　8

10号トレンチ（ピットは葡萄植栽の攪乱）



10号トレンチ堀内

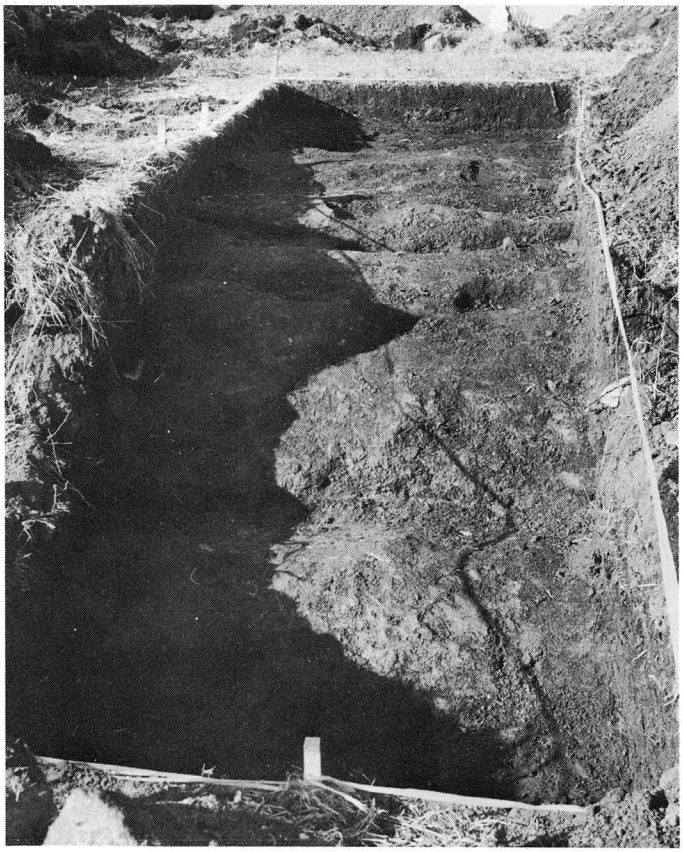
図版　9



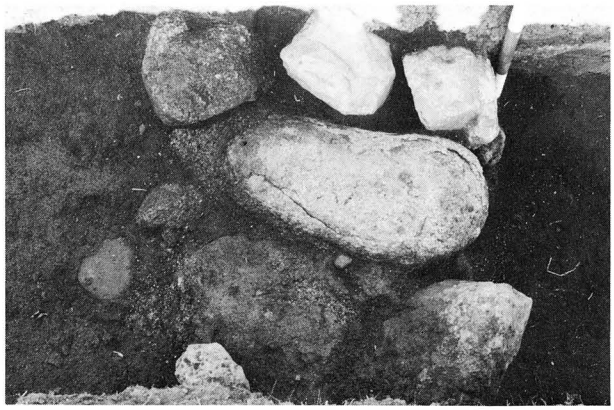
10号トレンチ堀内石組

10号トレンチ堀内木製品出土状況

図版　10

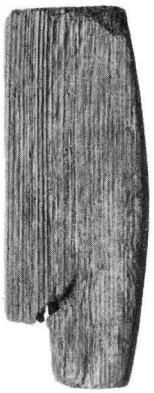


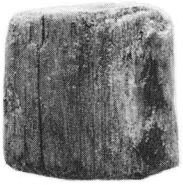
12号トレンチ



18号トレンチ石組

図版　11





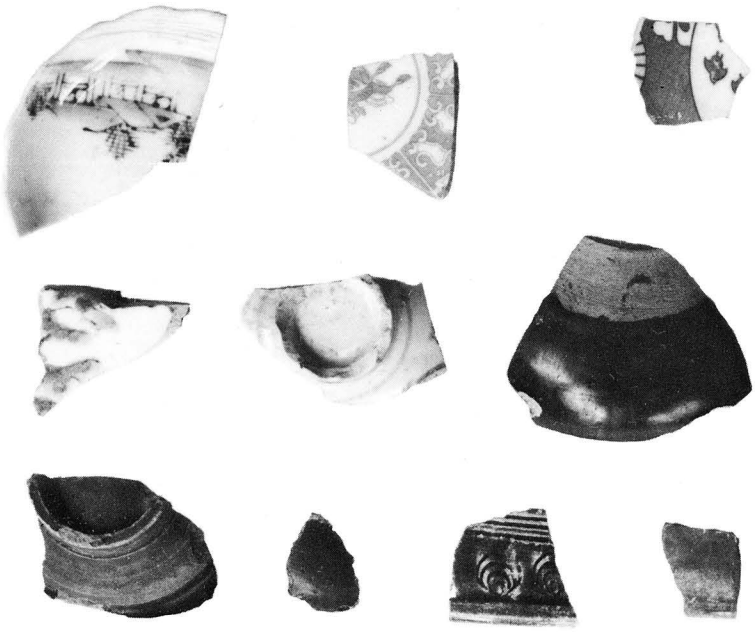
木　製　品

鉄族

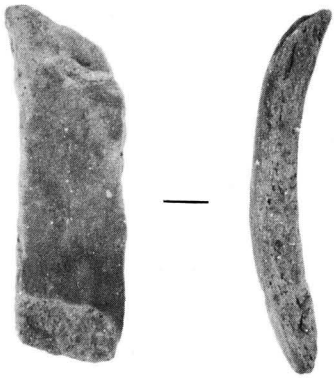
鉄斧

鉄　製　品

図版　12



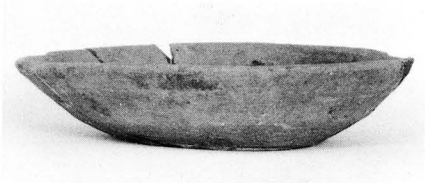
陶器・磁器



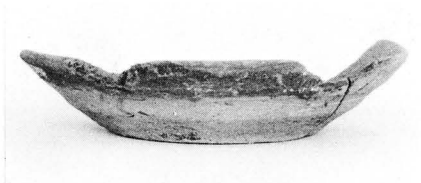
5号トレンチ　堀内出土近世瓦

7号トレンチ　土塁内出土土師質土器

図版　13



第６図－14

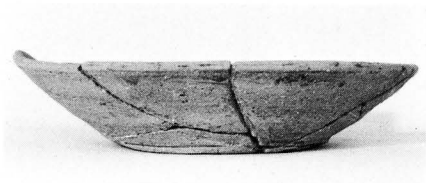


第23図－７

第25図－８

第26図－２

第26図－10



第26図－14

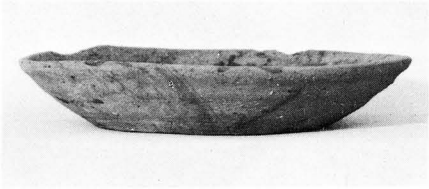
第27図－８

第27図－10

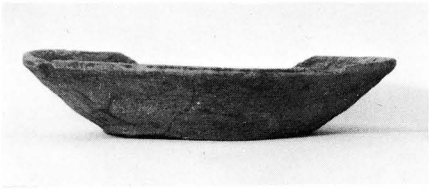
第27図－11

第27図－12

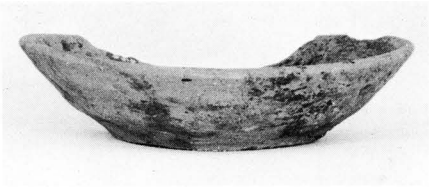
土師質土器



第27図－12



第27図－13

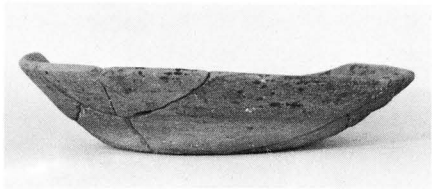


第28図－ 6

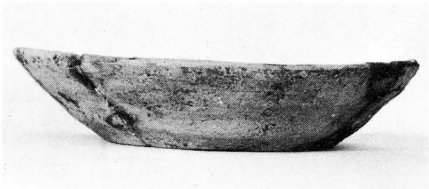
第28図－ 7

第28図－11

第28図－19



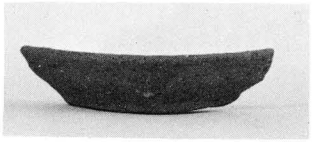
第29図－18

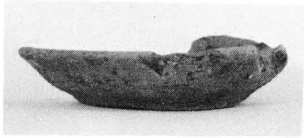


第29図－19

土師質土器 2

図版　15


第30図－11

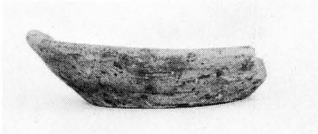

第30図－2

第31図－1

第32図－1

第32図－7

第32図－12

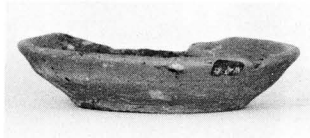

第32図－18

第33図－1

第33図3

第33図－4

第33図－9


第33図－15

第33図－17

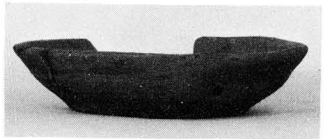
第34図－12

第34図－14

第34図－21

第35図－5

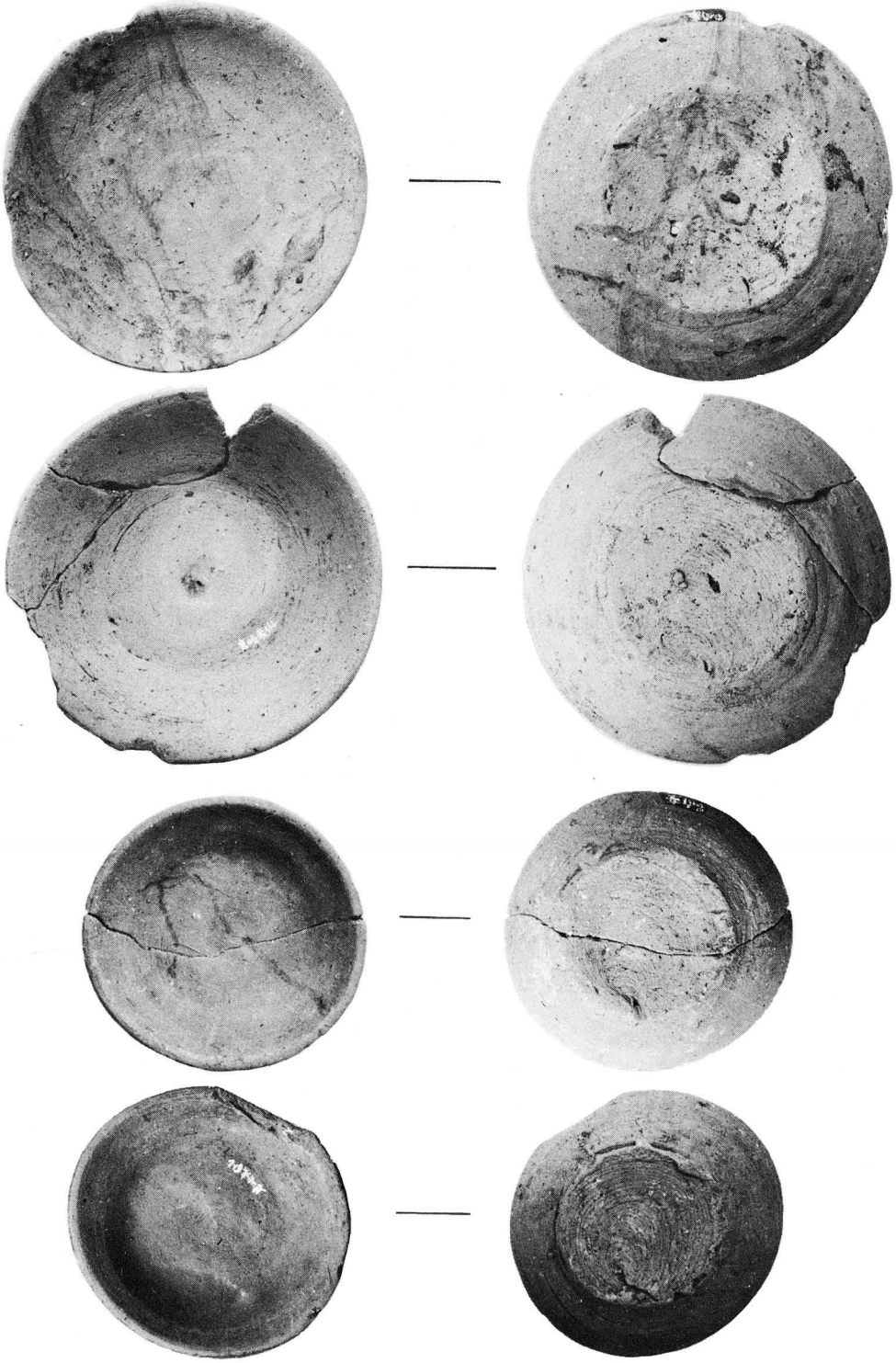
第35図－6


第35図－15

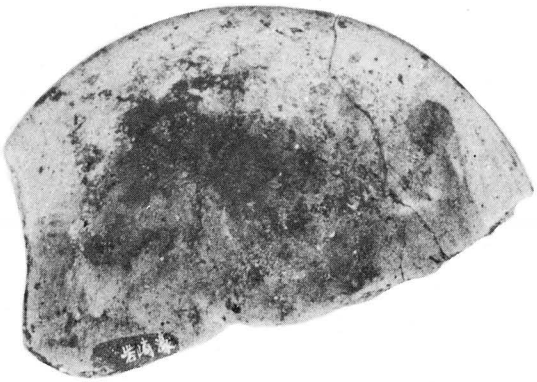
第35図－16

土師質土器 3

図版　16



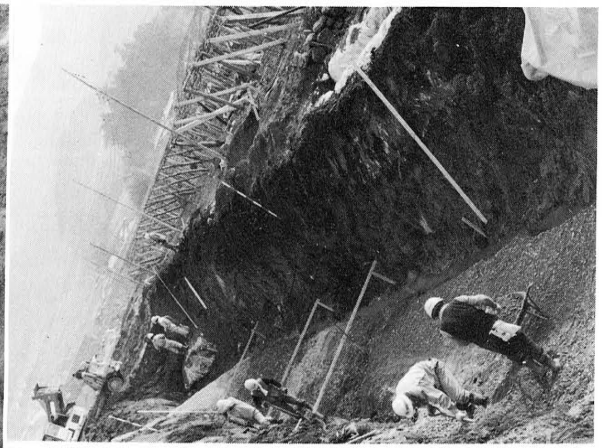
土師質土器内外面



6号トレンチ出土　内面墨付着の土師質土器

7号トレンチ　表土出土陶器片

路線内南側の泥層（ポールは堀部の東限を示す）



側壁工事中確認された泥層（ポール）

昭和50年度

—勝沼バイパス建設に伴う—

（伝）岩崎館跡発掘調査報告書

印刷　昭和52年３月25日
発刊　昭和52年３月31日

発行所　山梨県教育委員会
印刷所　株式会社少国民社